

# Oracle® Financial Management Analytics

## Administration Guide

リリース 11.1.2.2.300

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

---

ドキュメントのアクセシビリティについて .....	5
<b>第 1 章 概要</b> .....	7
管理タスク .....	7
Oracle Financial Management Analytics のヘルプへのアクセス .....	8
関連ドキュメント .....	9
<b>第 2 章 セキュリティの管理およびユーザーの認可</b> .....	11
ユーザー認証 .....	11
アプリケーションおよびデータのセキュリティ .....	12
CSS トークンを使用した外部ユーザー・ディレクトリ向けのシングル・サイン オンの設定 .....	13
<b>第 3 章 製品アーキテクチャの理解</b> .....	19
アーキテクチャの概要 .....	19
Oracle BI リポジトリ (RPD) .....	22
物理レイヤー .....	23
ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー .....	25
プレゼンテーション・レイヤー .....	25
Oracle BI プレゼンテーション・カタログ .....	26
<b>第 4 章 ハードウェアおよびソフトウェアの前提条件の設定</b> .....	27
Oracle Financial Management Analytics 管理者に対する認可 .....	27
システムおよびハードウェアの前提条件 .....	27
ソフトウェアの前提条件 .....	28
サポートされているコンポーネント .....	28
<b>第 5 章 Oracle Financial Management Analytics のインストール</b> .....	31
デフォルトのインストール・パス .....	31
完全なインストールの実行 .....	32
カスタム・インストールの実行 .....	37
Oracle Financial Management Analytics のアンインストール .....	41
<b>第 6 章 Oracle Financial Management Analytics の構成</b> .....	43
構成ユーティリティでの選択 .....	43

構成チェックリスト .....	44
構成ユーティリティの実行 .....	45
製品構成の実行 .....	47
Financial Management の製品構成の実行 .....	47
Financial Close Management の製品構成の実行 .....	55
FDM の製品構成の実行 .....	57
システム構成の実行 .....	58
Financial Management のシステム構成の実行 .....	59
Financial Close Management のシステム構成の実行 .....	60
FDM のシステム構成の実行 .....	61
BI サーバーへのカタログおよびリポジトリのアップロード .....	62
<b>第 7 章 Oracle Financial Management Analytics の起動 .....</b>	<b>65</b>
<b>第 8 章 Oracle Financial Management Analytics のカスタマイズ .....</b>	<b>67</b>
財務値のスケーリング .....	67
列のソート .....	68
プロセス管理レポートでの日数の設定 .....	69
条件のフォーマット .....	70
レポート名の変更 .....	72
会社のロゴの追加 .....	72
ダッシュボード・レポートの非表示 .....	73
<b>付録 A. パフォーマンス・チューニング .....</b>	<b>75</b>
パフォーマンス・チューニングのドキュメント .....	75
単一の BI サーバーに対するキャッシュの設定 .....	76
クラスタ環境に対するキャッシュの設定 .....	77
ロギングの無効化 .....	79
<b>用語集 .....</b>	<b>81</b>
<b>索引 .....</b>	<b>93</b>

---

# ドキュメントのアクセシビリティについて

---

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

## Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。



# 1

## 概要

### この章の内容

管理タスク .....	7
Oracle Financial Management Analytics のヘルプへのアクセス .....	8
関連ドキュメント .....	9

Oracle Financial Management Analytics では、一連のダッシュボードを通じて、経営幹部が組織の業績の財務面や財務以外の面を一元的に把握できます。

組込み済の分析機能により、既存の Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management および Oracle Hyperion Financial Close Management アプリケーションの集計データを使用して、キー・パフォーマンス・インディケータ、決算プロセスのステータス、およびその他のメトリックが表示されます。ダッシュボードを使用すると、ビジネスや財務シナリオに応じて、アクセス可能な形式でデータを分析できます。

構成ユーティリティを使用すると、アプリケーションのメタデータを事前定義済のダッシュボードにマップできます。また、構成ユーティリティでは、EPM アプリケーションと Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の統合も可能です。セキュリティは WebLogic で管理され、これらの各アプリケーションのセキュリティ・アクセス権限は Oracle Financial Management Analytics で認識されます。

『Oracle Financial Management Analytics 管理者ガイド』は、Oracle Financial Management Analytics のインストールおよび構成に関する詳細情報を提供しています。

ダッシュボードとレポートの詳細および Oracle Financial Management Analytics の使用については、『Oracle Financial Management Analytics ユーザー・ガイド』を参照してください。

## 管理タスク

Oracle Financial Management Analytics の管理者(admin)は、Oracle BI EE および Financial Management の管理権限がプロビジョニングされたユーザーです。管理者は、次のタスクを実行できます:

- Oracle Financial Management Analytics をインストールします。第 5 章「Oracle Financial Management Analytics のインストール」を参照してください。
- Oracle Financial Management Analytics を構成し、勘定科目をマップします。第 6 章「Oracle Financial Management Analytics の構成」を参照してください。

- ダッシュボードの使用性を最大化するためのカスタマイズ。第 8 章「Oracle Financial Management Analytics のカスタマイズ」を参照してください。

## Oracle Financial Management Analytics のヘルプへのアクセス

このリリースの Oracle Financial Management Analytics では、次の場所から Oracle Financial Management Analytics ユーザー・ガイドおよび Oracle Financial Management Analytics 管理者ガイドのヘルプにアクセスできます:

- 「スタート」メニューから
- アプリケーション内の POV セレクタから
- Enterprise Performance Management System リリース 11.1.2.2.000 のドキュメント・ライブラリから

---

**注意** Oracle BI EE グローバル・ヘッダーの「ヘルプ」メニューには、Oracle BI EE のヘルプおよびドキュメントのみが表示されます。

---

どのアクセス・ポイントからも、Oracle Technical Network (OTN) の EPM System リリース 11.1.2.2.000 のドキュメント・ライブラリに移動します。

次のドキュメントは、PDF、HTML または MOBI (Kindle) 形式で入手できます:

- Oracle Financial Management Analytics 管理者ガイド
- Oracle Financial Management Analytics ユーザー・ガイド

**注:** Oracle BI EE のドキュメントにアクセスする場合は、Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition のドキュメント・ライブラリ ([http://download.oracle.com/docs/cd/E10415\\_01/doc/nav/portal\\_booklist.htm](http://download.oracle.com/docs/cd/E10415_01/doc/nav/portal_booklist.htm)) を参照してください。

▶ EPM System リリース 11.1.2.2.000 のドキュメント・ライブラリからドキュメントにアクセスするには:

1 次のいずれかの場所で「ヘルプ」を選択します:

- 「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle Financial Management Analytics」、「Help」の順に選択します
- アプリケーションの「POV セレクタ」列で、「ヘルプ」をクリックします。

OTN にある EPM System リリース 11.1.2.2.000 のドキュメント・ライブラリが表示されます。

2 左側のペインで、「Financial PM Applications」タブを選択します。

3 右側のペインで、「Oracle Financial Management Analytics」までスクロールします。

4 表示するドキュメントの隣で、必要な形式を選択します:

- PDF
- HTML
- MOBI (Kindle に表示する場合)

## 関連ドキュメント

Oracle Financial Management Analytics は、既存の Oracle BI EE の機能上に構築されており、リポジトリやカタログの管理など、様々なタスクを実行します。情報の繰返しを最小限に抑え、関連情報の精度を維持するために、Oracle BI EE および Financial Management の既存ドキュメントの相互参照が作成されています。関連ドキュメントのリストは、表 1 を参照してください

- ▶ Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition のドキュメント・ライブラリにアクセスするには、[http://download.oracle.com/docs/cd/E10415\\_01/doc/nav/portal\\_booklist.htm](http://download.oracle.com/docs/cd/E10415_01/doc/nav/portal_booklist.htm) に移動してください。
- ▶ Oracle Enterprise Performance Management System のドキュメント・ライブラリにアクセスするには、<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/performance-management/documentation/index.html> に移動してください。

表 1 OBIEE の関連ドキュメント

製品	ドキュメント	製品またはタスク
Oracle Enterprise Performance Management System	Oracle(R) Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド	EPM System 製品のインストールおよび構成に関する情報
EPM System	Oracle(R) Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド	次のトピックに関する情報: <ul style="list-style-type: none"> <li>● ユーザー・プロビジョニングおよびセキュリティ役割の設定と管理</li> </ul> <p>注: Oracle Financial Management Analytics の認可されたすべてのユーザーには、Financial Management、FDM および Financial Close Management に対する権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● SSL、SSO、セキュリティ・エージェントおよびカスタム・ログインなど、セキュリティに関する技術情報</li> </ul>
Oracle Financial Management Analytics	Oracle(R) Financial Management Analytics ユーザー・ガイド	Oracle Financial Management Analytics レポートの使用法に関する情報
Financial Management	Oracle Hyperion Financial Management ユーザー・ガイド	Financial Management の使用法に関する情報
Financial Management	Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド	Financial Management の設定および管理に関する情報
Oracle Fusion Middleware	Oracle(R) Fusion Middleware コンセプト・ガイド	Oracle BI 分析に関する情報

製品	ドキュメント	製品またはタスク
Oracle Fusion Middleware	Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ・ビルダー・ガイド	プレゼンテーション・レイヤーの作成と管理、および式ビルダーを使用した財務勘定科目のマッピング方法の詳細
Oracle Fusion Middleware	Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド	NQSConfig.ini ファイルの構成設定および BI 管理ツールの詳細
Oracle Fusion Middleware	Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 開発者ガイド	BI プレゼンテーション・サービスおよび BI サーバーに関する情報
Oracle Fusion Middleware	Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド	シングル・サインオン(SSO)、および OBIEE のガイドで定義されているその他のセキュリティ設定の設定方法に関する情報
Oracle BI EE	Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド	Oracle BI プレゼンテーション・カタログの詳細
FDM	『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management 管理者ガイド』	Financial Data Quality Management の機能と利点に関する情報。

# 2

## セキュリティの管理および ユーザーの認可

### この章の内容

ユーザー認証.....	11
アプリケーションおよびデータのセキュリティ.....	12
CSS トークンを使用した外部ユーザー・ディレクトリ向けのシングル・サイン オンの設定.....	13

セキュリティおよびユーザー認証は、Oracle Financial Management Analytics では設定されませんが、関連製品の既存の認証は確認されます:

- ユーザー認証は、Oracle BI EE 管理を使用して設定されます。
- Financial Management、FDM および Financial Close Management のユーザー役割およびセキュリティ・アクセス権は、Oracle Hyperion Shared Services で定義されます。Oracle Financial Management Analytics では、これらのセキュリティ・アクセス権に従います。

割当て済の管理者(admin)のみが、ダッシュボードを作成または変更できます。

**注：** Oracle Financial Management Analytics に直接ログインした場合、ダッシュボードから Financial Management を起動できません。

次の項を参照してください:

- [11 ページの「ユーザー認証」](#)
- [12 ページの「アプリケーションおよびデータのセキュリティ」](#)

## ユーザー認証

Oracle Financial Management Analytics の SSO は、Oracle BI EE を介して実装されますが、認証は Financial Management 経由で行われます。シングル・サインオンが機能するためには、Oracle BI EE と Shared Services が同じ LDAP/MSAD に接続している必要があります; そうでない場合、ユーザーが一致しません。

ユーザー・プロビジョニングは、Shared Services を介して設定されます。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

SSO およびその他のセキュリティ設定の詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド』を参照してください。

Oracle Financial Management Analytics が起動されると、ログイン情報は LDAP/MSAD ストアで照合されます。シングル・サインオン・トークンが生成され、ADM ドライバを介して Financial Management に渡されます。Oracle BI EE にログインするユーザーは、ログイン情報が Financial Management へのクエリーに使用されます。

リポジトリ (RPD) ファイルに接続 URL を指定する際、共有接続を使用している場合は、Shared Services の有効なユーザー名を入力する必要があります。そのため、そのユーザーを Financial Management アプリケーションにプロビジョニングする必要があります。Oracle BI EE にログインするユーザーには、次に示すように、レポートを表示する権限が必要です:

- 決算スケジュールの要約を除き、すべての Oracle Financial Management Analytics に対して、Financial Management のユーザー ID を使用します。
- 決算スケジュールの要約に対してのみ、少なくとも表示権限がある Financial Close Management のデータベース・スキーマ・ユーザーを使用します。

セキュリティの設定および管理の詳細は、次のガイドを参照してください:

- Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド
- 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』
- 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』

## アプリケーションおよびデータのセキュリティ

Financial Management アプリケーションおよびデータのセキュリティは、特定のセキュリティ・クラスとセキュリティ・クラス・アクセスを使用して、Financial Management 経由で設定します。Oracle Financial Management Analytics のユーザーが、レポートの Financial Management のデータにアクセスする場合、アプリケーションのデータ・セキュリティ設定に従います。

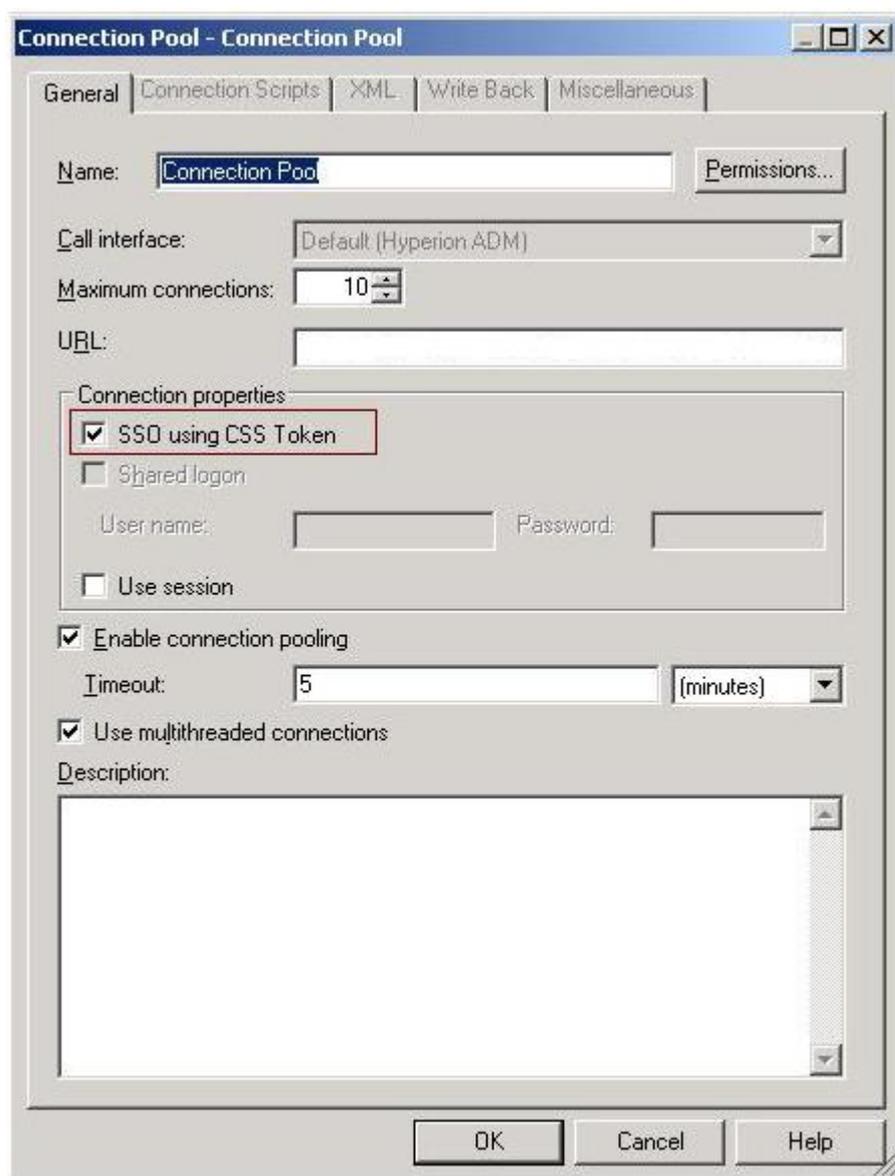
たとえば、ダッシュボードを表示しているユーザーに、East エンティティに対する Financial Management のアクセス権があっても West エンティティに対するアクセス権がない場合、そのユーザーは、Oracle Financial Management Analytics 内でも West エンティティのデータを表示できません。

**注:** 構成時に、アプリケーション全体にアクセス可能なログイン情報を持った Financial Management 管理者ユーザーを指定します。

Financial Management で選択された言語プリファレンスは、Oracle Financial Management Analytics に反映されます。たとえば、Financial Management のロケールとしてドイツ語が選択されている場合、ユーザーにはメンバー説明がドイツ語 (メタデータ) で表示されます。

## CSS トークンを使用した外部ユーザー・ディレクトリ向けのシングル・サインオンの設定

- ▶ CSS トークンを使用して、外部ユーザー・ディレクトリ (LDAP/MSAD) 向けにシングル・サインオンを設定するには、次の手順を実行します:
  - 1 Oracle BI EE と Shared Services が同じ LDAP または MSAD ストアに接続していることを確認します。
  - 2 オンライン RPD を開き、HFM 接続プールに移動します。「CSS トークンを使用した SSO」を選択し、BI サーバーを再起動します。



- 3 Oracle BI EE のインストール・パスから次のコマンドを実行し、OBIEE 11.1.1.6 の CSS 下位互換性タグを true に設定します。

例:

```
C:\OBIEE\instances\instance1\config\foundation\11.1.2.0> epmsys_registry.bat
updateproperty SHARED_SERVICES_PRODUCT/@COMPATIBILITY 11120
```

**注:** EPM 11.1.2.x を使用している場合は、互換性の設定は必要ありません。

- 4 regSyncUtil\_OBIEE-TO-EPM.zip をダウンロードします。(バグ 11725145)ユーティリティを解凍し、Readme の指示に従ってユーティリティを実行します。

**注:** EPM 11.1.2.x を使用している場合は、レジストリでこのキーの同期を必ず行ってください。

- 5 MSAD として外部ユーザー・ディレクトリを使用している場合は、次の追加の手順を実行します:

1. css.jar に IdentityAssertion 権限を付与する手順は、次のとおりです

1. BI ドメイン(主に管理サーバー)が実行されていることを確認します。
2. 次の場所にある wlst.sh または wlst.cmd を実行します

```
$MW_HOME/oracle_common/common/bin
```

3. 次に示すように、WLST 接続コマンドを実行します:

```
connect ("
WLS_ADMIN_USERNAME
", "
WLS_ADMIN_PASSWORD
", "t3://
HOSTNAME
:
ADMIN_PORT
")
```

例:

```
wls:/offline> connect("Administrator","Admin123","t3://
localhost:7001")
```

4. 次に示すように、WLST ランタイム・コマンドを実行します:

```
runtime()
```

例:

```
wls:/bifoundation_domain/serverConfig> runtime()
```

- 次に示すように、WLST `grantPermission` コマンドを実行します:

```
grantPermission(codeBaseURL="file:${hyperion.home}/common/CSS/  
11.1.2.0/lib/  
css.jar",permClass="oracle.security.jps.JpsPermission",permTarget="IdentityAssertion")
```

例:

```
wls:/bifoundation_domain/  
runtime>grantPermission(codeBaseURL="file:${hyperion.home}/common/CSS/11.  
1.2.0/lib/  
css.jar",permClass="oracle.security.jps.JpsPermission",permTarget="IdentityAssertion")
```

`grantPermission()` コマンドが正常に実行されると、次の情報が表示されます:

ロケーションが `domainRuntime` ツリーに移動しました。これは、`DomainMBean` をルートとする読み取り専用のツリーです。詳細は、

`help(domainRuntime)` を使用してください。

`IdentityAssertion` 権限が `css.jar` に付与された場合は、上のコマンドの実行後に、確認のメッセージが表示されます。

- 管理サーバー、管理対象サーバーおよび依存している OPMN プロセスを含め、BI ドメインをシャット・ダウンします。
- バグ 13059356 から `13059356.zip` をダウンロードし、圧縮されたファイルを次の場所に解凍します:

```
%BI_ORACLE_HOME%/OPatch/
```

- `%BI_ORACLE_HOME%` に `oraInst.Loc` が含まれていることを確認します。そうでない場合は、次を参照します:

```
%BI_ORACLE_HOME%\bifoundation\provision\scripts\bidomain\inst
```

そして `oraInst-template.Loc` を `%BI_ORACLE_HOME%` の場所にコピーして、`oraInst.Loc` という名前に変更します。

- コマンド・プロンプトを起動して、ディレクトリを次に変更します:

```
%BI_ORACLE_HOME%/OPatch
```

フォルダ。次の `OPatch` コマンドを使用して、`OPatch` を適用します:

```
opatch apply 13059356 -oh %BI_ORACLE_HOME% -jdk %BI_ORACLE_HOME%/jdk  
-invPtrLoc %BI_ORACLE_HOME%/oraInst.loc
```

成功のメッセージが表示されます。

コマンドが機能せず、次のようなメッセージとともにエラーが表示される場合: OCM 構成の応答ファイルが存在しないか、読み取ることができません。有効な応答ファイルを指定してください。次を実行してください:

次のコマンドを実行します:

```
%ORACLE_HOME%\ccr\bin\emocmrsp.bat -no_banner -output c:\out.rsp
```

次に、Opatch コマンドを実行します:

```
opatch apply 13059356 -oh "c:\obiee\oracle_bil" -ocmrf c:\out.rsp -jdk  
"c:\obiee\oracle_bil\jdk" -invPtrLoc "c:\obiee\oracle_bil\oraInst.loc"
```

**注:** OPatch は正常に適用する必要があります。

**注:** MSAD として外部ディレクトリを使用している場合は、上の手順を追加で実行する必要があります。

## 6 OBIEE で外部ユーザー・ディレクトリを構成する際に、jps-config.xml ファイルで virtualize プロパティが true に設定されているとします

```
BI_DOMAIN_HOME  
/config/fmwconfig/jps-config.xml
```

次の手順を実行します:

- setDomainEnv.cmd を編集します。次のパスから:

```
BI_DOMAIN_HOME  
/bin/
```

次のコマンド行を追加します:

```
Set EXTRA_JAVA_PROPERTIES=-Dcommon.components.home=  
%COMMON_COMPONENTS_HOME% -Didstore.identityAttribute=objectguid  
%EXTRA_JAVA_PROPERTIES% export EXTRA_JAVA_PROPERTIES
```

- 構成されている外部ユーザー・ディレクトリ(OID/MSAD)のタイプに基づき、次に示すように、Didstore.identityAttribute の値をそれぞれに設定する必要があります:

Microsoft Active Directory = objectguid

Oracle Internet Directory | Oracle Virtual Directory = orclguid

## 7 OBIEE で外部ユーザー・ディレクトリを構成する際に、jps-config.xml ファイルで virtualize プロパティが false に設定されているとします

```
BI_DOMAIN_HOME
/config/fmwconfig/jps-config.xml
```

次の手順を実行します:

- デフォルトの一意の ID 属性を使用し、WLS セキュリティ・レルムで認証プロバイダとして構成されている外部ユーザー・ディレクトリが 1 つのみで、スタック内の最初のプロバイダとして順序付けられている場合、それ以上のアクションは必要ありません。この場合は、次の `DIRECTORY_TYPE=IDENTITY_ATTRIBUTE` が使用されます

Microsoft Active Directory = objectguid

Oracle Internet Directory | Oracle Virtual Directory = orclguid

Novell EDirectory = guid

Sun One Directory = nsuniqueid

Open Ldap = entryuuid

- WLS セキュリティ・レルムで外部 LDAP ユーザー・ディレクトリ認証プロバイダが、上のデフォルトとは異なる一意の ID 属性を使用するよう構成されている場合は、次の場所にある BI ドメインの `setDomainEnv.sh` ファイルに Java システム・プロパティ `idstore.identityAttribute` が渡されます

```
BI_DOMAIN_HOME
/bin/
```

例:

```
set EXTRA_JAVA_PROPERTIES= -Dcommon.components.home=
%COMMON_COMPONENTS_HOME% -Didstore.identityAttribute=customguid
%EXTRA_JAVA_PROPERTIES% export EXTRA_JAVA_PROPERTIES
```

- 8 管理サーバーおよび管理対象サーバーを含め、BI ドメインを再起動します。
- 9 管理サーバーまたは管理対象サーバーに依存している OPMN プロセスを再起動します。
- 10 外部ディレクトリ・ユーザーのログイン情報を使用して Oracle Financial Management Analytics にログインすると、ダッシュボードを表示できます。



## この章の内容

アーキテクチャの概要.....	19
Oracle BI リポジトリ(RPD).....	22
Oracle BI プレゼンテーション・カタログ.....	26

## アーキテクチャの概要

Financial Management と Oracle BI EE の統合は Financial Management ADM ドライバを介して管理され、BI サーバーに次のコンポーネントをインストールする必要があります:

- Oracle BI EE 11g とそのコンポーネント
- Financial Management ADM ドライバ

**注：** コンポーネントの完全なリストおよびサポートされるリリースについては、[第4章「ハードウェアおよびソフトウェアの前提条件の設定」](#)を参照してください。

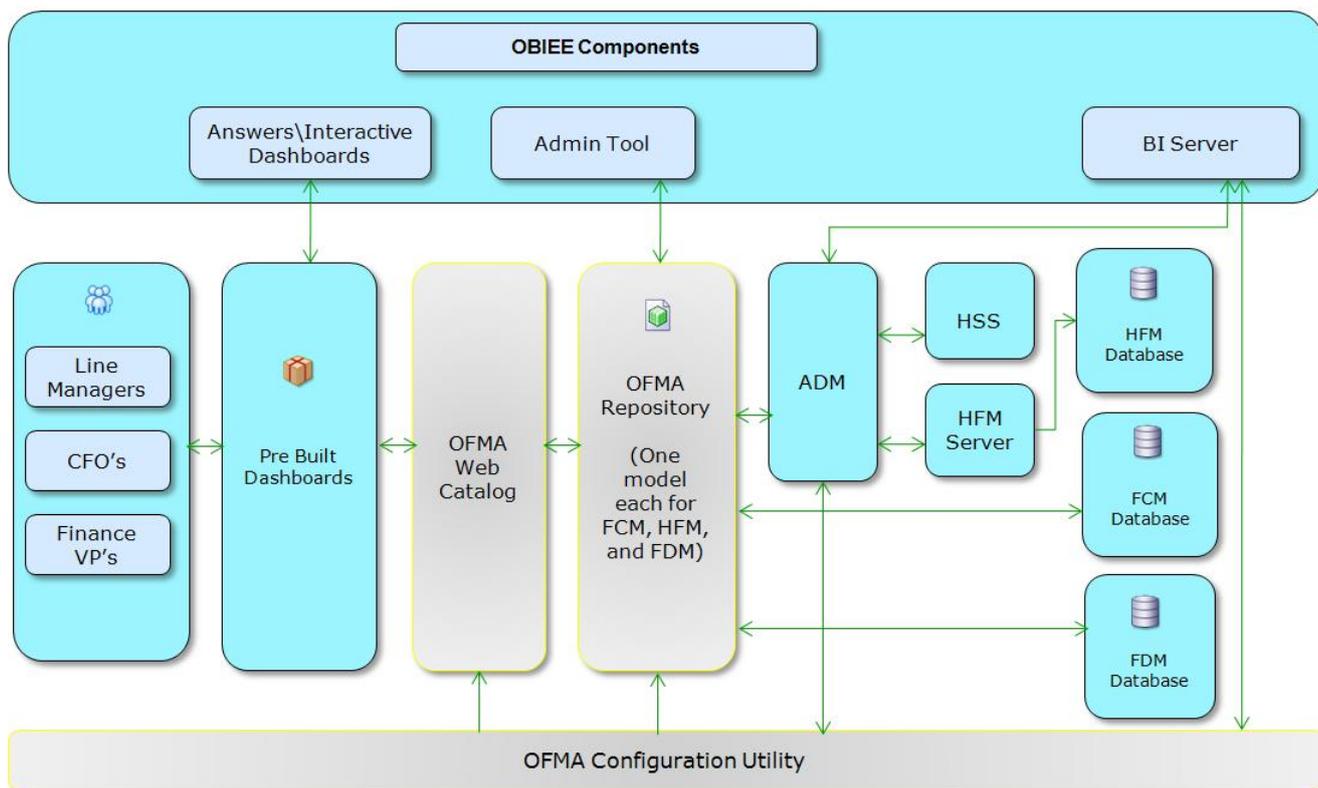


表 2 Oracle Financial Management Analytics のコンポーネント

コンポーネント	説明	関連ドキュメント
データベース	Financial Management の場合、データベースは、Financial Management または Financial Close Management でサポートされている任意のリレーショナル・データベース(Oracle、SQL Server など)にすることができます。  Financial Close Management の場合、SQL データベースと Oracle データベースの両方がサポートされます。	関連するデータベースのドキュメントを参照してください。
Financial Management (HFM)および Financial Management クライアント	Financial Management には、エンタープライズの財務情報の統合ビューが用意されており、グローバル・ソースのパフォーマンスと運用の主要なメトリックが集計されます。  HFM クライアント層にはユーザー・インタフェースが含まれ、アプリケーション層と通信できます。データおよびメタデータを表示して、この層にデータを入力できます。	次のドキュメントを参照してください: <ul style="list-style-type: none"> <li>● Oracle Hyperion Financial Management ユーザー・ガイド</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド</li> </ul>
Financial Management Analytic Data Modeling (ADM) ドライバ	データ・ソースには、データ・ソースの特性を一般的な ADM モデルにマッピングする ADM ドライバがアクセスします。  ADM ドライバは Oracle BI サーバーとの接続の作成に使用され、認証や認可など、すべてのデータ・アクセス操作および取得操作を可能にします。	Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ・ビルダー・ガイド
Financial Close Management	Financial Close Management 内の <b>Close Manger モジュール</b> は、企業が決算期間の相互依存アクティビティを定義、実行およびレポートするのに役立ちます。すべての決算プロセス・タスクを集中監視し、決算プロセスの実行を記録する	次のドキュメントを参照してください:

コンポーネント	説明	関連ドキュメント
	<p>ための目に見える自動化された繰返し可能なシステムを提供します。</p> <p><b>Close Manger モジュール</b>からの情報は、決算スケジュールの要約およびスケジュールの比較レポートに使用されます。ダッシュボードには、次のレポートが表示されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● スケジュールの要約</li> <li>● スケジュールの傾向</li> <li>● スケジュールのマイルストーン</li> <li>● スケジュールのロードブロック</li> <li>● スケジュールの比較</li> </ul> <p>Financial Close Management 内の <b>Account Reconciliation Manager モジュール</b>は、企業が財務情報の正確性の検証、特定の取引が成功したかどうかの確認、またはデータの検証を行う際に役立ちます。勘定科目調整の追跡は、決算サイクルの一部として管理されます。</p> <p><b>Account Reconciliation Manager モジュール</b>からの情報は、次のレポートを表示するためにダッシュボードで使用されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 調整要約</li> <li>● 見積もり試算表</li> <li>● パフォーマンス分析</li> <li>● 調整分析</li> <li>● トレンド分析</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Oracle (R) Financial Close Management ユーザー・ガイド</li> <li>● Oracle(R) Financial Close Management 管理者ガイド</li> </ul>
Oracle BI EE	<p>Oracle BI EE にはあらゆるビジネス・インテリジェンス機能が備わっており、組織の最新データの収集、わかりやすい形式(テーブルやグラフ)でのデータの表示、および組織の従業員への適切なタイミングでのデータの配信が可能になります。</p> <p>次の Oracle BI EE コンポーネントが使用されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>BI サーバー</b>: Oracle BI 分析サーバーは、高度な計算と統合のエンジンを提供し、ユーザー要求やデータ・ソースの基礎となるクエリーの処理に使用されます。</li> <li>● <b>BI 管理ツール</b>: データ・ソースへの接続の作成、およびリポジトリ・ファイル(RPD)の作成に使用されます。</li> </ul> <p>管理ツールには次の 3 つのレイヤーがあります:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 物理レイヤー</li> <li>○ ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー</li> <li>○ プレゼンテーション・レイヤー</li> </ul> <li>● <b>BI プレゼンテーション・サービス</b>: アドホック分析および対話型ダッシュボードの作成に使用されます。</li>	<p>次のドキュメントを参照してください:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>BI サーバー</b>の場合は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレーション・ガイドを参照してください</li> <li>● <b>BI 管理ツール</b>の場合は、『Oracle(R) Fusion Middleware 管理者ガイド』を参照してください</li> <li>● <b>BI プレゼンテーション・サービス</b>の場合は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 開発者ガイドを参照してください</li> </ul>

コンポーネント	説明	関連ドキュメント
Oracle BI プレゼンテーション・カタログ または Web カタログ	アプリケーション・ダッシュボードおよびレポート定義が格納され、権限やダッシュボードのアクセスに関するグループごとの情報が含まれます。 <a href="#">26 ページの「Oracle BI プレゼンテーション・カタログ」</a> を参照してください。	Oracle(R) Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド
Shared Services (HSS)	Oracle Financial Management Analytics の認可されたすべてのユーザーには、Financial Management に対する権限が必要です。 ユーザー・プロビジョニングおよびデータの認証は、Shared Services を使用して Financial Management で管理されます。	Oracle(R) Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド
Oracle Financial Management Analytics	ダッシュボードに Financial Management、FDM および Financial Close Management のデータが表示されます。	Oracle(R) Financial Management Analytics ユーザー・ガイド
FDM	FDM は、財務エグゼクティブがデータ移動プロセスのステータスを分析し、決算プロセス全体に迅速に転換するための適切なアクションを実行する際に役立ちます。 FDM からの情報は、次のレポートを表示するためにダッシュボードで使用されます: <ul style="list-style-type: none"> <li>● 最新の失敗</li> <li>● ワークフローの要約</li> <li>● ワークフロー・トレンド分析</li> <li>● ワークフロー・タイムライン・ビューア</li> </ul>	『Oracle(R) Hyperion Financial Data Quality Management 管理者ガイド』

## Oracle BI リポジトリ (RPD)

Oracle BI リポジトリ (RPD ファイル) には、BI サーバーのメタデータが格納されます。メタデータは、論理スキーマ、物理スキーマ、物理から論理へのマッピング、集計テーブル・ナビゲーションやその他の構成体を定義します。Oracle BI リポジトリは、Oracle BI 管理ツールを使用して編集できます。

Oracle Financial Management Analytics では、初めて構成ユーティリティを実行する際に `FinancialManagementAnalytics.rpd` が作成され、2 回目以降の場合は更新されます。

Oracle BI 管理ツールの 3 つのレイヤーが Oracle Financial Management Analytics ダッシュボードの管理に使用されます:

- [23 ページの「物理レイヤー」](#)
- [25 ページの「プレゼンテーション・レイヤー」](#)
- [25 ページの「ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー」](#)

リポジトリを保存するたびに、グローバルな整合性をチェックするかどうかを確認するダイアログ・ボックスが表示されます。リポジトリ・ファイルの整合性をチェックしてください。次に示す、既知の警告メッセージが表示される場合がありますが、アクションは不要です: グローバルな整合性のチェックの詳細は、

『Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド』を参照してください。

- データベース'HFM'の機能がデフォルトと一致しません。この結果、問合せ問題が発生する可能性があります。
- データベース'FCM'の機能がデフォルトと一致しません。この結果、問合せ問題が発生する可能性があります。

リポジトリ・ファイルの詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド』を参照してください。

## 物理レイヤー

Oracle BI リポジトリの物理レイヤーは、BI サーバーがクエリーを送信するデータ・ソース、および物理データベースと、複数のデータ・ソース・クエリーの処理に使用されるその他のデータ・ソース間の関係を定義します。物理次元内の各物理階層には、物理データベースまたはキューブの列が含まれます。

FinancialManagementAnalytics.rpd には、次の各製品のデータとメタデータを定義する 3 つのデータ・ソースがあります: Financial Management、FDM および Financial Close Management。

Financial Management のデータ・ソースには、物理レイヤーに次の要素が含まれています:

- [23 ページの「Financial Management の標準次元」](#)
- [24 ページの「メンバー・プロパティ」](#)

Financial Close Management のデータ・ソースには、Financial Close Management データベースに必要なテーブルがあります。

## Financial Management の標準次元

Financial Management または Financial Close Management アプリケーションの次元は、物理レイヤーで直接使用できます。

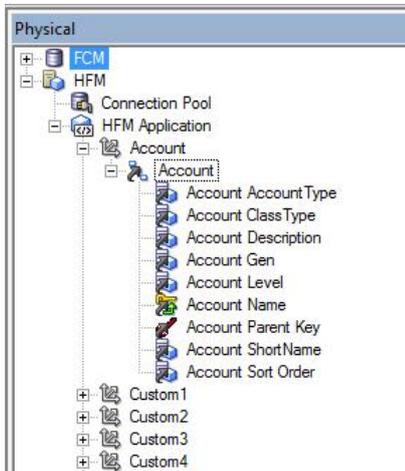
Financial Management の標準的なすべてのデータベースまたはキューブには、次の標準次元が含まれています:

- シナリオ
- 年
- 期間
- エンティティ
- 値
- 勘定科目
- ICP (内部取引)
- ビュー

- カスタム次元

**注：** リリース 11.1.2.2 以降、Financial Management では(2 から N)のカスタム次元がサポートされています。

## メンバー・プロパティ



物理階層の各次元では、次の次元メンバー・プロパティを使用できます:

- **ClassType** - このメンバーは、勘定科目次元(ClassType=AccountMem)を除き、ほとんどの次元で null です。
- **Description** - このメンバーは、メンバーのオプションの説明を提供します。
- **Gen (世代)** - 階層上部からのメンバーの深さとして定義されたメンバーの世代数。最上位メンバーは世代 1 に属します。最上位メンバーの子は世代 2 に属する、というように続きます。
- **Level** - Financial Management で使用できるレベルは 2 つのみです:
  - すべてのリーフ・メンバーはレベル 0 に属します
  - その他のメンバーはレベル 1 に属します
- **Name** - 一意のメンバー名。
- **Parent Key** - このメンバー・プロパティは、Financial Management の結果の上に生成され、親メンバー名を提供します。
- **ShortName** - 大多数の次元では、ShortName プロパティに Name と同じ値が含まれます。

重要な例外の 1 つはエンティティ次元です。エンティティ次元では、複数のメンバーで同じ ShortName が頻繁に共有されますが、異なる代替階層を介してロールアップされるため、Name の値が異なります。

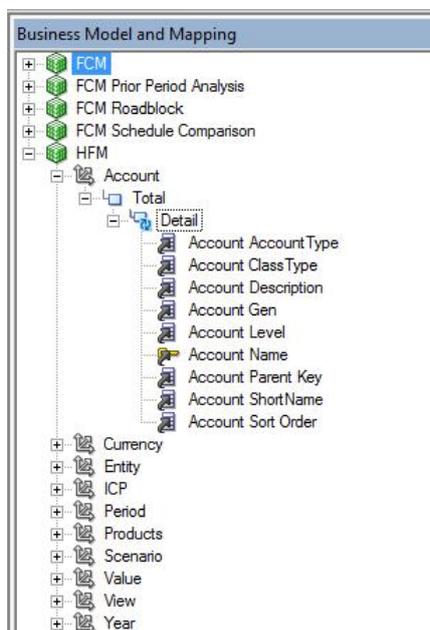
- **Sort Order** - ソート順は、メンバーのソート順を提供し、Financial Management の結果の上に生成されます。

## ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー

ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーは、ビジネスまたは論理のデータ・モデルを定義する Oracle BI リポジトリのレイヤーで、ビジネス・モデルと物理レイヤー・スキーマ間のマッピングを指定します。このレイヤーには、1つ以上のビジネス・モデルが含まれます。

ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーにより、ユーザーが参照する分析動作が決定され、ユーザーが使用可能なオブジェクトのセットが定義されます。

ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーには、論理テーブルが存在します。各ビジネス・モデルに定義されている論理スキーマには、少なくとも2つの論理テーブルが含まれている必要があり、それらの関係を定義する必要があります。各論理テーブルには、1つ以上の論理列と、それに関連付けられた1つ以上の論理テーブル・ソースがあります。



ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーの作成および管理の詳細は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ・ビルダー・ガイドを参照してください。

## プレゼンテーション・レイヤー

プレゼンテーション・レイヤーは、カスタマイズされた安全な役割ベースのビジネス・モデルのビューをユーザーに作成する場所です。

プレゼンテーション・レイヤー・ビューは、サブジェクト・エリアと呼ばれます。サブジェクト・エリアはビジネス・モデルと同一にすることも可能ですが、単一のサブジェクトを表示する、またはビジネス役割をサポートする、より小規模で役割ベースのサブジェクト・エリアにすることも可能です。サブジェクト・エリアを形成するために様々なテーブル、列、属性をグループ化することで、ユーザーにわかりやすいようにコンテンツを編成できます。

サブジェクト・エリアは、プレゼンテーション・サービスおよびアンサーで使用でき、ユーザーはこれを使用してメタデータの分析を作成できます。分析および

アンサーの詳細は、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition を参照してください。

ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーを作成したら、ビジネス・モデル全体を、管理ツールのプレゼンテーション・レイヤーにドラッグできます。または、サブジェクト・エリアとその他のプレゼンテーション・レイヤー・オブジェクトを手動で作成することもできます。

既存の Oracle BI アプリケーションのリポジトリを使用し、そのコンテンツをカスタマイズしている場合は、カスタマイズされた既存のリポジトリを、Oracle BI アプリケーションとともに受け入れる新しい Oracle Financial Management Analytics のリポジトリと手動でマージできます。

詳細は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ・ビルダー・ガイドを参照してください。

## Oracle BI プレゼンテーション・カタログ

Oracle BI プレゼンテーション・カタログ(Web カタログ)には、アプリケーション・ダッシュボードおよびレポート定義が格納され、権限やダッシュボードのアクセスに関するグループごとの情報が含まれます。Oracle Financial Management Analytics の場合、カタログは FinancialManagementAnalytics フォルダにあります。

Oracle BI プレゼンテーション・カタログは、ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを格納し、ユーザーがオブジェクトの作成、アクセスおよび管理を行うインタフェースを提供して、オブジェクト・ベースの特定のタスク(エクスポート、印刷、編集など)を実行します。カタログは、共有または個人のいずれかのフォルダに編成されます。

Oracle BI EE がその他の Oracle アプリケーションと統合されている場合、それらのアプリケーション内で作成されたオブジェクトもカタログに格納されます。たとえば、Oracle BI Publisher が Oracle BI EE と統合されている場合、データ・モデル、レポート、およびスタイル・テンプレートとサブテンプレートもカタログに格納され、カタログからアクセスすることが可能です。

Oracle BI プレゼンテーション・カタログで実行可能な多くの操作は、Oracle BI プレゼンテーション・サービス外に存在するカタログ・マネージャで実行できます。カタログ・マネージャの詳細は、Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイドを参照してください。

# 4

## ハードウェアおよびソフトウェアの前提条件の設定

### この章の内容

Oracle Financial Management Analytics 管理者に対する認可.....	27
システムおよびハードウェアの前提条件.....	27
ソフトウェアの前提条件.....	28
サポートされているコンポーネント.....	28

## Oracle Financial Management Analytics 管理者に対する認可

Oracle Financial Management Analytics をインストールする前に、Oracle Financial Management Analytics の管理ユーザー(admin)に次の認可があることを確認します:

- インストールに使用されるディレクトリへの書き込みアクセス権
- 関連付けられたすべてのソフトウェアに対する管理権限

**注：** Financial Close Management データベースに対する管理権限(構成中のみ必要)。

## システムおよびハードウェアの前提条件

ターゲット・マシンでインストーラを実行するには、選択した Financial Management バージョンで、互換性のある次のハードウェア・システムのいずれかを使用する必要があります。

表 3 ハードウェア前提条件

Financial Management のバージョン	オペレーティング・システム
11.1.2.2.300	32 ビットおよび 64 ビットの両方のオペレーティングシステムをサポート: <ul style="list-style-type: none"><li>● Windows 2003</li><li>● Windows 2008 R2</li></ul>

**注意** 追加のパッチが必要かどうかを確認するには、28 ページの「サポートされているコンポーネント」を参照してください。

インストーラにより、ターゲット・マシンのオペレーティング・システムが確認されます。ハードウェアおよびシステムの要件を満たしていない場合は、インストーラでエラーが発生し、完了できません。

## ソフトウェアの前提条件

Oracle Financial Management Analytics のインストールの前に、次の製品がインストールおよび構成され、Oracle Financial Management Analytics 管理者が製品を使用できることを確認します。次のコンポーネントは同じマシンにインストールする必要があります：

- Oracle BI EE 11g
- ADM ドライバを使用する Financial Management

適切なバージョンのリストについては、[28 ページの「サポートされているコンポーネント」](#)を参照してください

## サポートされているコンポーネント

Oracle Financial Management Analytics のインストールの前に、コンポーネント製品がインストールおよび構成され、Oracle Financial Management Analytics 管理者がコンポーネント製品を使用できることを確認します。[表 4](#)に記載されているように、一部のコンポーネントは、Oracle Financial Management Analytics がインストールされているのと同じシステムにインストールする必要があります。

このリリースの Oracle Financial Management Analytics では、次のコンポーネントがサポートされています：

**表 4** サポートされているコンポーネント

コンポーネント	サポートされているバージョン
Oracle Financial Management Analytics のインストール先と同じシステムに次のコンポーネントをインストールします：	
Oracle BI EE 11g とそのコンポーネント	● 11.1.1.6.2 BP1
Financial Management	● リリース 11.1.2.2.300
Financial Close Management	● リリース 11.1.2.2.300 (このリリースでは、Oracle と MS SQL の両方をサポートしています。)
FDM	● リリース 11.1.2.2.300 (このリリースでは、Oracle と MS SQL の両方をサポートしています。)

コンポーネント	サポートされているバージョン
<p>Oracle Financial Management Analytics と同じシステムにインストールされている必要はありませんが、次のソフトウェアがインストールおよび構成され、Oracle Financial Management Analytics 管理者が使用できる必要があります:</p>	
<p>Oracle Hyperion Shared Services</p>	<p>Oracle Enterprise Performance Management System でサポートされているバージョン:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● リリース 11.1.2.2.300</li> </ul>



# 5

## Oracle Financial Management Analyticsのインストール

### この章の内容

デフォルトのインストール・パス .....	31
完全なインストールの実行.....	32
Oracle Financial Management Analytics のアンインストール.....	41

Oracle Financial Management Analytics は独立した製品としてインストールされ、事前構築されたダッシュボードをインストールします。

使用している Windows オペレーティング・システムのバージョン(32 ビットまたは 64 ビット)に応じて、インストール・ディレクトリ内のそれぞれの setup.exe ファイルを使用できます。

インストール時、Oracle Financial Management Analytics インストーラによって、構成ユーティリティ・ファイル、およびレポートとダッシュボードが含まれた FinancialManagementAnalytics カタログ・フォルダが Oracle Financial Management Analytics ホームに配置されます。カスタム・インストールを実行して、インストールするコンポーネントを選択することもできます。

インストール後、第 6 章「Oracle Financial Management Analytics の構成」に記載のように、カスタム・アプリケーションを反映して製品を構成します。

各ダッシュボードの詳細は、『Oracle Financial Management Analytics ユーザー・ガイド』を参照してください。

次の項を参照してください:

- 31 ページの「デフォルトのインストール・パス」
- 32 ページの「完全なインストールの実行」
- 37 ページの「カスタム・インストールの実行」
- 41 ページの「Oracle Financial Management Analytics のアンインストール」

## デフォルトのインストール・パス

インストール時、インストーラは、Oracle Financial Management Analytics のデフォルトの Oracle ホームの場所を設定するために、マシンのどのドライブに最も空きスペースがあるかを計算します。そのドライブがインストールに使用され、デフォルトのパスは次のようにして設定されます:

OFMAHome\_(number of the previous installation of OFMA + 1)

たとえば、c:ドライブに最大の空きディスク・スペースがあり、古い OFMA のインストールがない場合、デフォルトのパスは次のようになります

C:\OFMAHome\_1

## 完全なインストールの実行

Oracle Financial Management Analytics の完全なインストールでは、次のコンポーネントが自動的にインストールされます:

- カタログ - レポートおよびダッシュボードが含まれる  
FinancialManagementAnalytics フォルダ
- 構成ユーティリティ

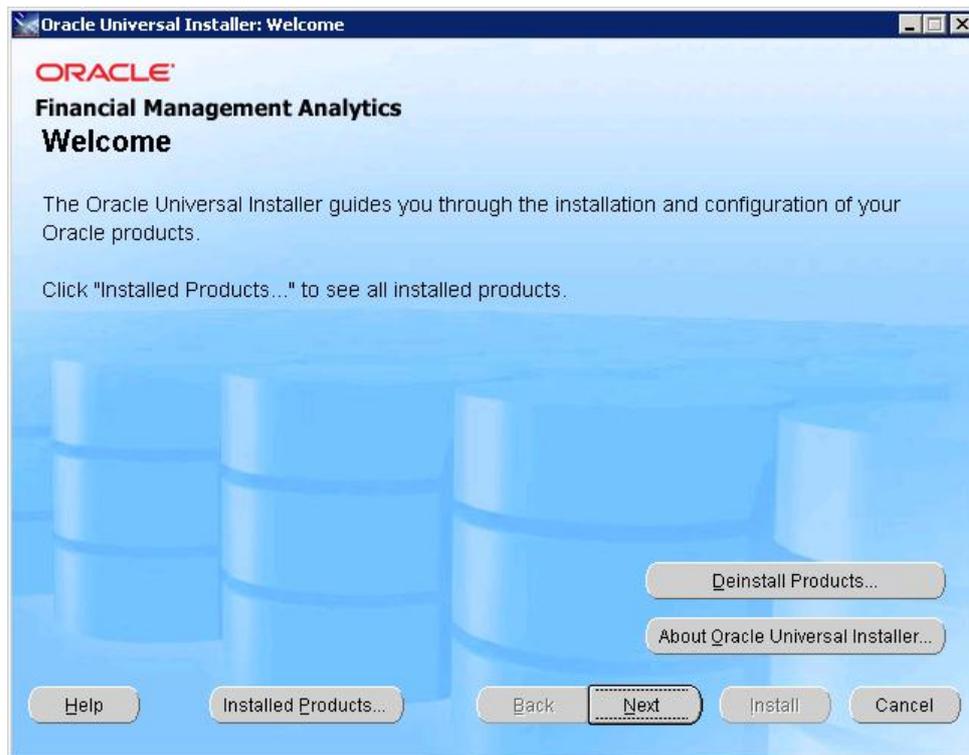
選択したコンポーネントでカスタム・インストールを実行するには、[37 ページ](#)の「[カスタム・インストールの実行](#)」を参照してください。

▶ Oracle Financial Management Analytics の完全なインストールを実行するには:

- 1 システムおよびソフトウェアのすべての前提条件を満たしていることを確認します。次の項を参照してください:
  - [27 ページ](#)の「[システムおよびハードウェアの前提条件](#)」
  - [28 ページ](#)の「[ソフトウェアの前提条件](#)」
  - [28 ページ](#)の「[サポートされているコンポーネント](#)」
- 2 Oracle BI EE がインストールされていることを確認します。  
[28 ページ](#)の「[サポートされているコンポーネント](#)」を参照してください。
- 3 My Oracle Support の Web ページ(<https://support.oracle.com/>)から OFMA インストーラ・ファイルをダウンロードします。
- 4 Microsoft Windows オペレーティング・システム(32 ビットと 64 ビットのどちらのバージョンを使用しているか)に基づいて、環境に適した **setup.exe** ファイルを選択します。

**注:** デフォルトのインストール・パスについては、[31 ページ](#)の「[デフォルトのインストール・パス](#)」を参照してください。

Oracle Universal Installer (OUI)の「ようこそ」画面が表示されます。



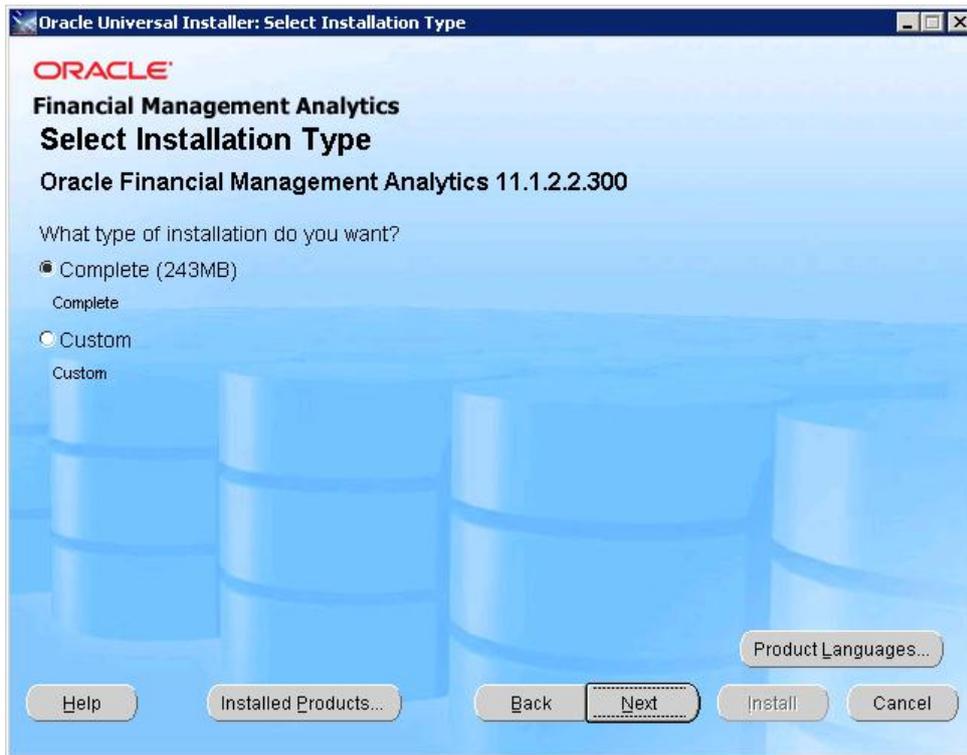
5 「次へ」をクリックします。

6 「インストール・タイプの選択」画面で、「完全」を選択します。

完全なインストールでは、アプリケーションの次のコンポーネントが自動的にインストールされます:

- カタログ - FinancialManagementAnalytics フォルダ
- 構成ユーティリティ

カスタム・インストールを実行するには、[37 ページの「カスタム・インストールの実行」](#)を参照してください。



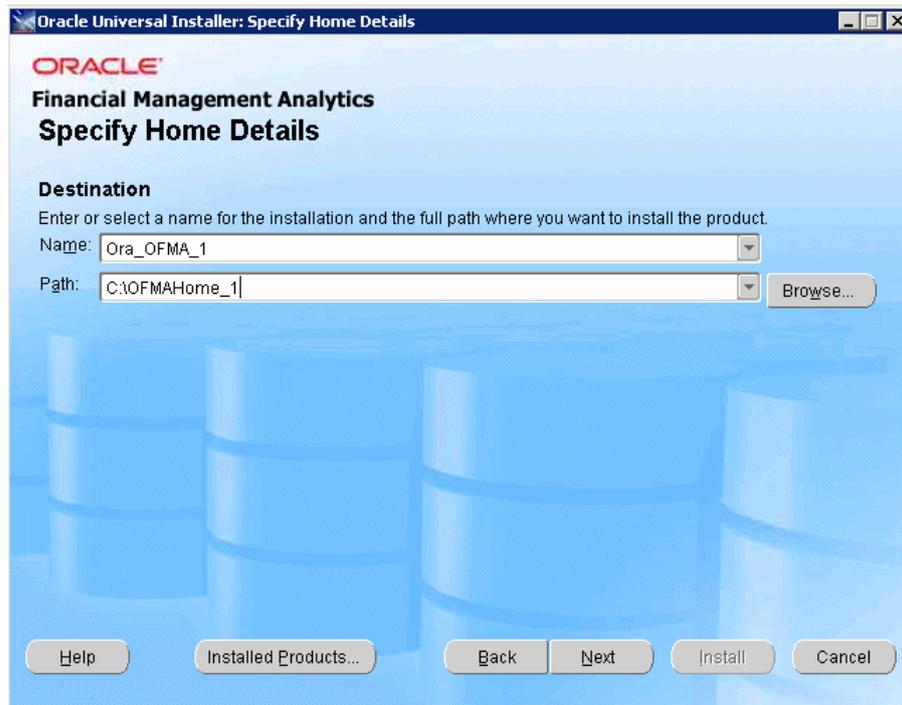
- 7 オプション: 「製品の言語」をクリックして、アプリケーションで使用する言語を設定します。

**注:** このリリースでサポートされている言語は英語のみです。

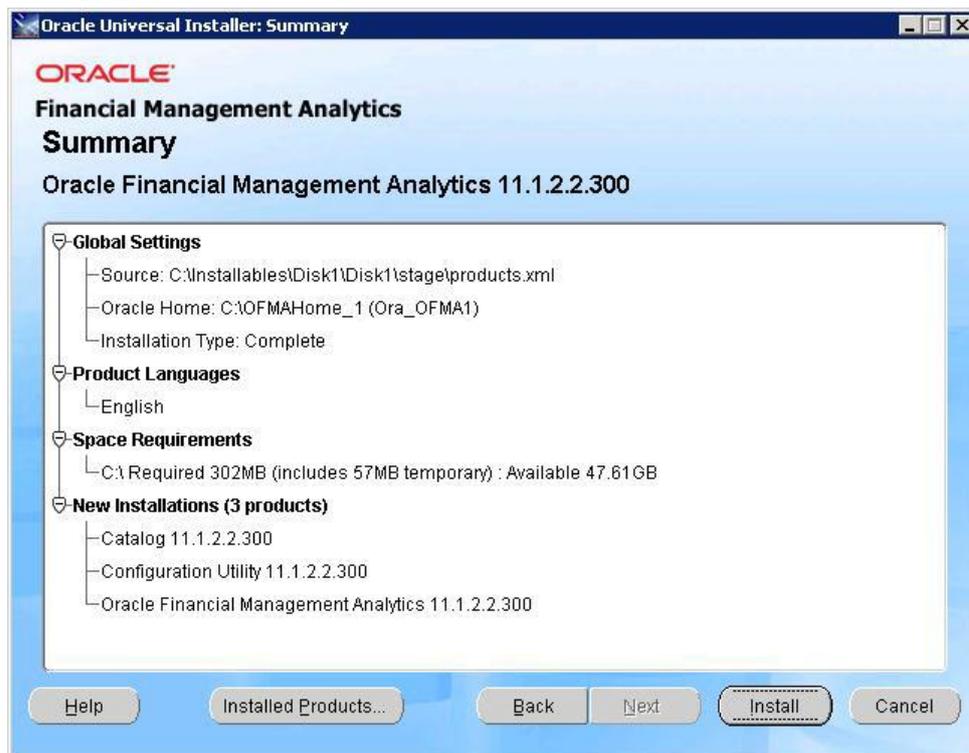
- 8 「次へ」をクリックします。
- 9 「ホームの詳細の指定」画面で、新しいインストールの詳細を入力します:
  - 「名前」に、インストールの名前を入力します。デフォルトでは Ora\_OFMAx と設定されています(ここで、x は、OFMA の旧インストールに 1 を足した数を表示します)。
  - 「パス」にパスを入力するか、Oracle Financial Management Analytics のインストール先を参照します。デフォルトでは、次にあります

```
C:\OFMAHome_  
x
```

ここで、x は、OFMA の旧インストールに 1 を足した数を表示します。



- 10 「次へ」をクリックします。

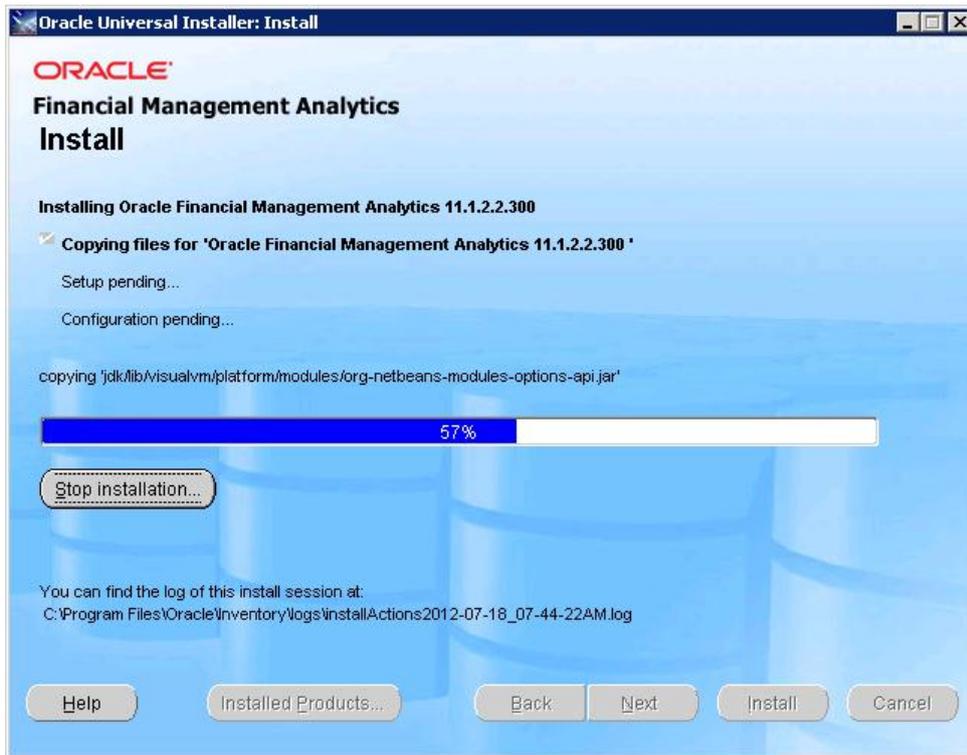


- 11 「サマリー」画面で、選択したインストール・オプションを確認します。

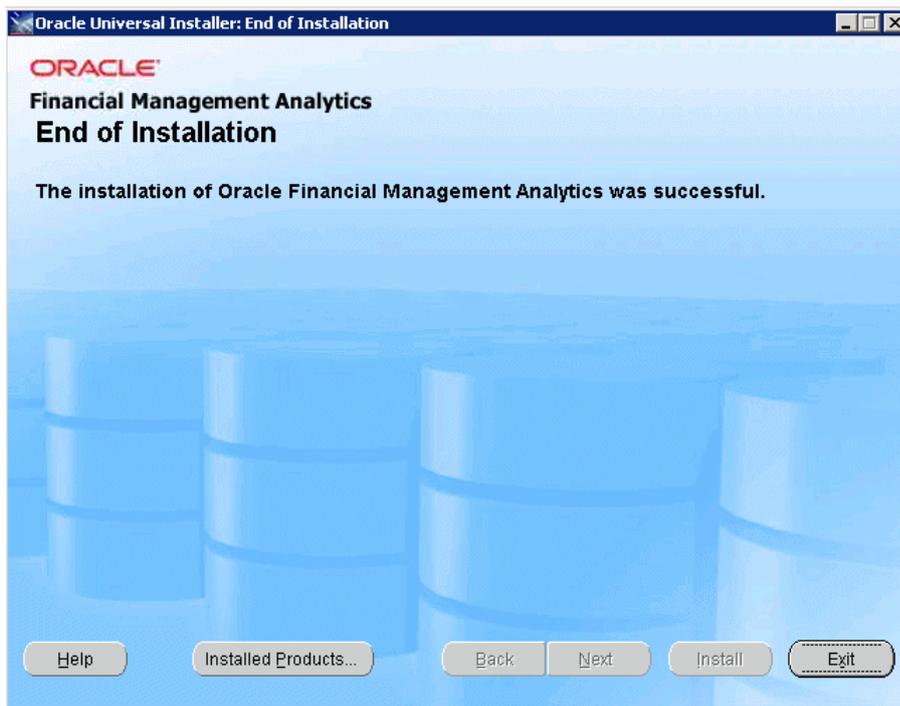
変更が必要な場合は、「戻る」をクリックして変更を行います。

- 12 「インストール」をクリックします。

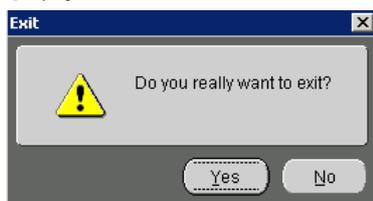
インストールが開始されます。インストールが正常に終了すると、「インストールの終了」画面が表示されます。



13 「インストールの終了」画面で、「終了」をクリックします。



14 「終了」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックして、インストールを終了します。



15 第 6 章「Oracle Financial Management Analytics の構成」に記載のように、アプリケーションを構成します。

## カスタム・インストールの実行

Oracle Financial Management Analytics のカスタム・インストールを使用すると、個々のコンポーネントを個別にインストールできます。

**注：** このリリースでは、アップグレード・インストールはサポートされていません。

---

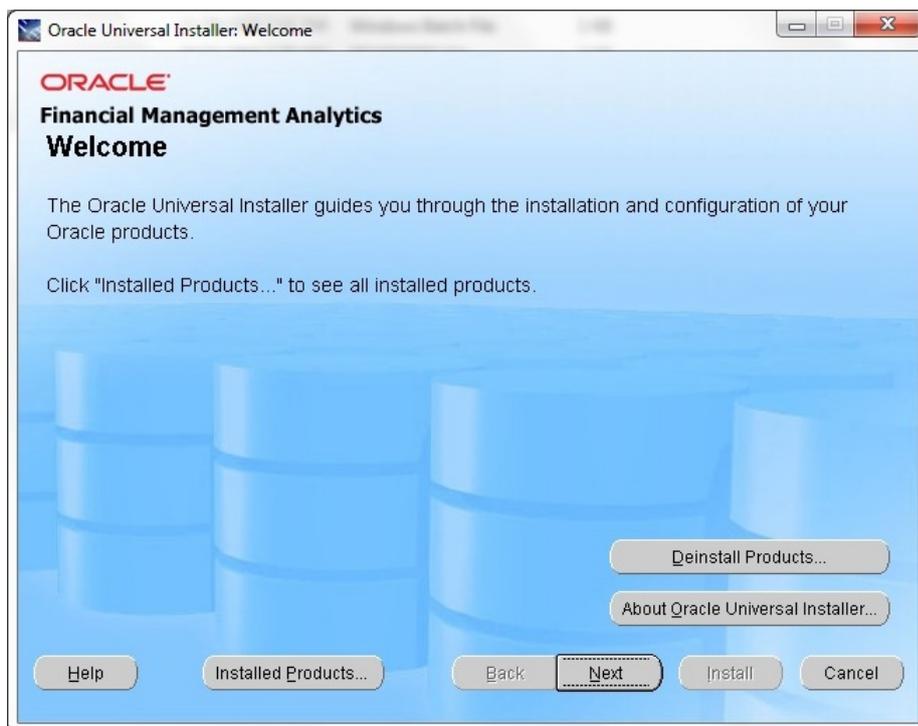
**注意** カスタム・インストールを行うには、Financial Management、FDM および Financial Close Management の各アプリケーション、および Oracle BI EE に関する業務上の深い知識を持っていることをお勧めします。Oracle Financial Management Analytics システムの管理者であることもお勧めします。

---

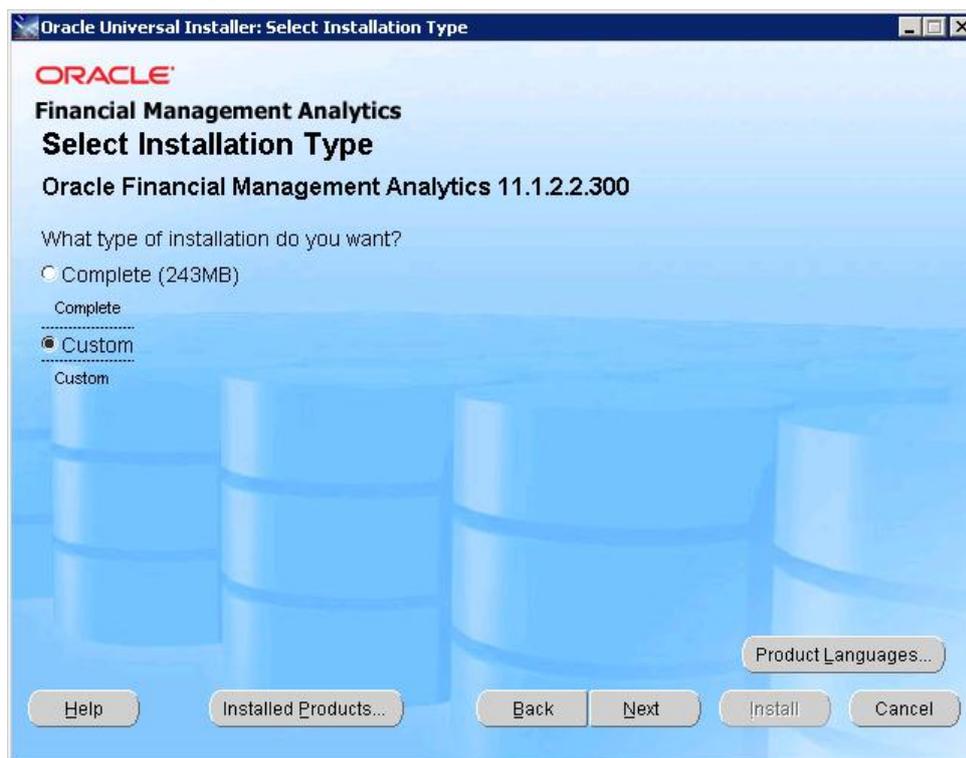
▶ Oracle Financial Management Analytics のカスタム・インストールを実行するには、：

- 1 システムおよびソフトウェアのすべての前提条件を満たしていることを確認します。27 ページの「システムおよびハードウェアの前提条件」および 28 ページの「ソフトウェアの前提条件」を参照してください。
- 2 Oracle BI EE がインストールされていることを確認します。  
28 ページの「サポートされているコンポーネント」を参照してください。
- 3 Microsoft Windows オペレーティング・システム(32 ビットと 64 ビットのどちらのバージョンを使用しているか)に基づいて、環境に適した **setup.exe** を選択します。

**注：** デフォルトのインストール・パスについては、31 ページの「デフォルトのインストール・パス」を参照してください。



- 4 「次へ」をクリックします。
- 5 「インストール・タイプの選択」画面で、「カスタム」をクリックして、「次へ」をクリックします。

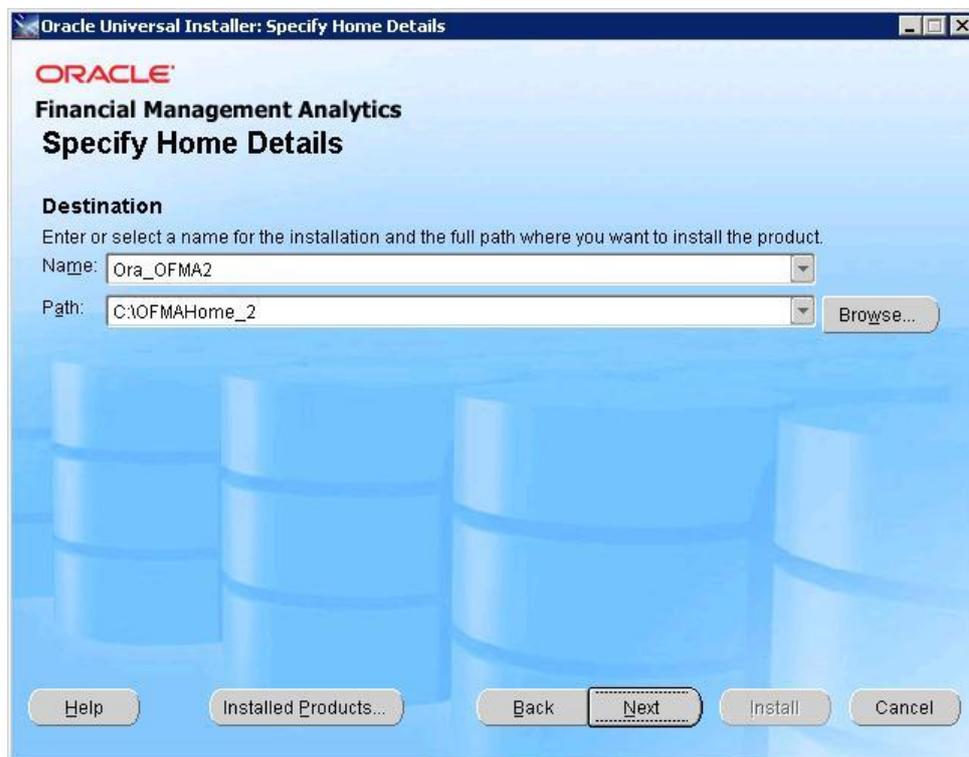


- 6 オプション: 「製品の言語」をクリックして、アプリケーションで使用する言語を設定します。

**注:** このリリースでサポートされている言語は英語のみです。

- 7 「次へ」をクリックします。

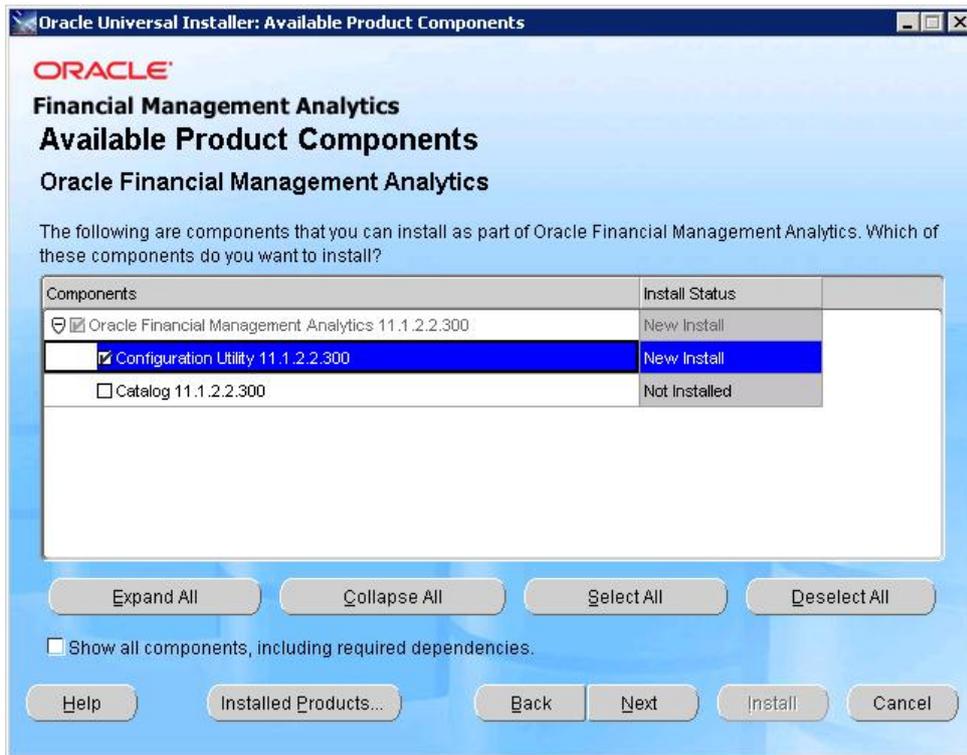
- 8 「ホームの詳細の指定」画面で、新しいインストールの詳細を入力します:
- 「名前」に、インストール名を入力します。
  - 「パス」にパスを入力するか、Oracle Financial Management Analytics のインストール先を参照します。



- 9 「使用可能な製品コンポーネント」画面で、インストールするコンポーネントを選択して、「次へ」をクリックします。

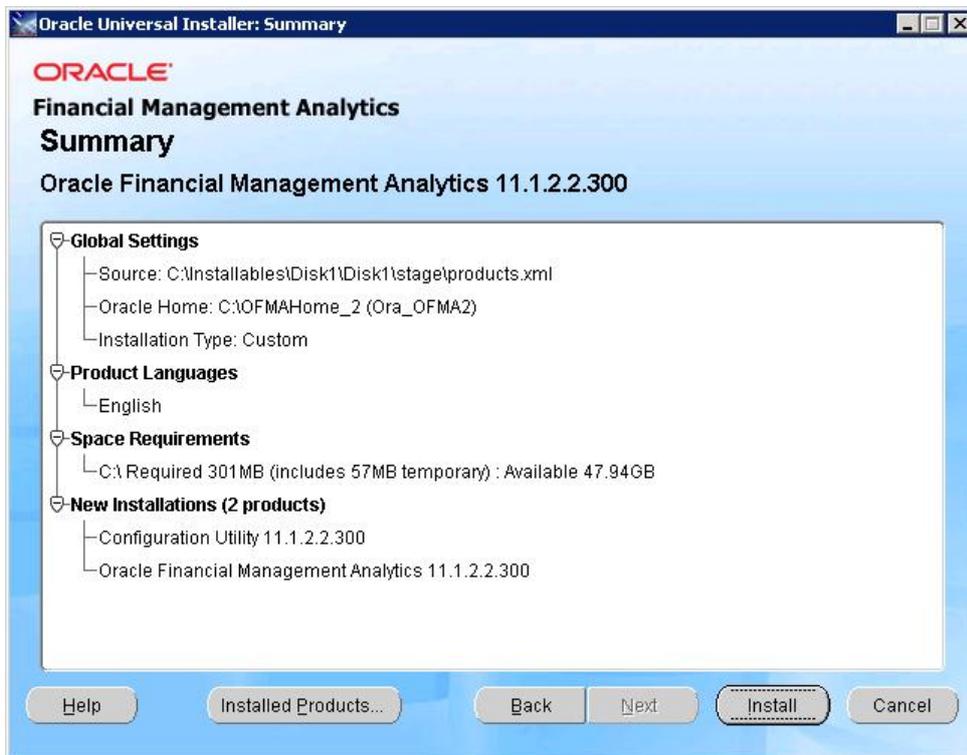
次に示すコンポーネントの一方または両方を選択する必要があります:

- カタログ - FinancialManagementAnalytics フォルダ
- 構成ユーティリティ



- 10 「サマリー」画面で、インストール対象として選択されているコンポーネントを確認し、「インストール」をクリックします。

選択内容を変更する場合は、「戻る」をクリックして該当の画面に戻り、変更を行います。



- 11 「インストール」画面で、インストールの進行状況を監視します。

- 12 インストールが正常に完了したら、「終了」をクリックします。

- 13 「終了」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックして、インストールを終了します。
- 14 第 6 章「Oracle Financial Management Analytics の構成」に記載のように、アプリケーションを構成します。

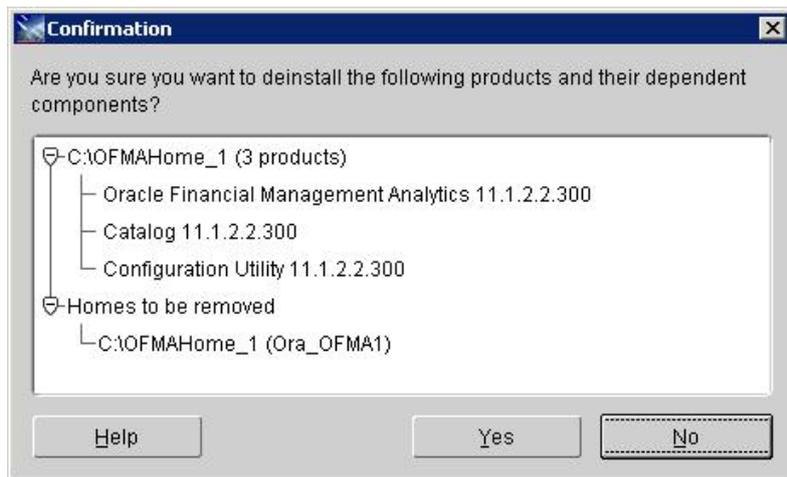
## Oracle Financial Management Analytics のアンインストール

- ▶ Oracle Financial Management Analytics をアンインストールするには:
- 1 アンインストールするアプリケーションのカタログおよびリポジトリ・ファイルをバックアップします。  
アンインストール中には、最後のインストール以降に変更されたものを除き、これらのカタログおよびリポジトリ・ファイルが削除されます。
  - 2 メイン・メニューから「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle Financial Management Analytics」、「Uninstaller」の順に選択します。

「インベントリ」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 3 「インベントリ」ダイアログ・ボックスの「内容」タブで、Oracle Financial Management Analytics のインストール・ディレクトリ(Ora\_OFMA1 など)を選択し、「削除」をクリックします。
- 4 「確認」画面で、アンインストール対象として、適切な製品と依存コンポーネントが選択されていることを確認し、「はい」をクリックします。



Oracle Financial Management Analytics がアンインストールされます。

# 6

## Oracle Financial Management Analyticsの構成

### この章の内容

構成ユーティリティでの選択 .....	43
構成チェックリスト .....	44
構成ユーティリティの実行.....	45
製品構成の実行 .....	47
システム構成の実行 .....	58
BI サーバーへのカタログおよびリポジトリのアップロード .....	62

インストールおよび事前構成作業が完了したら、サーバー・マシンの構成を完了する必要があります。

構成を実行するには、構成ユーティリティを実行します。

### 構成ユーティリティでの選択

構成ユーティリティを使用する際、勘定科目やエンティティなどの選択時には、レポートの指定されたユーザーに、選択された次元またはメンバーへの完全なアクセス権があることを確認してください。構成設定のすべてのリストは、次の場所にある OFMA.log でも確認できます。

C:\OFMAHome\_1\OFMA

階層から次元およびメンバーを選択するには、次のオプションを使用します:

- 階層内で親を選択し、レポートに親メンバーのみを表示します。その親の子は選択しません。
- 階層から子を選択するには、親メンバーを選択してから  をクリックし、「子」を選択します。
- 階層から兄弟を選択するには、任意のノード・メンバーを選択してから  をクリックし、「兄弟」を選択します。
- 階層で子を個別に選択し、レポートに子のみを別途表示します。
- ある範囲の次元メンバーを選択するには、[Shift]を押しながら範囲内の最初と最後のエントリを選択します。その範囲内のすべてのエントリが表示されます。
- 複数の次元メンバーをランダムに選択するには、[Ctrl]を押しながら個々のエントリを選択します。選択したエントリのみが表示されます。

- 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。

## 構成チェックリスト

Oracle Financial Management Analytics の構成では、構成ユーティリティ・ウィザードを実行し、アプリケーションを起動する前に手動で一連の関連手順を完了します。

構成の完了に必要な手順を、次のチェックリストに示します。

表 5 構成チェックリスト

タスク	リファレンス
構成ユーティリティの実行	<p>構成ユーティリティ・ウィザードで、次の各タスクを実行します:</p> <p>OFMA 構成ユーティリティを起動するには、<a href="#">45 ページの「構成ユーティリティの実行」</a>を参照してください</p> <p>構成のタイプの選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 製品構成</li> <li>● システム構成</li> </ul>
製品構成の設定	<p>製品構成では、次を実行します:</p> <p>Financial Management 構成の設定は、<a href="#">47 ページの「Financial Management の製品構成の実行」</a>を参照してください</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● システム設定</li> <li>● シナリオの選択</li> <li>● 地域の選択</li> <li>● デフォルト次元</li> <li>● KPI の選択</li> <li>● 財務諸表</li> <li>● 一定割合マッピング</li> <li>● 販売分析</li> <li>● 原価分析</li> <li>● カスタムごとの分析</li> <li>● 要約および保存構成</li> </ul> <p>Financial Close Management (CM/ARM)構成の設定は、<a href="#">55 ページの「Financial Close Management の製品構成の実行」</a>を参照してください</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● システム設定</li> <li>● モジュールの選択</li> <li>● 要約および保存構成</li> </ul> <p>FDM 構成の設定は、<a href="#">57 ページの「FDM の製品構成の実行」</a>を参照してください</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● システム設定</li> <li>● 要約および保存構成</li> </ul>

タスク	リファレンス
システム構成の設定	<p>システム構成では、次を実行します:</p> <p>Financial Management 構成の設定は、59 ページの「<a href="#">Financial Management のシステム構成の実行</a>」を参照してください</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● システム設定</li> <li>● 要約および保存構成</li> </ul> <p>Financial Close Management (CM/ARM)構成の設定は、60 ページの「<a href="#">Financial Close Management のシステム構成の実行</a>」を参照してください</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● システム設定</li> <li>● モジュールの選択</li> <li>● 要約および保存構成</li> </ul> <p>FDM 構成の設定は、61 ページの「<a href="#">FDM のシステム構成の実行</a>」を参照してください</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● システム設定</li> <li>● 要約および保存構成</li> </ul>
RPD およびカタログ・ファイルのアップロード	<p>BI サーバーへのカタログおよびリポジトリのアップロードは、62 ページの「<a href="#">BI サーバーへのカタログおよびリポジトリのアップロード</a>」を参照してください</p>

## 構成ユーティリティの実行

Oracle Financial Management Analytics のインストール後に、構成ユーティリティを使用して、ダッシュボード、ダッシュボード・プロンプト、レポートでの表示に必要な Financial Management、FDM および Financial Close Management の製品メタデータを定義します。また、構成ユーティリティを使用して、Financial Close Management および FDM アプリケーションのデータ・ソースを接続します。

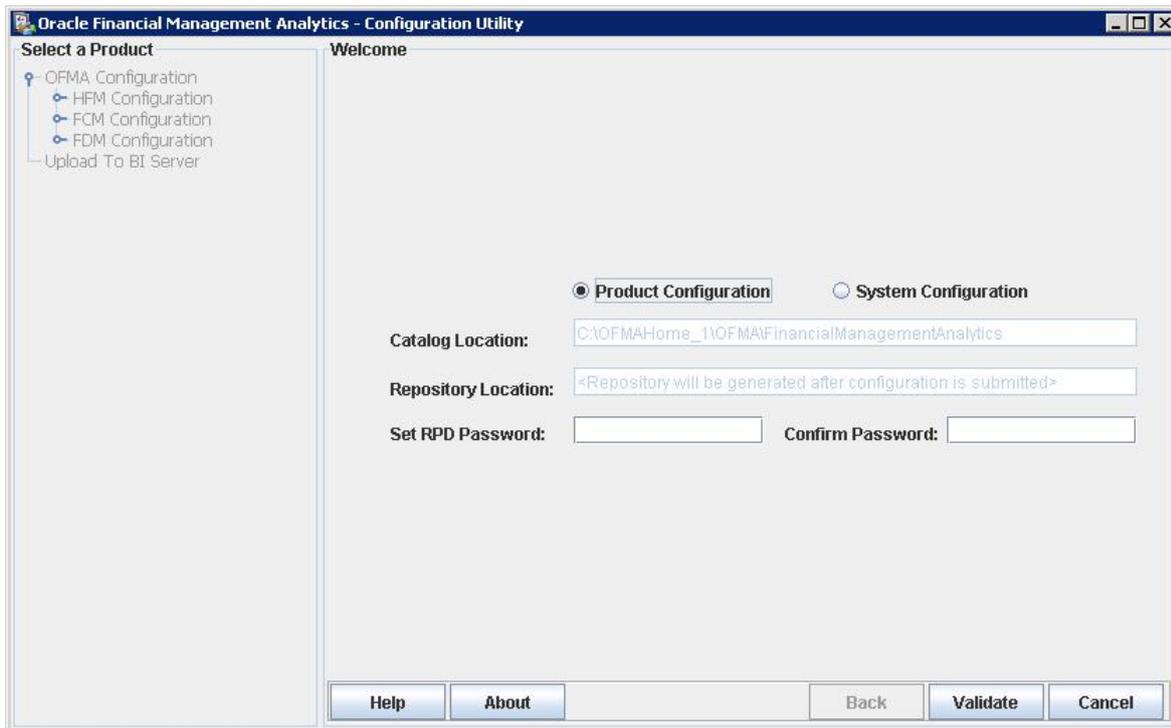
構成ユーティリティは、Oracle Financial Management Analytics の構成の変更、または構成の作成に使用できます。既存のリポジトリを Oracle Financial Management Analytics リポジトリとマージするには、『Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド』を参照してください。

**注意** 構成ユーティリティを実行するには、Financial Management アプリケーションと Financial Close Management アプリケーションに関する業務上の深い知識を持っていること、および Oracle Financial Management Analytics のシステム管理者であることをお勧めします。

**注：** 構成ユーティリティを実行する前に、BI 管理サーバーと Financial Management アプリケーションが実行中であることを確認してください。

▶ 構成ユーティリティを実行するには:

- 1 メイン・メニューから、「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle Financial Management Analytics」、「Configuration Utility」の順に選択します。



- 2 「ようこそ」画面で、「製品構成」または「システム構成」を選択します。デフォルトでは、「製品構成」が選択されています。「システム構成」を実行するには、[58 ページの「システム構成の実行」](#)を参照してください
- 3 「ようこそ」ページに、「カタログの場所」および「リポジトリの場所」のデフォルトのパスが自動的に表示されます。パスの詳細は変更できません。

**注：** 構成ユーティリティを初めて実行する場合には、リポジトリ・パスの場所に次のメッセージが表示されます: 「リポジトリは、構成の送信後に生成されます」。2 回目以降のユーザーの場合は、リポジトリの場所が自動的に取得されます。パスの場所は変更できません。

デフォルトでは、カタログおよびリポジトリのパスは同じです。パスの詳細:

```
OFMA Installed Location
\OFMAHome_1\OFMA
```

- 4 「ようこそ」ページに、RPDパスワードと「確認のパスワード」を入力します。

**注：** 構成ユーティリティを始めて実行する場合は、このフィールドに指定するパスワードがリポジトリ・パスワードとして設定されます。

2 回目以降のユーザーが構成の変更を行う場合、パスワードは、最初の構成時に指定したリポジトリ・パスワードに対して検証されます。

- 5 「検証」をクリックして、左側のパネルから製品を選択します。

- HFM 構成の場合は、47 ページの「Financial Management の製品構成の実行」を参照してください
- FCM 構成の場合は、55 ページの「Financial Close Management の製品構成の実行」を参照してください
- FDM 構成の場合は、57 ページの「FDM の製品構成の実行」を参照してください

**注：** リポジトリ・パスワードが無効であるというエラー・メッセージが表示される場合、またはリポジトリ・パスワードを忘れた場合は、システム管理者に問い合せてください。

## 製品構成の実行

この項では、次のような様々な製品と正常に連携するように、Oracle Financial Management Analytics の製品構成関連の情報を説明します: Financial Management、Financial Close Management (Close Manager と Account Reconciliation Manager の両方のモジュールを含む)、および FDM 製品。OFMA ダッシュボードにレポートやグラフを表示するには、これらの基本的な製品の設定が必要です。

Oracle Financial Management Analytics ダッシュボードに表示される必要なデータを制限するには、Financial Management の構成設定のみを実行するなど、必要な製品の構成設定のみを行います。必要な場合には、Oracle Financial Management Analytics 構成ユーティリティを再度起動し、残りの製品の構成設定を実行できます。

**注：** 必要な手動の手順がすべて実行されて保存されるまで、製品の構成設定は「未完」と表示されます。

## Financial Management の製品構成の実行

構成ユーティリティを使用すると、Financial Management アプリケーションに接続できますが、メタデータ情報のみを抽出できるように、Financial Management サーバーの詳細を指定する必要があります。

**注：** 表示される勘定科目のメンバーは、Financial Management のセキュリティ・クラスを使用して構成されているユーザー権限によって決まります。

▶ Financial Management 構成を設定するには、次の手順に従います:

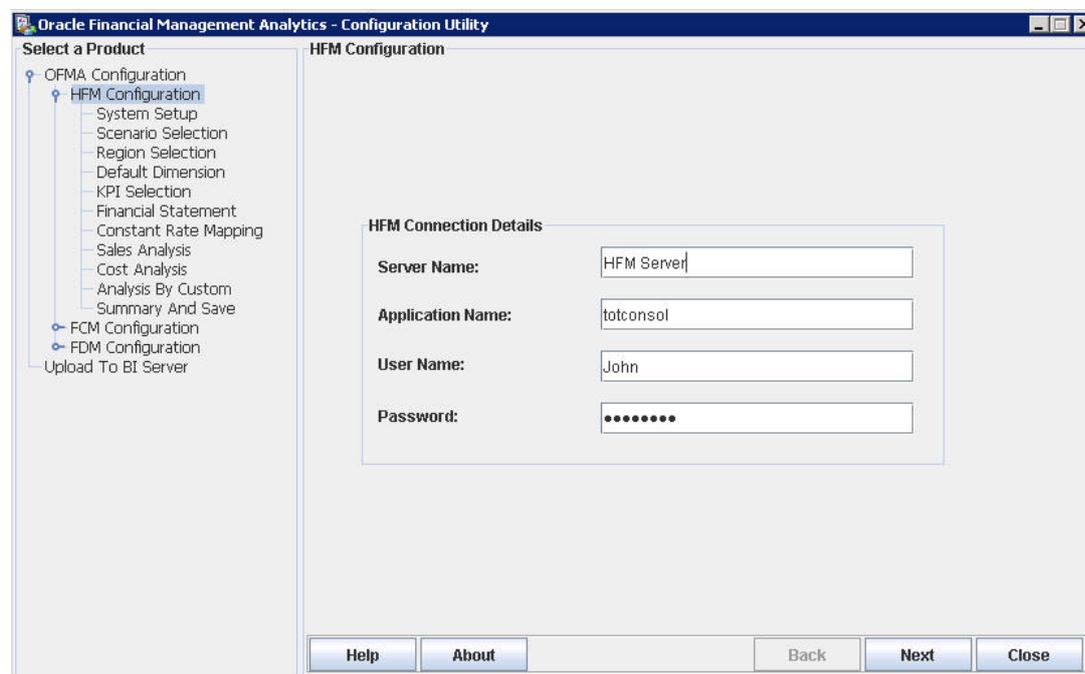
### 1 「HFM 構成」画面で、次の手順に従います:

「HFM 接続の詳細」で、必要なオプションを選択します:

- クラスタ名、または Financial Management アプリケーションが存在する「サーバー名」を入力します。
- Oracle Financial Management Analytics で使用する Financial Management アプリケーションの「アプリケーション名」を入力します。

- Financial Management アプリケーションに関連付けられている「ユーザー名」と「パスワード」を入力します。このユーザーが Financial Management データにアクセスするには、適切な権限と役割が必要です。

「次へ」をクリックします。



## 2 「システム設定」画面で、次に示す Financial Management の設定を実行します:

「構成ファイルの更新」で、必要なオプションを選択します:

- Hyperion Financial Management のデータ・ソースへの接続に必要な「Configure OPMN.xml」を選択します。更新された OPMN.xml ファイルが、次の場所にアップロードされます:

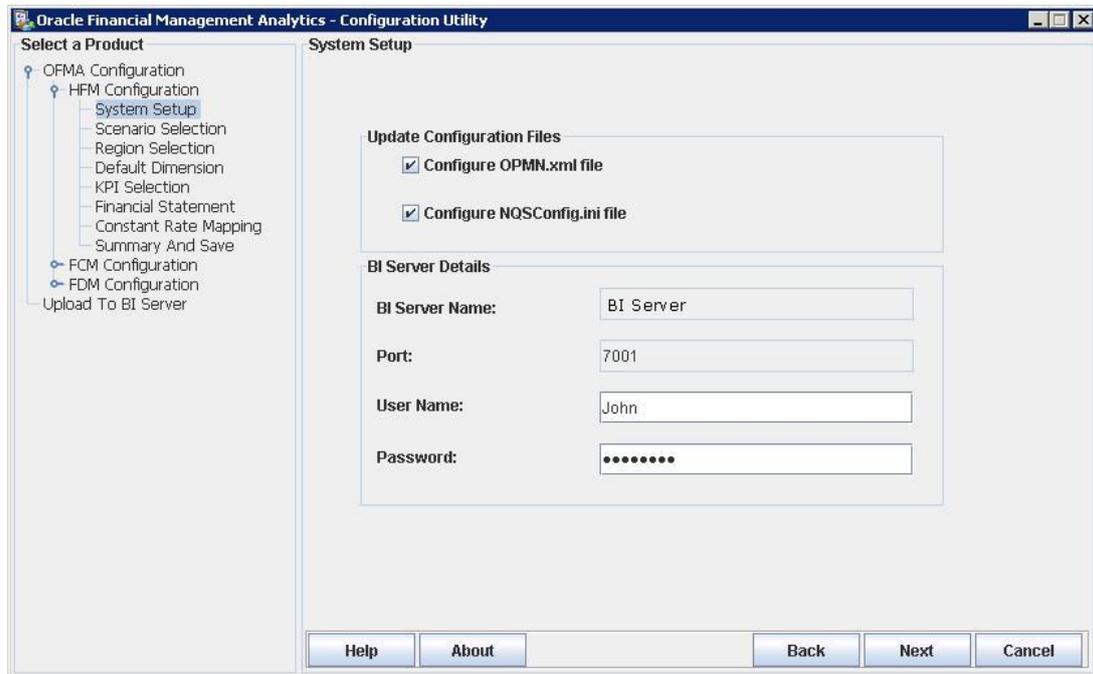
C:\obiee\instances\instance1\config\OPMN\opmn\opmn.xml

- NQSConfig.ini ファイル関連の変更をアップロードするには、「NQSConfig.ini ファイルの構成」を選択します。

「BI サーバーの詳細」ボックスで、次の Oracle BI EE の設定を実行します:

- 「BI サーバー名」は、Oracle BI EE サーバーをホストするコンピュータの名前です。
- Port は、Oracle BI EE サーバーのポート番号です
- 「ユーザー名」に、管理者ユーザーの名前を入力します。
- 「パスワード」に、管理者パスワードを入力します。

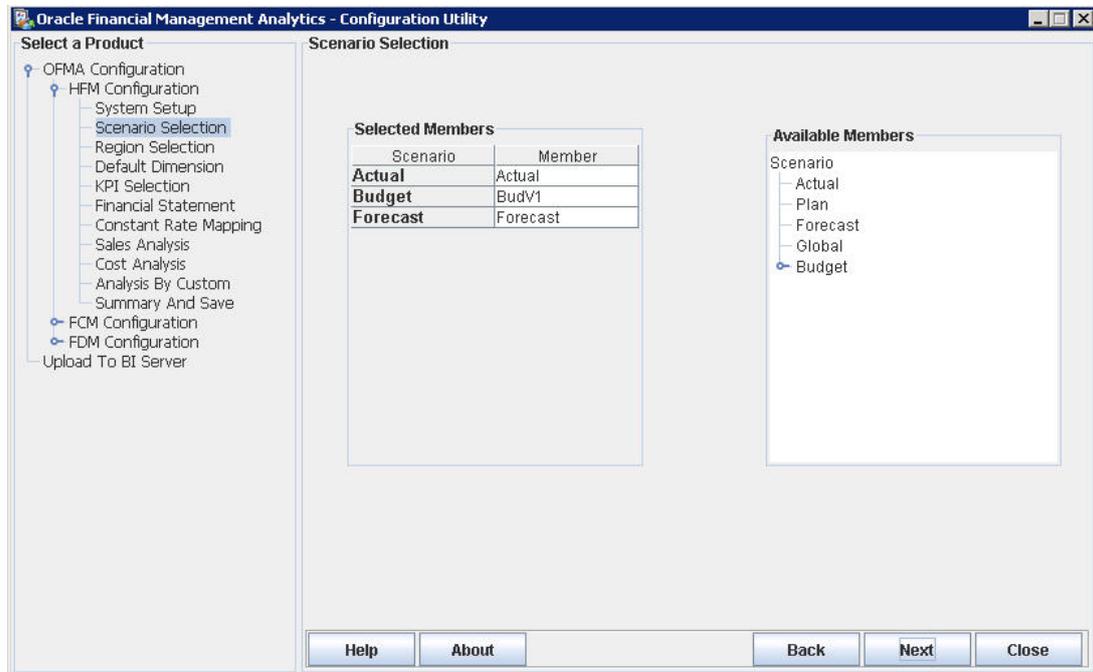
「次へ」をクリックします。



- 3 「シナリオの選択」画面で、メンバーをマップする「選択したメンバー」ボックス内のセルを選択するか強調表示し、「使用可能なメンバー」から必要なシナリオ・メンバーを選択します。

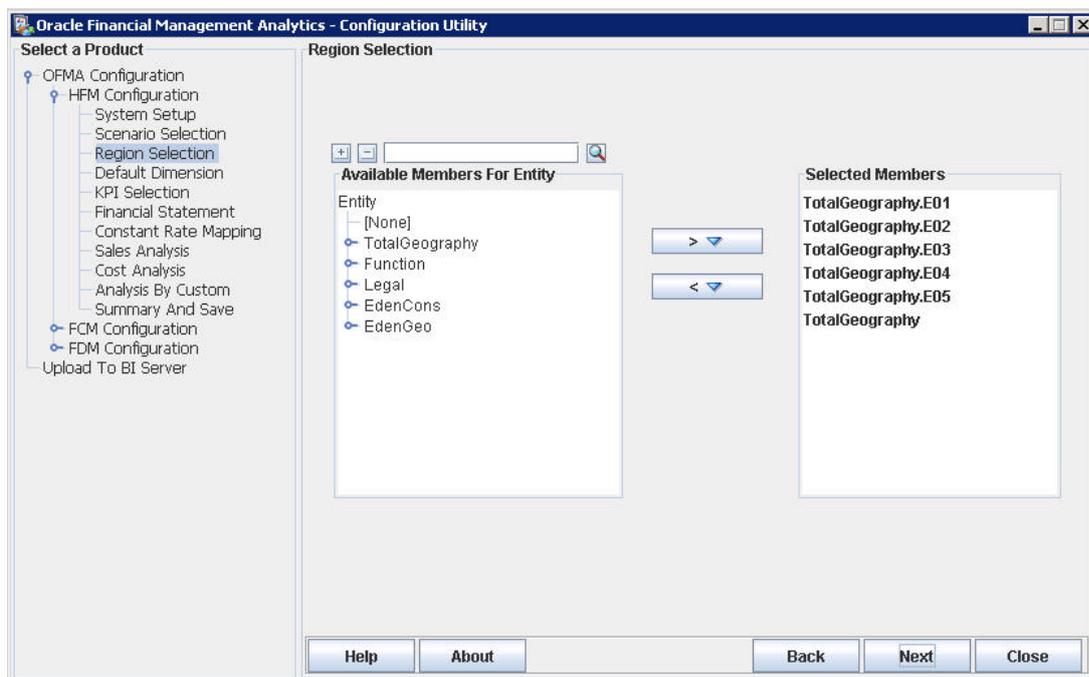
同様に、シナリオ・メンバーごとに上の手順を実行し、「次へ」をクリックします。

**注：** シナリオの選択は相互に排他的であるため、慎重に行う必要があります。



- 4 「地域の選択」画面で、ダッシュボードに表示する必要な地域を選択し、矢印ボタンを使用して必要な地域を「エンティティに使用可能なメンバー」から「選択したメンバー」に移動し、「次へ」をクリックします。

注： 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。

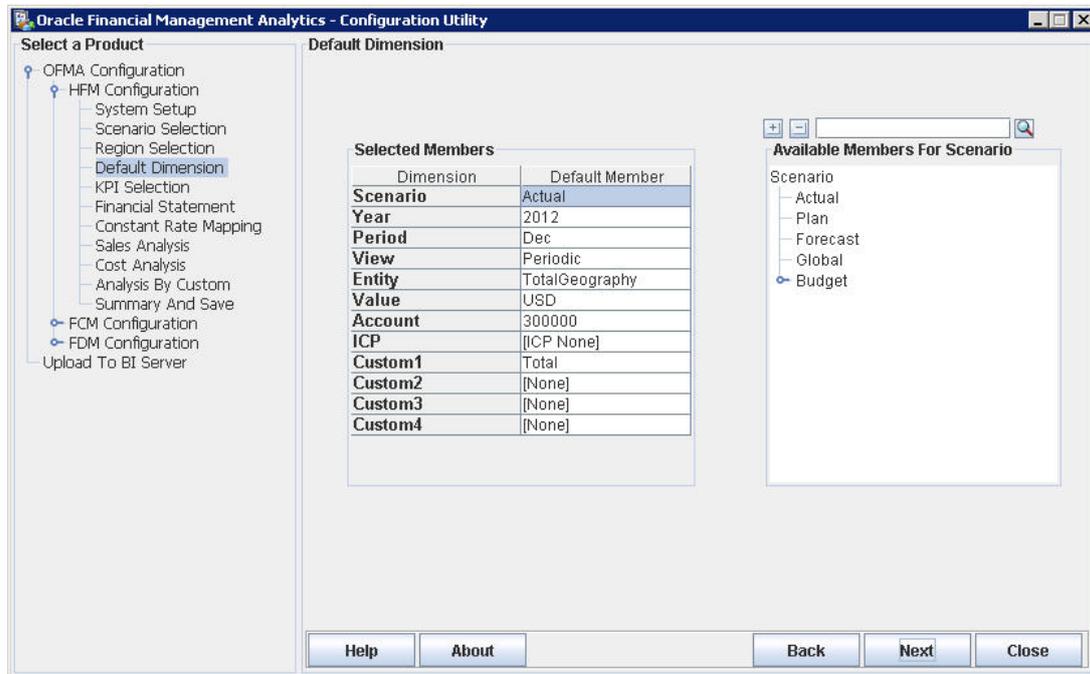


- 5 「デフォルト次元」画面で、メンバーをマップする「選択したメンバー」ボックス内のセルを選択し、「使用可能なメンバー」リスト(右側)から次元メンバーを選択します。

次元ごとに上の手順を実行し、「次へ」をクリックします。

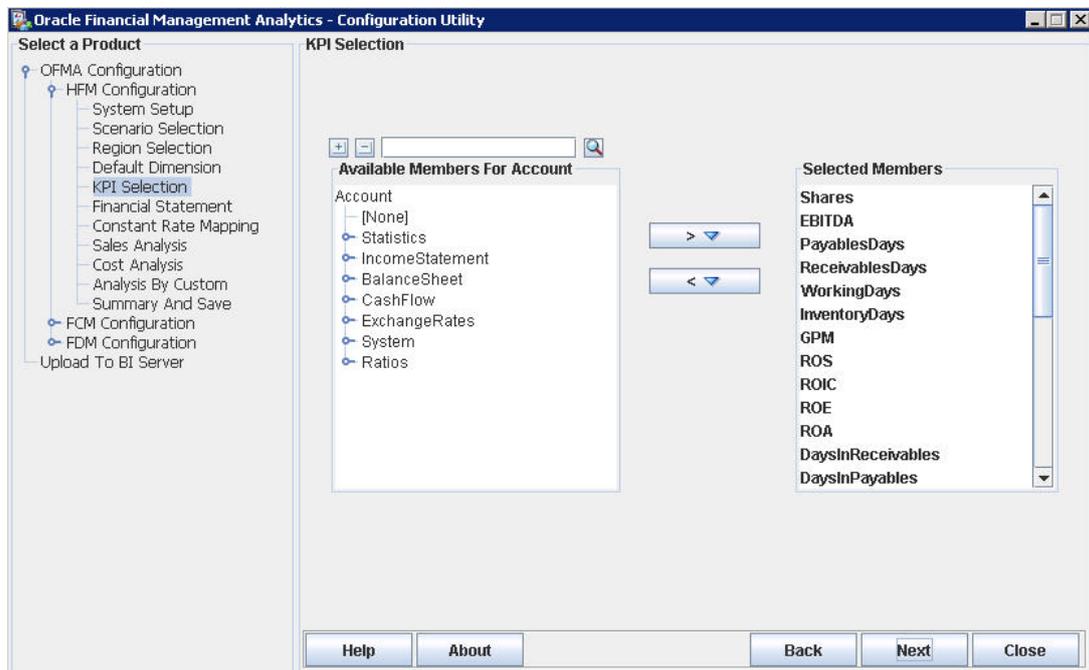
注： 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。

注： 「使用可能なメンバー」リストからデフォルトの「期間」次元を選択すると、基本メンバーのみが表示されます。



- 6 「KPI の選択」画面で、ダッシュボードに表示する必要な勘定科目を選択し、矢印ボタンを使用して必要な勘定科目を使用可能なリストから選択したリストに移動し、「次へ」をクリックします。

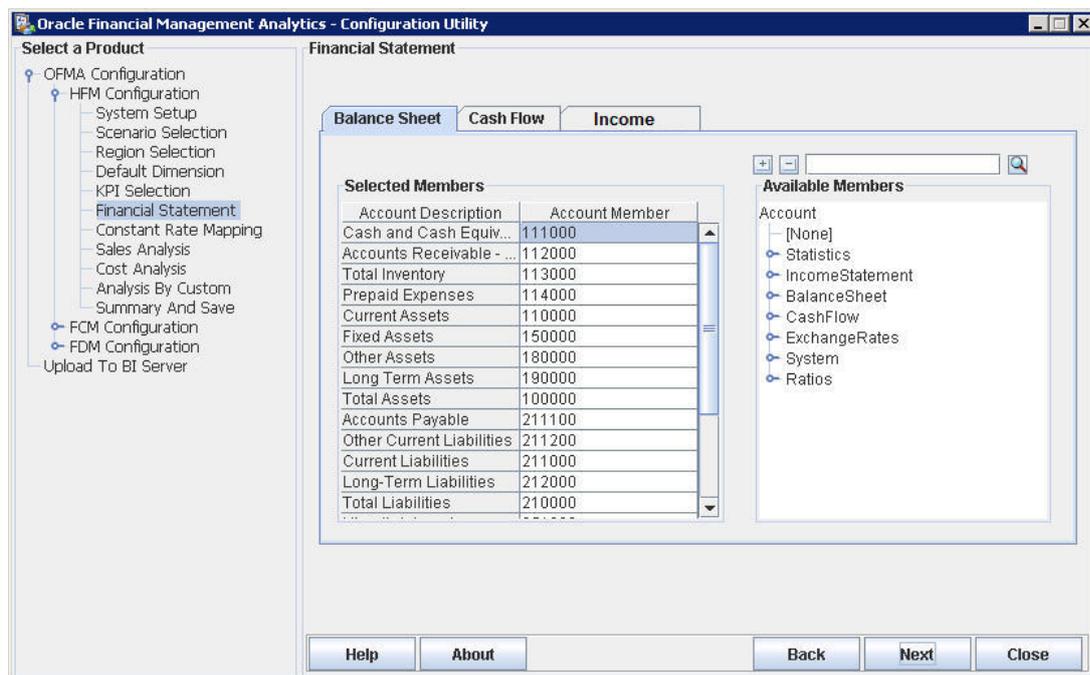
注： 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。



- 7 「財務諸表」画面で、メンバーをマップする「選択したメンバー」ボックス内のセルを選択し、「使用可能なメンバー」から勘定科目メンバーを選択します。

次の財務諸表タブ: 「貸借対照表」、「キャッシュ・フロー」および「収益」に上の手順を実行し、「次へ」をクリックします。

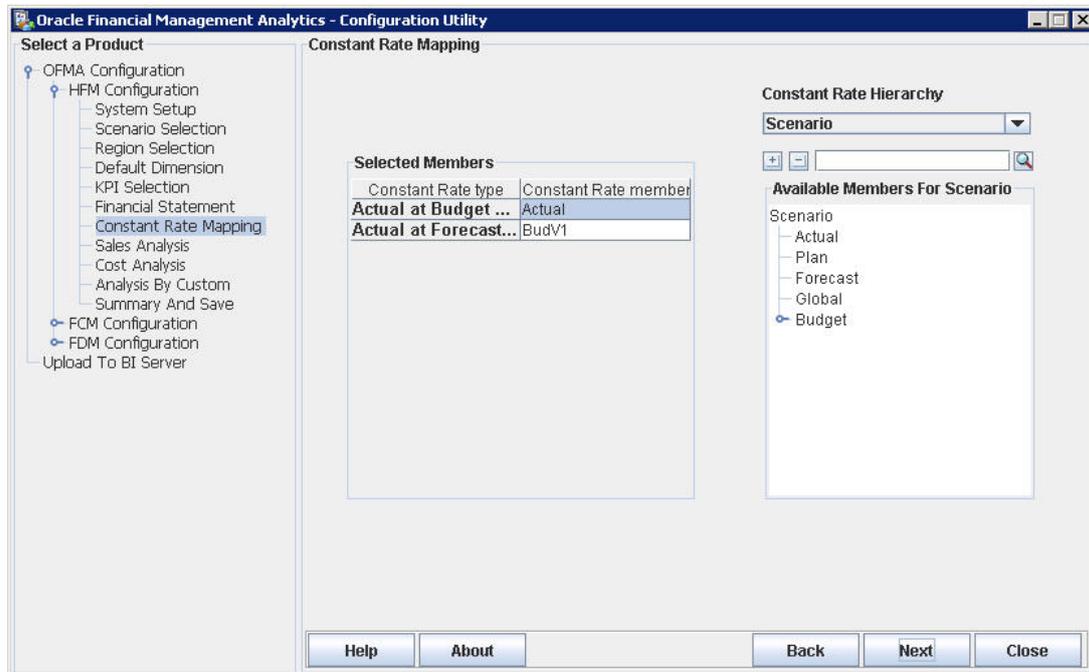
注： 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。



注： 財務諸表勘定科目の選択は相互に排他的であるため、慎重に行う必要があります。

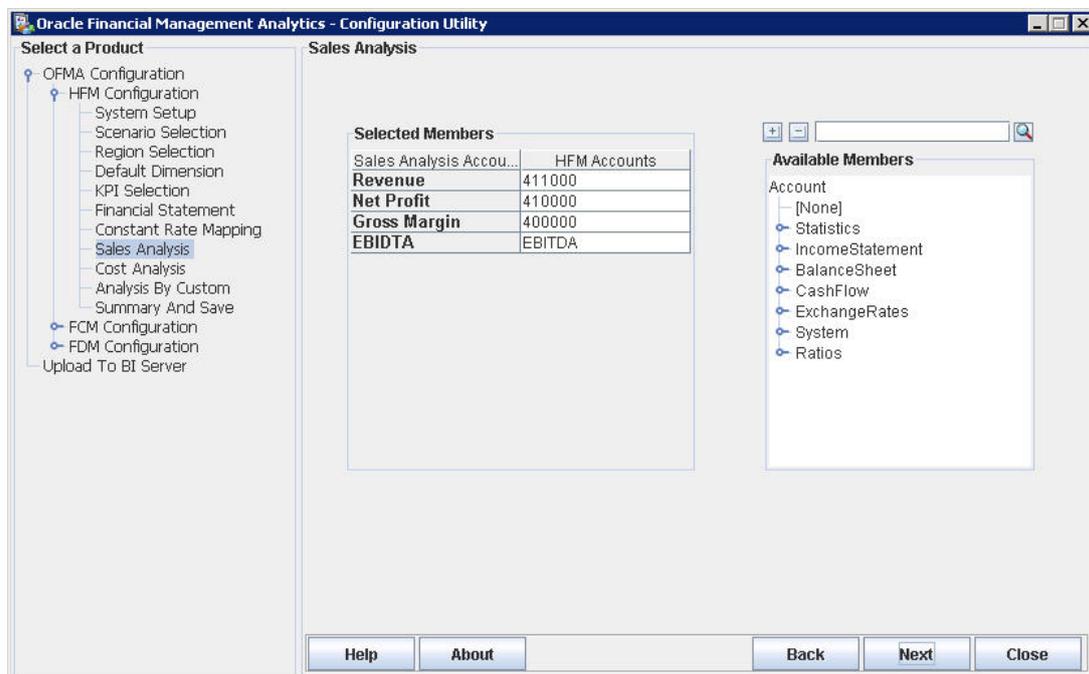
- 「一定割合マッピング」画面で、「一定割合の履歴」リストから必要な次元メンバーを選択し、メンバーをマップする「選択したメンバー」ボックス内のセルを選択するか強調表示して、「使用可能なメンバー」から次元メンバーを選択し、「次へ」をクリックします。

注： 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。



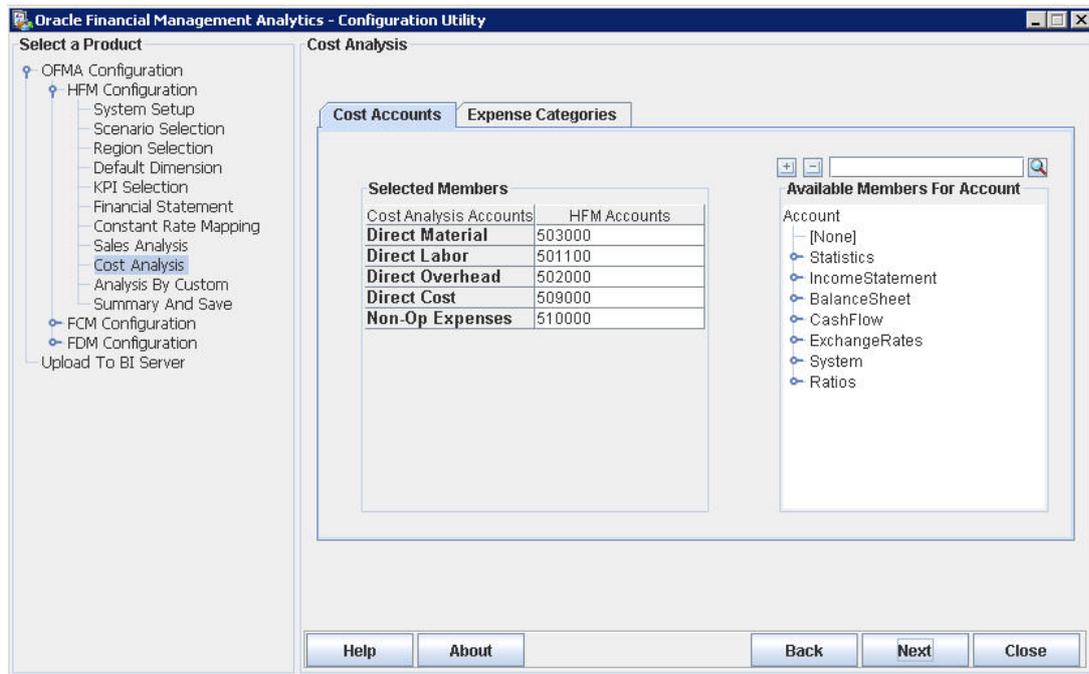
- 9 「販売分析」画面で、勘定科目メンバーをマップする「選択したメンバー」ボックス内のセルを選択し、「使用可能なメンバー」から必要な次元メンバーを選択して、「次へ」をクリックします。

注： 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。



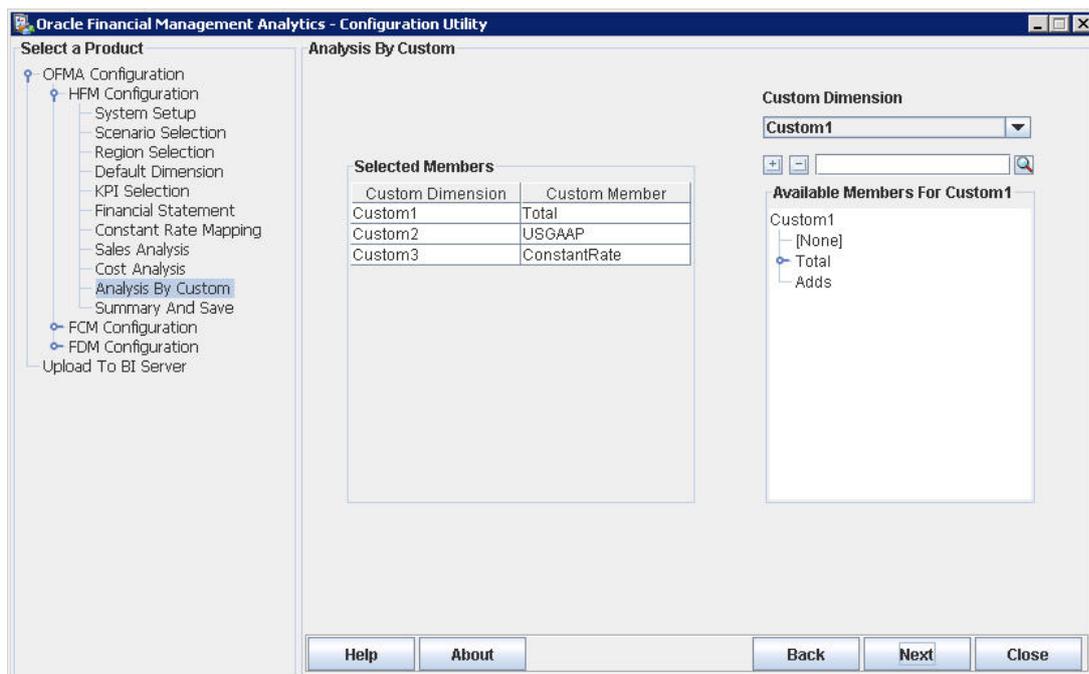
- 10 「原価分析」画面で、「原価勘定科目」タブを選択し、メンバーをマップする「選択したメンバー」ボックス内のセルを選択し、「使用可能なメンバー」リストから必要な勘定科目メンバーを選択します。

注： 検索オプションでは大文字と小文字が区別されます。



- 11 「原価分析」画面で、「支出カテゴリ」タブを選択し、「使用可能なメンバー」リストから必要な勘定科目メンバーを選択して、「選択したメンバー」ボックスに必要な勘定科目を移動します。
- 12 「カスタムごとの分析」画面で、リストから必要な「カスタム次元」を選択し、メンバーをマップする「選択したメンバー」ボックス内のセルを選択して、「使用可能なメンバー」リストから次元メンバーを選択し、「次へ」をクリックします。

**注：**「一定割合マッピング」画面でカスタム次元を選択した場合は、「カスタムごとの分析」画面に同じカスタム次元を選択しないことをお勧めします。



- 13 「要約」画面に、Financial Management 構成の詳細と、ユーティリティを使用して行った選択内容が表示されます。
- 14 構成の詳細の要約を確認したら、「保存」をクリックします。

**注意** 正しい構成の詳細が指定されていることを確認してください。「保存」をクリックする前に、必要に応じて構成設定を変更できます。

## Financial Close Management の製品構成の実行

▶ Financial Close Management 構成を設定するには、次の手順に従います:

1 次の手順で示すように、「システム設定」画面で、Financial Close Management のデータベース構成設定を実行します:

- 「データベースの選択」から、「Oracle」または MS SQL を選択します。  
Oracle データベースの場合を例にして説明します:
- 「サーバー名」に、Financial Close Management が実行されている Financial Close Management データベース・サーバー名を入力します。
- 「ポート」に、ポート番号を入力します。
- 「サービス名」に、データベースに接続する際に使用する一意の名前または別名を入力します。
- 「ユーザー名」に、書き込み権限のある Financial Close Management データベース・スキーマのデータベース・ユーザー名を入力します。
- 「パスワード」に、Financial Close Management データベース・サーバーのデータベース・パスワードを入力します。

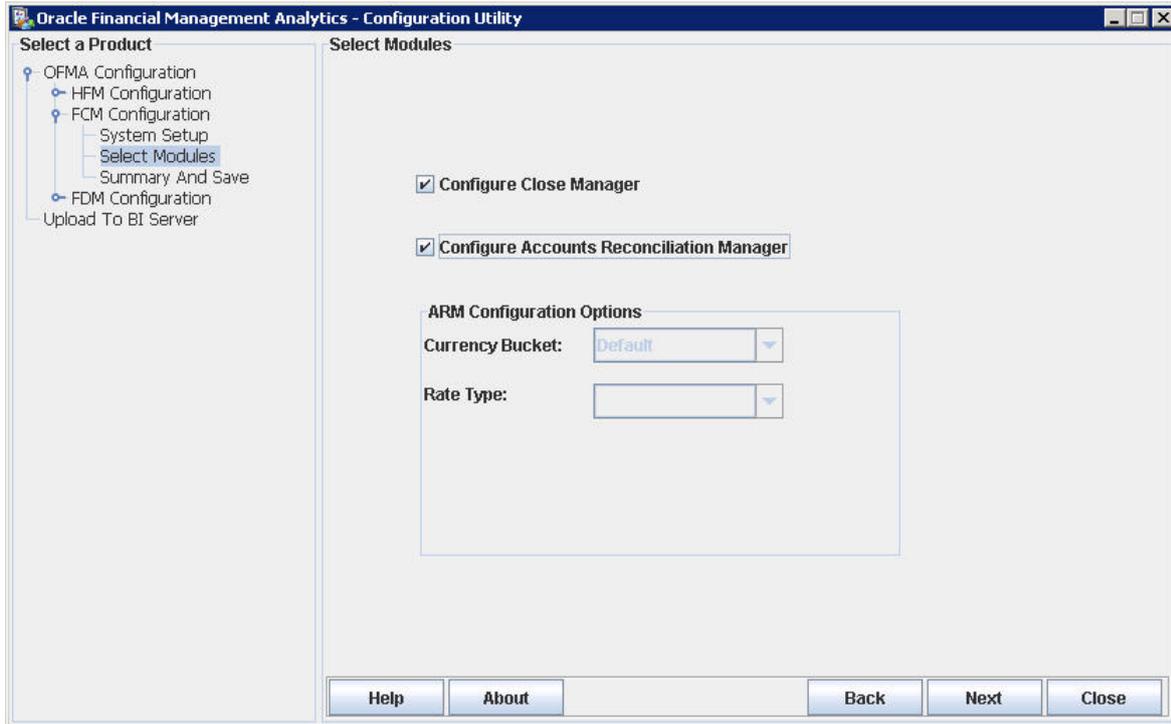
The screenshot shows the 'System Setup' dialog box within the 'Oracle Financial Management Analytics - Configuration Utility'. The left sidebar shows a tree view with 'System Setup' selected. The main area contains the following fields:

Select Database:	Oracle
Server Name:	FCMServer
Port:	1521
Service Name:	orcl
User Name:	John
Password:	.....

At the bottom, there are buttons for 'Help', 'About', 'Back', 'Next', and 'Cancel'.

2 「次へ」をクリックして、データベース接続を確認します。

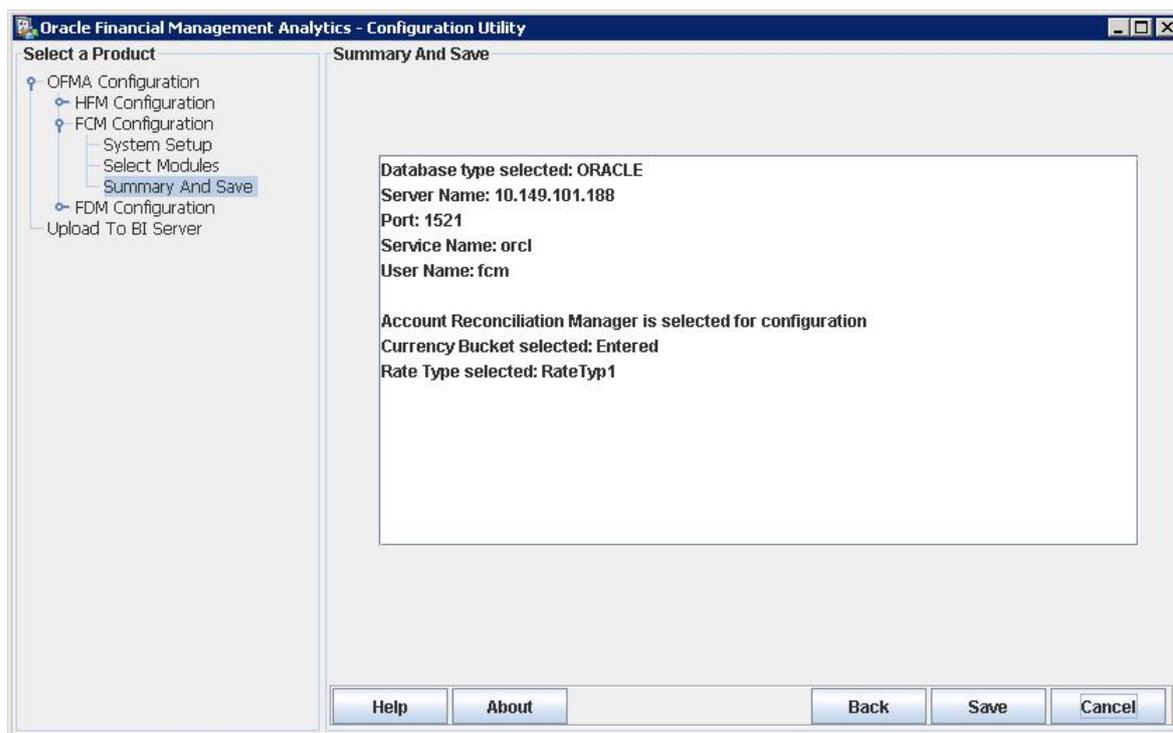
- 3 「モジュールの選択」画面で、データベース構成に関連付ける必要なモジュールを選択します。



- 4 オプション: 「Close Manager の構成」モジュールを選択します。
- 5 オプション: 「ARM 構成オプション」で、「Account Reconciliation Manager の構成」モジュールを選択した場合は、次を実行します:
1. 必要な「通貨バケット」を選択します。
  2. 必要な「レート・タイプ」を選択します。

**注:** Account Reconciliation Manager モジュールで単一通貨がサポートされている場合、「通貨バケット」および「レート・タイプ」オプションは無効になっています。

- 6 「次へ」をクリックして続行します。
- 「要約」画面に、ユーティリティを使用して行った選択が表示されます。



- 7 構成の詳細の要約を確認したら、「保存」をクリックします。

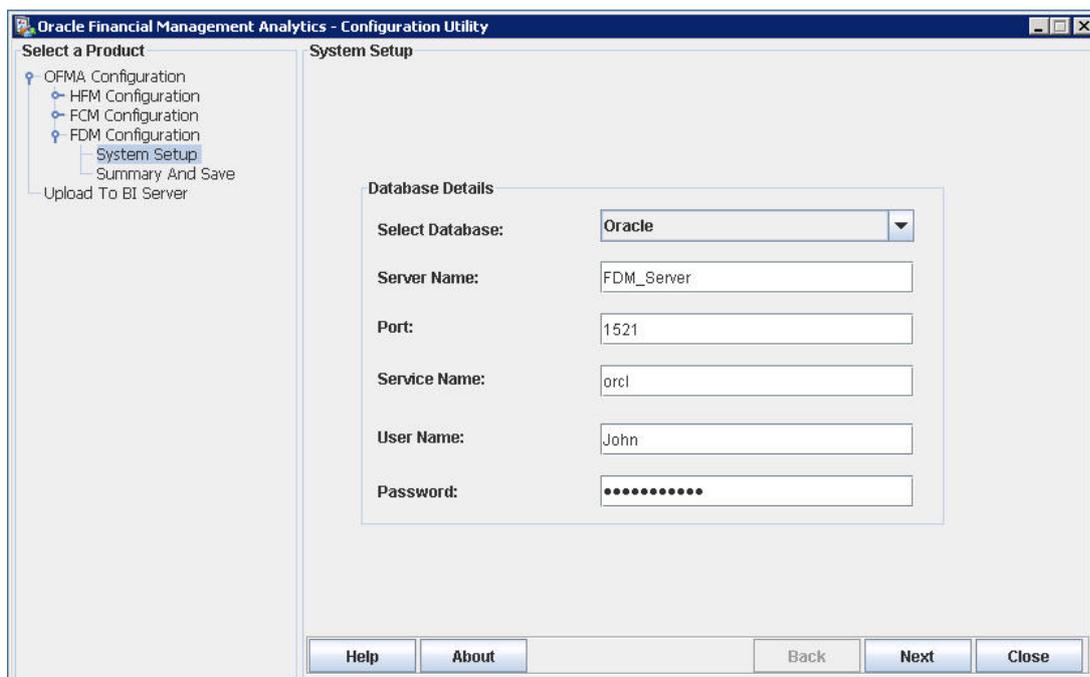
**注意** 正しい構成の詳細が指定されていることを確認してください。「保存」をクリックする前に、必要に応じて構成設定を変更できます。

## FDM の製品構成の実行

- ▶ FDM 構成を設定するには、次の手順に従います:

1 「システム設定」画面で、FDM データベース構成の実行します:

- 「データベースの選択」ドロップダウン・オプションで、「Oracle」または MS SQL の中からデータベースを選択します  
たとえば、Oracle データベースについて考えます:
- 「サーバー名」に、FDM が実行されている FDM データベース・サーバー名を入力します。
- 「ポート」に、ポート番号を入力します。
- 「サービス名」に、データベースに接続する際に使用する一意の名前または別名を入力します。
- 「ユーザー名」に、書き込み権限のある FDM データベース・スキーマのデータベース・ユーザー名を入力します。
- 「パスワード」に、FDM データベース・サーバーのデータベース・パスワードを入力します。



- 2 「次へ」をクリックして続行します。要約の画面に、データベース接続の詳細が表示されます。
- 3 構成の詳細の要約を確認したら、「保存」をクリックします。

**注意** 正しい構成の詳細が指定されていることを確認してください。「保存」をクリックする前に、必要に応じて構成設定を変更できます。

## システム構成の実行

この項では、Oracle Financial Management Analytics のシステム構成関連の情報を説明します。システム構成中には、次のアクティビティが実行されます：

Financial Management の場合：

- OPMN.xml ファイル・エントリの更新
- NQSCONFIG.INI ファイル・エントリの更新

FDM および Financial Close Management の場合

- TNSNAMES.ORA (Oracle データベースの場合のみ)ファイル・エントリの更新
- システム・データ・ソース System DSN (MS SQL データベースの場合のみ)ファイル・エントリの作成

構成ユーティリティを使用すると、テスト環境から本番環境へリポジトリやカタログを移動するための様々なサポートが可能になります。

**注：** 正常に移行するために、マシンには OBIEE の最新バージョンをインストールする必要があります。

テスト環境から本番環境への移行アクティビティの実行中には、マシンでのシステム構成の間に手動で手順を完了する必要があります。

移行する前に、次のチェックリストの内容を検証したことを確認する必要があります:

- ターゲット・マシンに OBIEE がインストールされていること
- テスト・マシンで問題が発生することなく、既存の RPD およびカタログが正常に機能すること

**注:** RPD の変更は、システム構成の影響を受けません。

## Financial Management のシステム構成の実行

▶ Financial Management のシステム構成を実行するには、次の手順に従います:

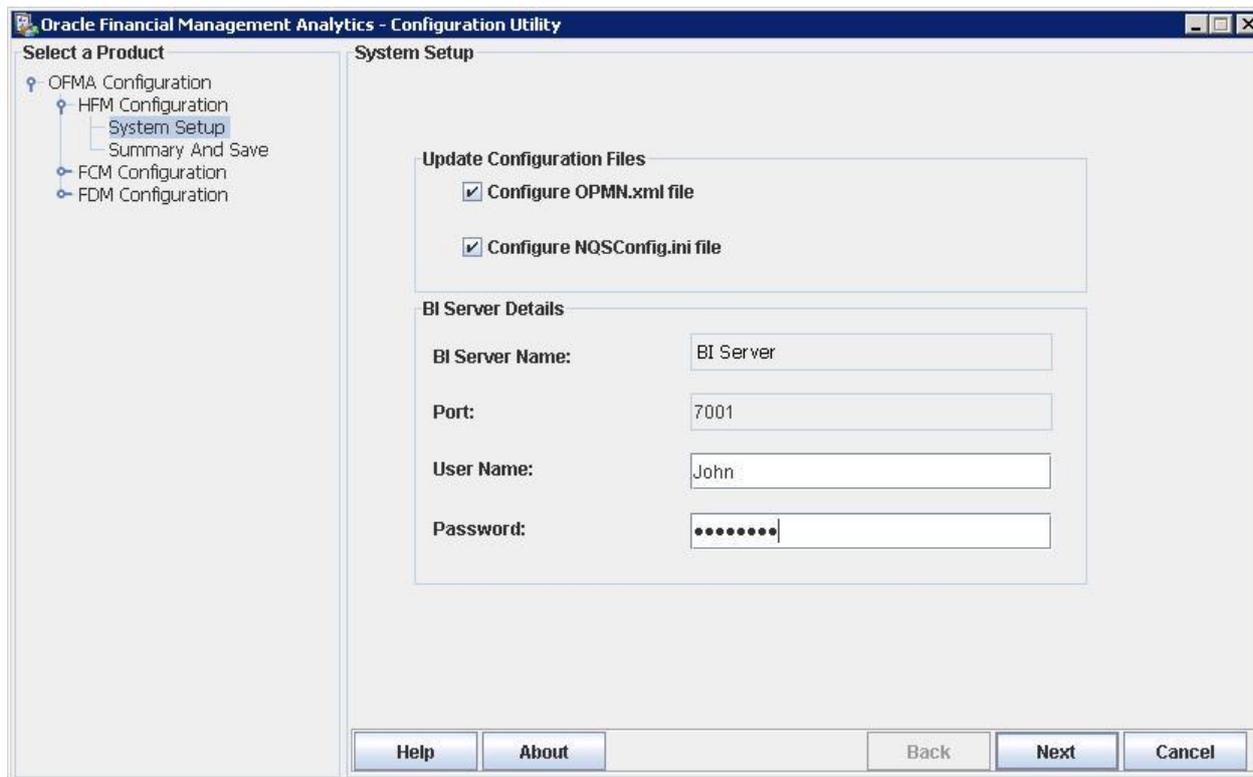
- 1 「ようこそ」画面で「システム構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
- 2 左側のパネルで「OFMA 構成」ノードを展開し、「HFM 構成」を選択します。
- 3 「システム設定」画面の「構成ファイルの更新」ボックスで、次に示す Financial Management のシステム設定を実行します:
  - Hyperion Financial Management のデータ・ソースへの接続に必要な「Configure OPMN.xml」を選択します。更新された OPMN.xml ファイルが、次の場所にアップロードされます:

```
C:\obiee\instances\instance1\config\OPMN\opmn\opmn.xml
```

- NQSCONFIG.INI ファイル関連の変更をアップロードするには、「NQSCONFIG.INI ファイルの構成」を選択します。

「BI サーバーの詳細」ボックスで、次の Oracle BI EE の設定を実行します:

- 「BI サーバー名」は、Oracle BI EE サーバーをホストするコンピュータの名前です。
- **Port** は、Oracle BI EE サーバーのポート番号です
- 「ユーザー名」に、BI 管理者ユーザーの名前を入力します。
- 「パスワード」に、BI 管理者パスワードを入力します。



- 4 「次へ」をクリックして続行します。

「要約」画面に、ユーティリティを使用して行った選択が表示されます。「要約」画面が表示されます。

- 5 構成の詳細の要約を確認したら、「保存」をクリックします。

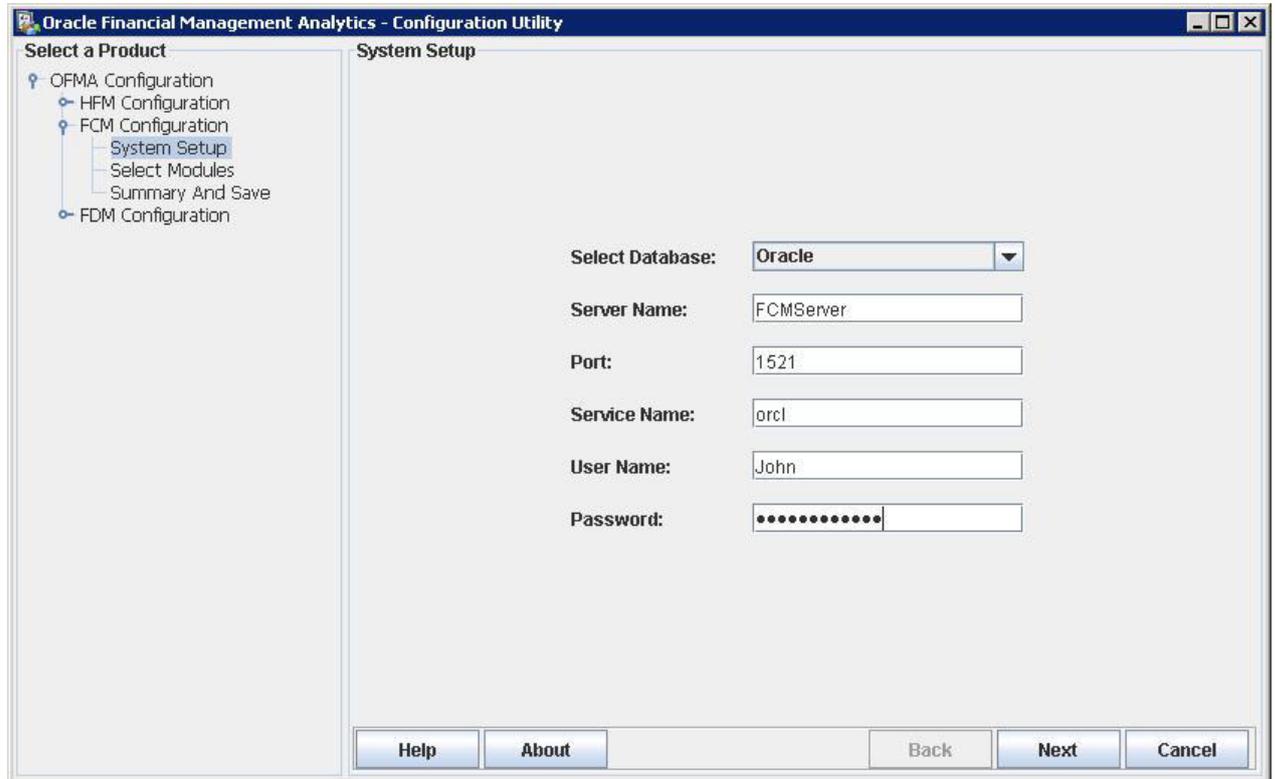
**注意** 正しい構成の詳細が指定されていることを確認してください。「保存」をクリックする前に、必要に応じて構成設定を変更できます。

## Financial Close Management のシステム構成の実行

- ▶ Financial Close Management のシステム構成を実行するには、次の手順に従います:

- 1 「ようこそ」画面で「システム構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
- 2 左側のパネルで「OFMA 構成」ノードを展開し、「FCM 構成」を選択します。
- 3 次の手順で示すように、「システム設定」画面で、Financial Close Management のデータベース構成設定を実行します:
  - 「データベースの選択」ドロップダウン・オプションで、「Oracle」または MS SQL の中からデータベースを選択します
  - 「サーバー名」に、Financial Close Management が実行されている Financial Close Management データベース・サーバー名を入力します。
  - 「ポート」に、ポート番号を入力します。
  - 「サービス名」に、データベースに接続する際に使用する一意の名前または別名を入力します。

- 「ユーザー名」に、書き込み権限のある Financial Close Management データベース・スキーマのデータベース・ユーザー名を入力します。
- 「パスワード」に、Oracle Hyperion Financial Close Management データベース・サーバーのデータベース・パスワードを入力します。



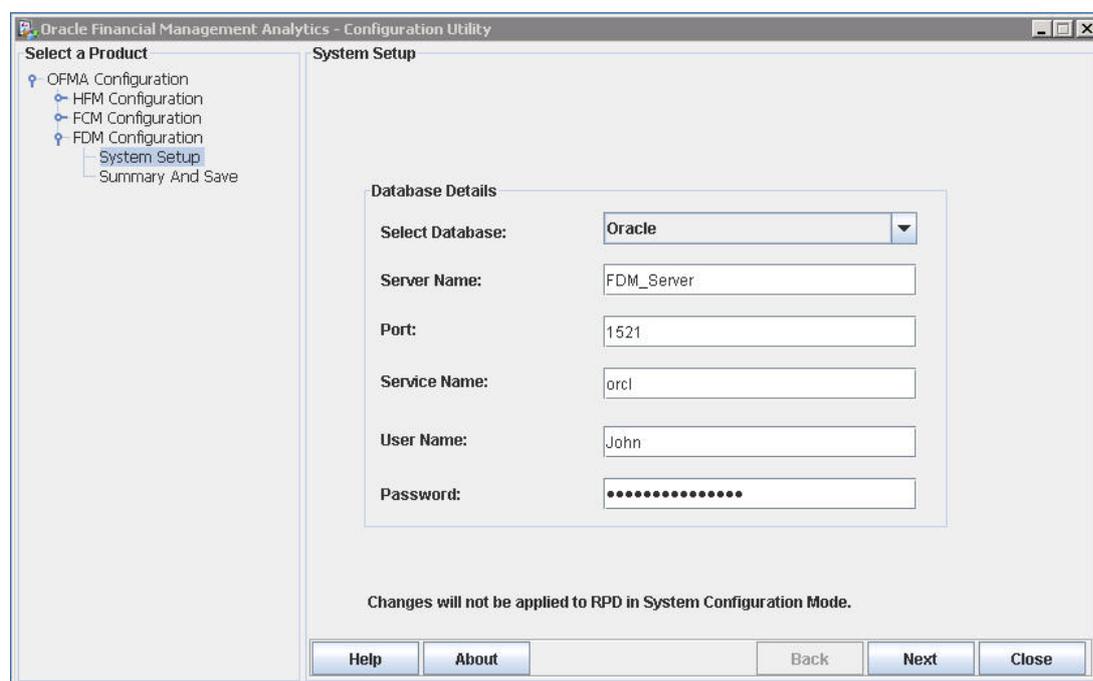
- 4 「次へ」をクリックして、データベース接続を確認します。
- 5 オプション: 「Close Manager の構成」モジュールを選択します。
- 6 オプション: 「Account Reconciliation Manager の構成」モジュールを選択します。
- 7 「次へ」をクリックして続行します。要約の画面に、データベース接続の詳細が表示されます。  
「要約」画面に、ユーティリティを使用して行った選択が表示されます。「要約」画面が表示されます。
- 8 構成の詳細の要約を確認したら、「保存」をクリックします。

**注意** 正しい構成の詳細が指定されていることを確認してください。「保存」をクリックする前に、必要に応じて構成設定を変更できます。

## FDM のシステム構成の実行

- ▶ FDM のシステム構成を実行するには、次の手順に従います:
  - 1 「ようこそ」画面で「システム構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
  - 2 左側のパネルで「OFMA 構成」ノードを展開し、「FDM 構成」を選択します。
  - 3 「システム設定」画面で、FDM データベース構成の設定を実行します:

- 「データベースの選択」から、「Oracle」またはMS SQLを選択します。  
Oracle データベースの場合を例にして説明します:
- 「サーバー名」に、FDM が実行されている FDM データベース・サーバー名を入力します。
- 「ポート」に、ポート番号を入力します。
- 「サービス名」に、データベースに接続する際に使用する一意の名前または別名を入力します。
- 「ユーザー名」に、書込み権限のある FDM データベース・スキーマのデータベース・ユーザー名を入力します。
- 「パスワード」に、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management データベース・サーバーのデータベース・パスワードを入力します。



- 4 「次へ」をクリックして続行します。要約の画面に、データベース接続の詳細が表示されます。
- 5 構成の詳細の要約を確認したら、「保存」をクリックします。

**注意** 正しい構成の詳細が指定されていることを確認してください。「保存」をクリックする前に、必要に応じて構成設定を変更できます。

## BI サーバーへのカタログおよびリポジトリのアップロード

この項では、カタログおよびリポジトリを BI サーバーにアップロードする方法の詳細を説明します。次のカテゴリに基づき、カタログまたは RPD ファイルを BI サーバーにアップロードする必要があります:

- 構成ユーティリティの設定の変更後、および構成の変更の保存後

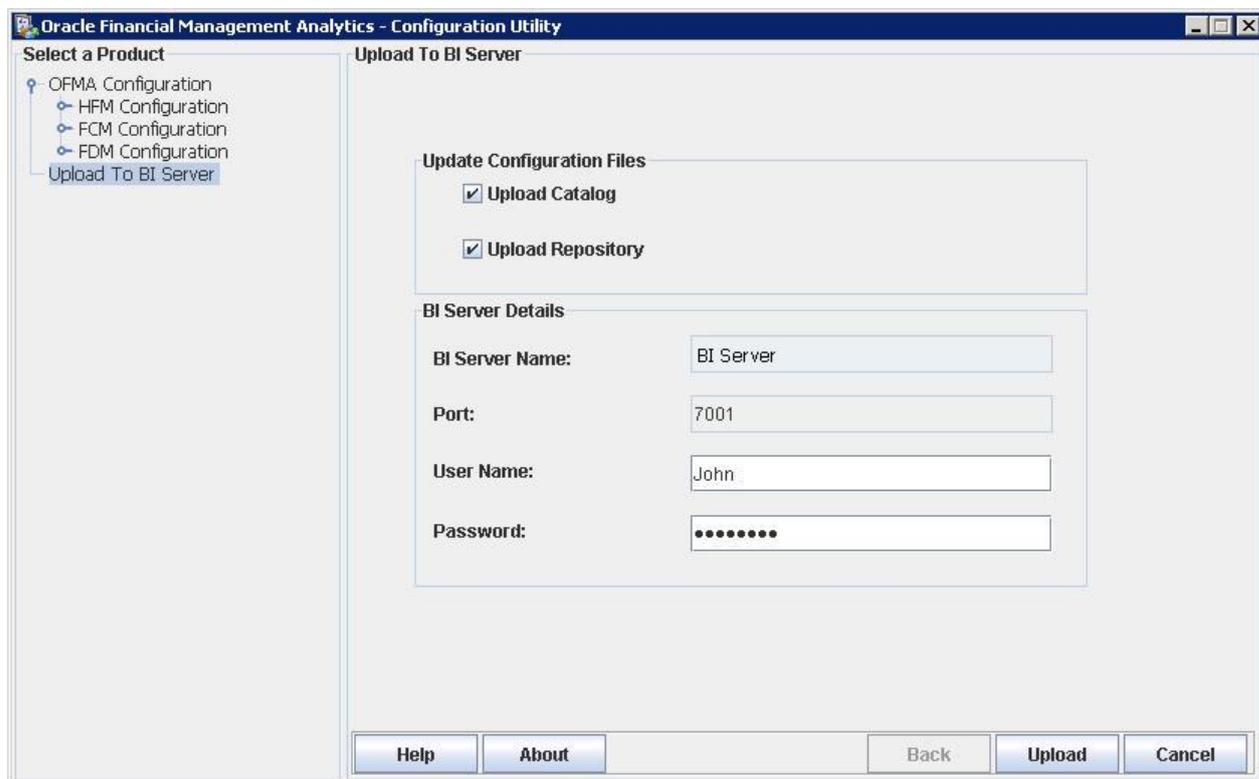
- RPD またはカタログ・ファイルの変更中

ファイルを正常にアップロードしたら、Oracle Financial Management Analytics ダッシュボードで変更を表示できます。

**注：** OFMA 構成ユーティリティで実行された変更に基づいて、「カタログのアップロード」および「リポジトリのアップロード」オプションが自動的に選択されます。ただし、選択内容は変更できます。

▶ BI サーバーにカタログおよびリポジトリをアップロードするには:

- 1 「BI サーバーへのアップロード」画面の「構成ファイルの更新」で、必要なオプションを選択します:



- Catalog フォルダをアップロードするには、「カタログのアップロード」を選択します。
- RPD ファイル関連の変更をアップロードするには、「リポジトリのアップロード」を選択します。

デフォルトでは、カタログおよびリポジトリのパスは同じです。ファイル・パス:

```
OFMA Installed Location
\OFMAHome_1\OFMA.
```

「BI サーバーの詳細」で、次の Oracle BI EE の設定を実行します:

- 「BI サーバー名」は、Oracle BI EE サーバーをホストするコンピュータの名前です。

- 「ポート」は、Oracle BI EE サーバーのポート番号です。
- 「ユーザー名」に、BI 管理者ユーザーの名前を入力します。
- 「パスワード」に、BI 管理者パスワードを入力します。

2 「アップロード」をクリックします。

# 7

## Oracle Financial Management Analyticsの起動

インストールおよび構成の後、Oracle Financial Management Analytics には Oracle BI EE からアクセスします。

▶ Oracle Financial Management Analytics にアクセスするには:

1 ブラウザに Oracle BI EE の URL を入力します。

URL のフォーマットは次のとおりです:

```
http://  
server name:port number/analytics
```

ここで:

- server name は、Oracle BI EE サーバーをホストするコンピュータの名前です。
  - port number は、Oracle BI EE サーバーのポート番号です。
  - analytics は、Oracle BI EE サーバー上の Oracle Financial Management Analytics に設定された仮想ディレクトリです。
- 2 Oracle BI EE のサインイン画面で、Financial Management 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。このユーザーには、Oracle Hyperion Financial Management と Oracle BI EE の両方の必須権限が付与されている必要があります。

**注:** ユーザー名とパスワードは大/小文字が区別されます。



3 オプション: ダッシュボードの表示に使用する言語を選択します。

デフォルト言語は英語です。

4 「サインイン」をクリックします。

Oracle Financial Management Analytics ホーム・ページが表示されます。

ダッシュボードの詳細は、『Oracle Financial Management Analytics ユーザー・ガイド』を参照してください。

# 8

## Oracle Financial Management Analyticsのカスタマイズ

### この章の内容

財務値のスケーリング .....	67
列のソート .....	68
プロセス管理レポートでの日数の設定 .....	69
条件のフォーマット .....	70
レポート名の変更 .....	72
会社のロゴの追加 .....	72
ダッシュボード・レポートの非表示 .....	73

場合によっては、事前設定済のダッシュボードの内容が不十分であったり、利用者によっては情報や形式が適切ではないことがあります。各レポートの「編集」オプションを使用して必要な情報が表示されるようにカスタマイズできます。

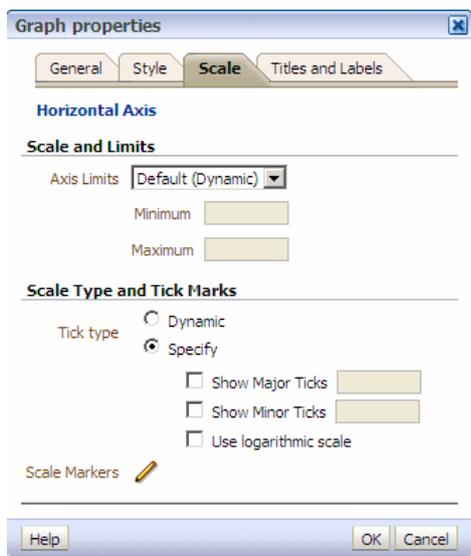
**注意** カスタマイズ・オプションは、承認された管理ユーザーのみが使用できます。レポートのカスタマイズは、Oracle BI EE および Oracle Business Intelligence アンサーの豊富な使用経験を持つ承認された管理者が行うことを強くお勧めします。

## 財務値のスケーリング

各レポートのスケールは、特定の値を反映するように変更できます。値を変更する場合は、個々のレポートごとに設定する必要があります。

▶ スケール値を設定するには:

- 1 Oracle BI EE の「ホーム」画面で、「ダッシュボード」、「OFMA」、必要なダッシュボードの順に選択します。
- 2 変更するレポートを選択し、「編集」をクリックします。
- 3 「結果」タブのツールバーで、「グラフ」ペインの「ビューの編集」ボタンをクリックし、 をクリックします。
- 4 「グラフのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「スケール」タブを選択します。



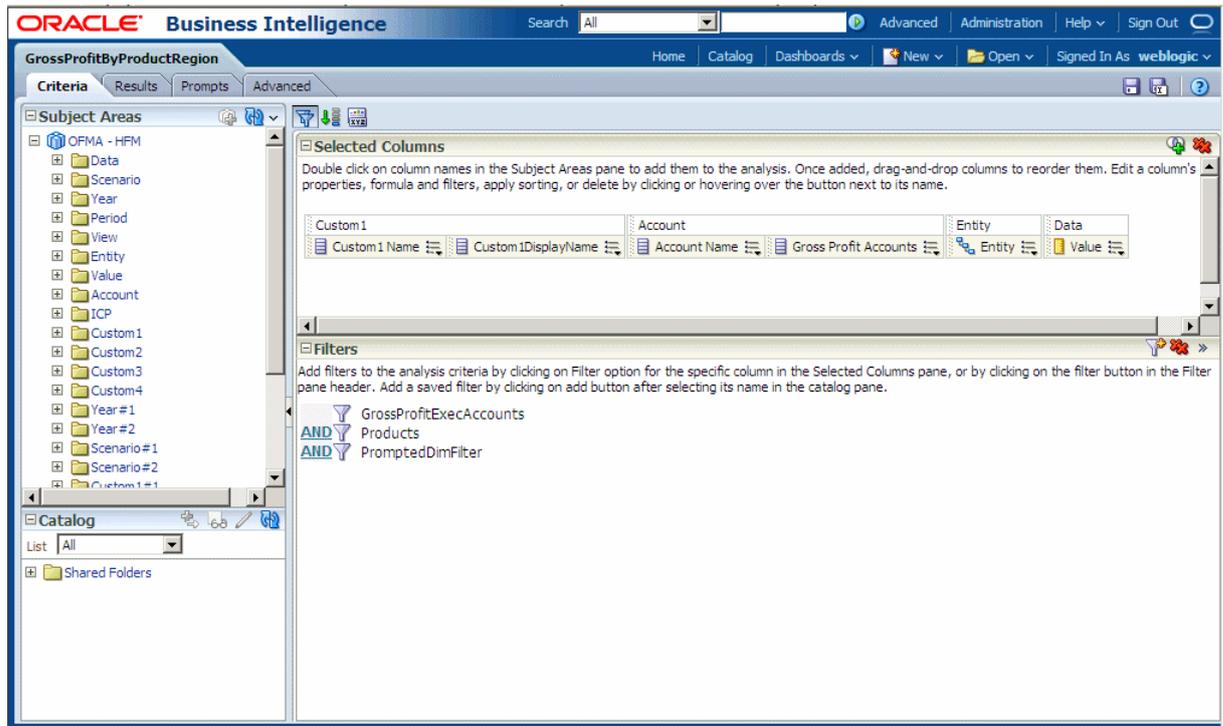
- 5 「スケールと制限」で、グラフの「軸の制限」を選択します:
  - デフォルトの制限を使用するには、「デフォルト(動的)」を選択します。
  - 「指定」を選択して制限を設定し、制限の「最小値」と「最大値」を入力します。
- 6 「スケール・タイプと目盛マーク」で、グラフの「目盛タイプ」を選択します:
  - デフォルトの設定を使用するには、「動的」を選択します。
  - 表示する目盛数の定義、表示するタイプの選択、関連する値の入力を行うには、「指定」を選択します:
    - 「主要目盛の表示」: 表示する主要目盛の数を指定します。
    - 「補助目盛の表示」: 表示する補助目盛の数を指定します。
    - 「対数スケールの使用」。
- 7 「OK」をクリックして、選択したレポートのスケールの変更を保存します。

詳細は、Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition ユーザー・ガイドを参照してください。

## 列のソート

「基準」タブでは、レポート内の列ごとにソート方法を設定できます。

- ▶ レポートの列をソートするには:
- 1 Oracle BI EE の「ホーム」画面で、「ダッシュボード」、「OFMA」、必要なダッシュボードの順に選択します。
  - 2 列を管理するレポートを選択し、「編集」をクリックします。
  - 3 「条件」タブを選択します。



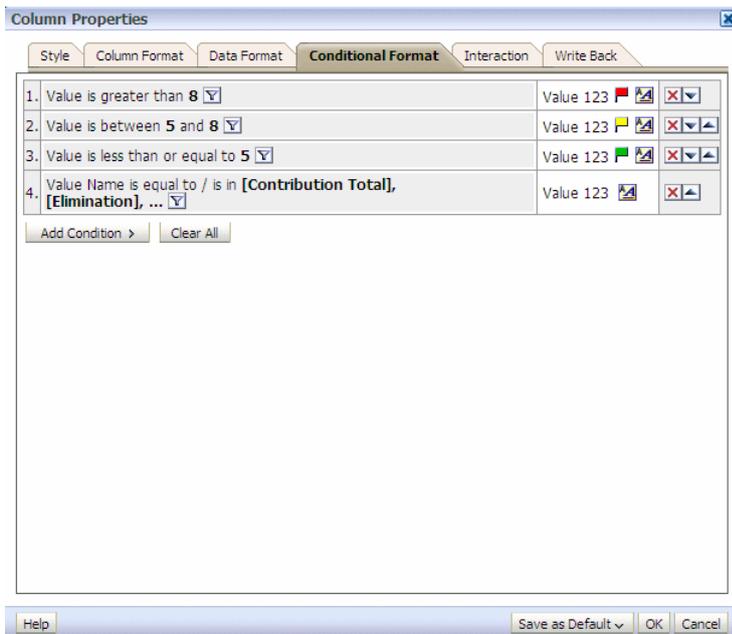
- 4 「選択された列」ペインで、ソートする列名の右にある  をクリックします。
- 5 「ソート」を選択して、列のソート方法を選択します：
  - 昇順ソート
  - 降順ソート
  - 昇順ソートの追加
  - 降順ソートの追加
  - ソートのクリア
  - すべての列におけるすべてのソートのクリア
- 6  をクリックします。

## プロセス管理レポートでの日数の設定

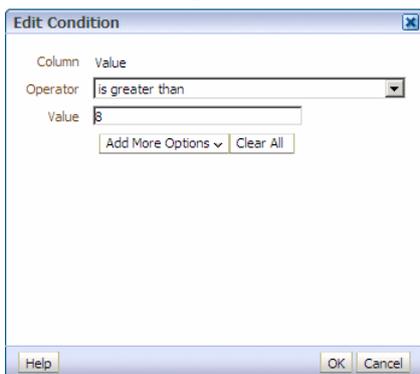
プロセス管理レポートで日数を設定し、個々のプロセスのステータスを示すことができます。

- ▶ 日数を設定するには:
- 1 Oracle BI EE の「ホーム」画面で、「ダッシュボード」、「OFMA」、「財務分析」の順に選択します。
  - 2 「プロセス管理」タブを選択します。
  - 3 「プロセス管理メトリック」レポートを選択して、「編集」をクリックします。
  - 4 「条件」タブを選択します。
  - 5 「選択された列」ペインの「データ」列で、 をクリックします。

- 6 「列のプロパティ」、「条件付き書式」の順に選択します。



- 7 「条件付き書式」の各条件で、 をクリックします。



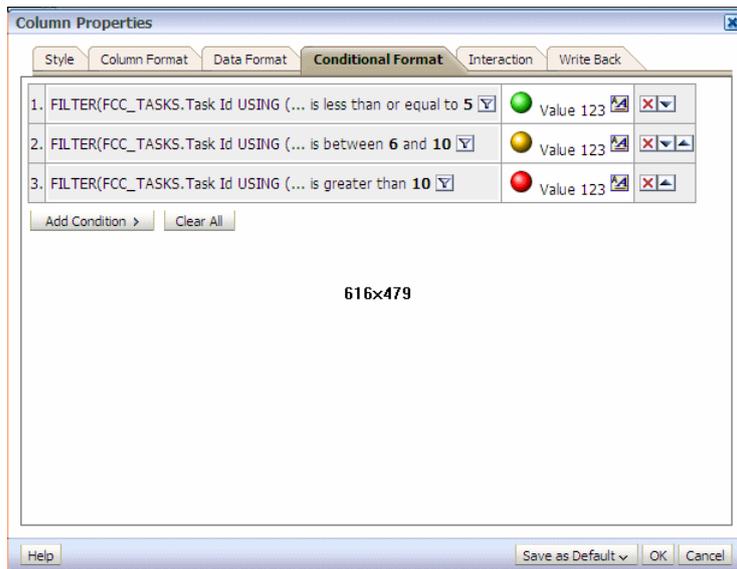
- 8 「条件の編集」ダイアログ・ボックスで、プロセス管理条件の値を設定します:
1. 「より大きい」、「より小さい」など、必要な「演算子」を入力します。
  2. 選択した演算子の日数として「値」を入力します。
  3. 「OK」をクリックします。
- 9 ダイアログ・ボックスにリストされている各条件に対して、[手順 7](#) と [手順 8](#) を繰り返します。これらの値は、プロセス管理レポートに表示される範囲(「よい」、  
要注意または遅れ)を反映します。
- 10  をクリックします。

## 条件のフォーマット

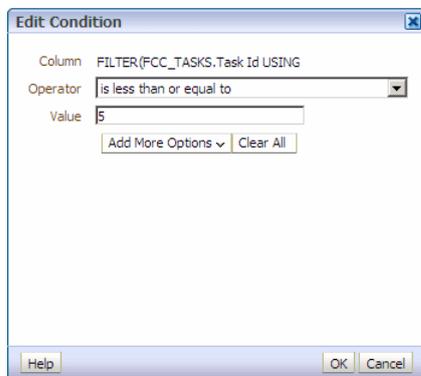
ステータスまたは条件の値を設定できます。

▶ レポートのステータス条件を設定するには:

- 1 Oracle BI EE の「ホーム」画面で、「ダッシュボード」、「OFMA」、必要なダッシュボードの順に選択します。
- 2 必要なレポートを選択して、「編集」をクリックします。
- 3 「条件」タブを選択します。
- 4 「選択された列」ペインの「条件」列で、をクリックします。
- 5 「列プロパティ」、「条件付きフォーマット」タブの順に選択します。



- 6 「条件付き書式」の各条件で、をクリックします。



- 7 「条件の編集」で、プロセス管理条件の値を設定します:
  - 1 「次より大きい」、「次より小さい」など、必要な「演算子」を入力します。
  - 2 選択した演算子の日数として「値」を入力します。
  - 3 「OK」をクリックします。
- 8 ダイアログ・ボックスにリストされている各条件に対して、[手順 7](#) と [手順 8](#) を繰り返します。これらの値は、要約のスケジュール・レポートに表示されるタスクのステータス(予定どおり、「要注意」またはスケジュール遅延)を反映します。
- 9 をクリックします。

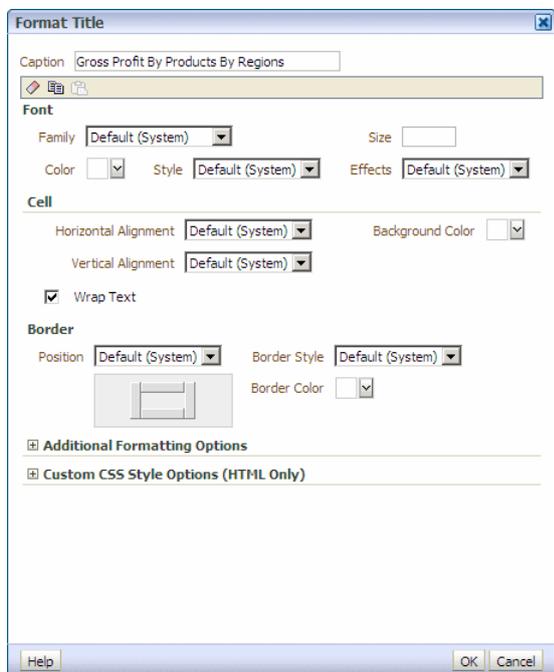
## レポート名の変更

組織の要件を反映するように、レポートの名前またはその他のハードコードされた文字列を変更できます。

これらの変更は、変更する各レポートのタイトルに適用する必要があります。

▶ レポート名を変更するには:

- 1 Oracle BI EE の「ホーム」画面で、「ダッシュボード」、「OFMA」、必要なダッシュボードの順に選択します。
- 2 名前を変更するレポートを選択し、「編集」をクリックします。
- 3 「結果」を選択します。
- 4 「複合レイアウト」ペインで、「タイトル」ペインの  をクリックします。
- 5 タイトルの横にある  をクリックします。



- 6 「キャプション」に、レポート・タイトルとして表示するテキストを入力します。
- 7 「終了」をクリックします。
- 8  をクリックします。

## 会社のロゴの追加

所属組織のロゴをダッシュボードに追加できます。

▶ 会社のロゴをダッシュボードに追加するには:

- 1 Oracle BI プレゼンテーション・サーバーの `fmap:images/` に、会社のロゴの .jpg ファイルを送信します。 .jpg は、グラフィック・ファイルの標準形式です。

**注：** 保護された環境で実行する場合は、Oracle BI プレゼンテーション・サーバーにあるリソースのみが使用されます。これらのリソースは、fmap という接頭辞が付いた相対パスを使用して参照されます。

- 2 Oracle BI EE の「ホーム」画面で、「ダッシュボード」、「OFMA」、必要なダッシュボードの順に選択します。
- 3 会社のロゴを追加するレポートを選択し、「編集」をクリックします。
- 4 「結果」を選択します。
- 5 「複合レイアウト」ペインで、「タイトル」ペインの  をクリックします。
- 6 「ロゴ」の横に、手順 1 の会社のロゴの場所へのパスを次の形式で入力します：

```
fmap:images/  
company_logo_name  
.jpg
```

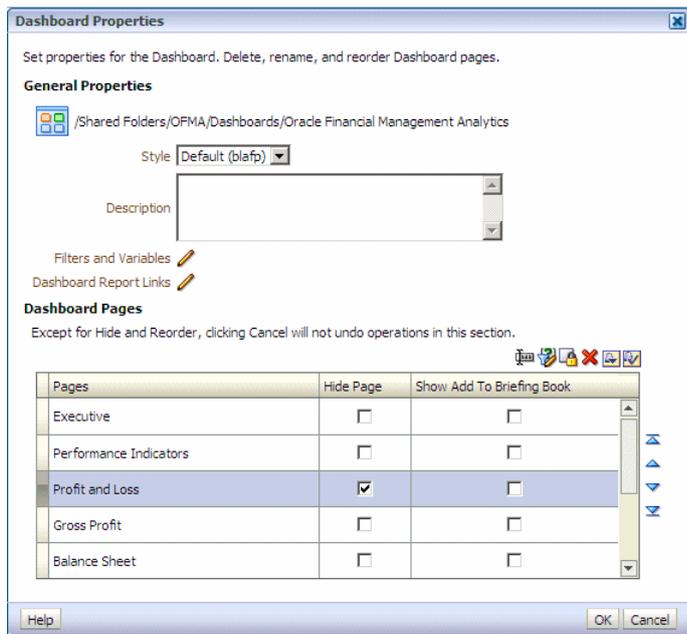
- 7 「終了」をクリックします。
- 8  をクリックします。

## ダッシュボード・レポートの非表示

必要のないダッシュボード・レポートを非表示にできます。

▶ ダッシュボード・レポートを非表示にするには:

- 1 Oracle BI EE の「ホーム」画面で、「ダッシュボード」、「OFMA」、必要なダッシュボードの順に選択します。
- 2 ダッシュボードのツールバーで、 をクリックし、「ダッシュボードの編集」を選択します。
- 3 「ダッシュボードの編集」ツールバーで、 をクリックし、「ダッシュボードのプロパティ」を選択します。



- 4 「ダッシュボードのプロパティ」の「ダッシュボード・ページ」で、非表示にする各ダッシュボードの横にある「ページの非表示」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 「ダッシュボードの編集」ツールバーで、をクリックします。

# A

## パフォーマンス・チューニング

### この付録の内容

パフォーマンス・チューニングのドキュメント .....	75
単一の BI サーバーに対するキャッシュの設定 .....	76
クラスタ環境に対するキャッシュの設定 .....	77
ロギングの無効化 .....	79

Oracle Financial Management Analytics のインスタンスはすべて、アプリケーション、ハードウェア、ソフトウェア、データベース、カスタマイズなどの一意の組合せで構成されています。このような多様性が存在するため、たとえば新規のハードウェアやソフトウェアなどで現行の構成を変更すると、パフォーマンスが変化する可能性があります。

新規のリリースやパッチのインストール、あるいは使用環境における実質的な変更を行った後は、これらのコンポーネントのなんらかのチューニングが必要になる場合がほとんどです。

パフォーマンス・チューニングは繰返しのプロセスです。パフォーマンスを最大化するには、インストール環境でコンポーネントを継続的に管理し、チューニングして監視します。

あらゆる状況に対応する確実なチューニング・ソリューションを備えることは容易ではありません。たとえば、バージョンやパッチが異なると、わずかに動作が異なる場合があります、その管理が必要になります。使用環境によっては、コンポーネント間の相互作用が異なる結果をもたらす可能性があります。同じ環境を共有しているこの製品や他の製品をカスタマイズすると、結果に影響を及ぼす場合もあります。

この付録は情報提供のみを目的としており、調査対象となりうる領域を提案し、インストール環境の最適なチューニングに役立つ情報ソースを提示します。

**注意** チューニングや設定などを試みる前に、データベースおよびモデルをバックアップしてください。

## パフォーマンス・チューニングのドキュメント

次のテーブルに、確認が必要な内容、またはチューニング情報が記載されている Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の一部のドキュメントを示します。

表 6 チューニングの参照資料

ドキュメント	サンプル・トピック
Oracle(R) Fusion Middleware パフォーマンスおよびチューニング・ガイド	<ul style="list-style-type: none"> <li>● SOA Suite のコンポーネント共通のチューニング</li> <li>● ロギング・レベル</li> <li>● JVM チューニング・パラメータ</li> <li>● データベースの設定</li> <li>● SOA 構成パラメータの変更</li> </ul>
Oracle(R) Fusion Middleware Oracle WebLogic Server JDBC のプログラミング	<ul style="list-style-type: none"> <li>● WebLogic のパフォーマンス向上機能</li> <li>● ベスト・パフォーマンスのためのアプリケーション設計</li> <li>● プールされた接続の使用によるパフォーマンスの向上</li> </ul>
Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド	<ul style="list-style-type: none"> <li>● パフォーマンス・チューニングと問合せキャッシングの管理</li> <li>● 共通パフォーマンス・メトリックを表示するための Fusion Middleware Control の使用</li> </ul>
Oracle(R) Fusion Middleware Oracle WebLogic Server パフォーマンスおよびチューニング	<ul style="list-style-type: none"> <li>● パフォーマンスチューニングのロードマップ</li> <li>● ディスクおよび CPU の使用状況のモニター</li> <li>● システムにおけるボトルネックの特定</li> <li>● アプリケーションのチューニング</li> </ul>

## 単一の BI サーバーに対するキャッシュの設定

デフォルトで、Oracle BI サーバーは、クエリー結果セットのローカルのディスクベース・キャッシュ(クエリー・キャッシュ)を管理します。クエリー・キャッシュを使用すると、Oracle BI サーバーはバックエンドのデータ・ソースにアクセスせずに、後続の多くのクエリー要求に対応できるようになるため、クエリーの応答時間が大幅に短縮されます。

キャッシュを有効にすることをお勧めします。キャッシュ・エントリ・サイズおよびキャッシュ・エントリ数を設定する際は、必要な情報を維持しながら、パフォーマンスへの影響を管理するために、生成されるデータ量と変更の頻度を考慮してください。

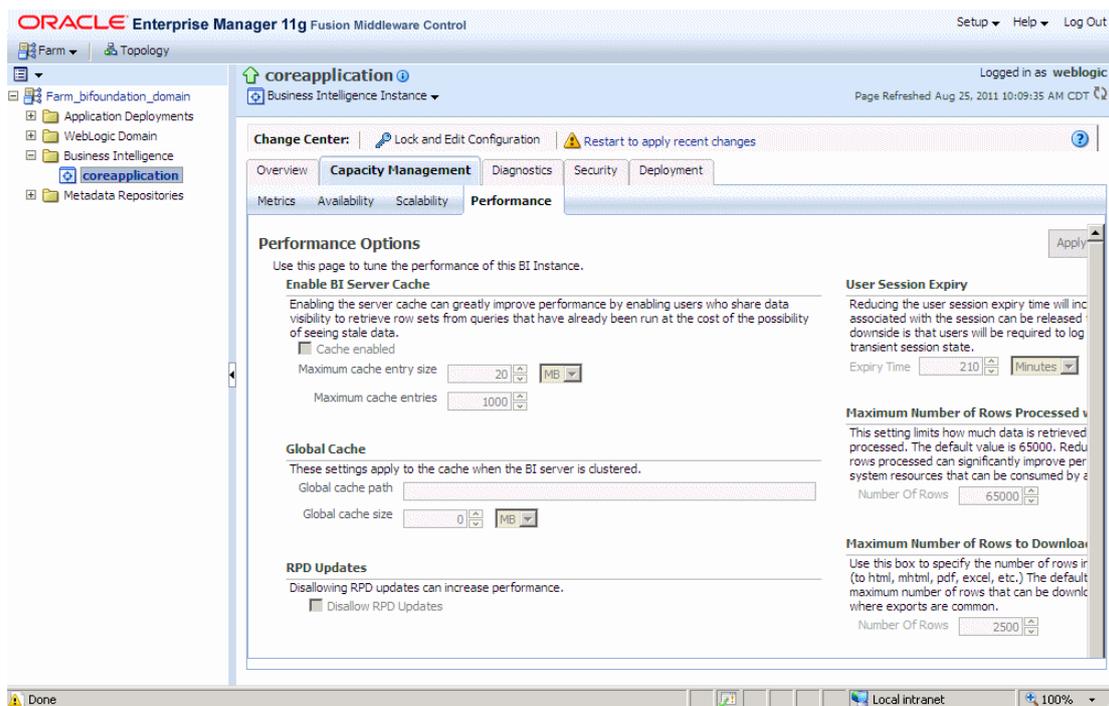
▶ BI サーバー・キャッシュを設定するには:

### 1 次に移動します:

```
http://
server name
:7001/em
```

Enterprise Manager を開きます。

- 2 Oracle Enterprise Manager の左ペインで、「Business Intelligence」、インスタンス名の順に選択します;たとえば、「coreapplication」です。
- 3 右ペインで「容量管理」、「パフォーマンス」の順にクリックし、「パフォーマンス・オプション」を表示します。



- 4 「BI サーバー・キャッシュの有効化」で、「キャッシュ有効」をクリックします。  
キャッシュはデフォルトで有効になっています。キャッシュを無効にするには、チェック・ボックスの選択を解除します。
- 5 「最大キャッシュ・エントリ・サイズ」に、MB 単位でキャッシュ・エントリの最大サイズを入力します。このサイズを超える潜在的なエントリはキャッシュされません。デフォルト・サイズは、20 MB です。
- 6 「最大キャッシュ・エントリ」に、クエリー・キャッシュで許可されるキャッシュ・エントリの最大数を入力します。この値を使用して、キャッシュ・ストレージ要件を管理します。デフォルト値は 1000 です。
- 7 「適用」をクリックします。
- 8 画面上部の「再起動して最近の変更を適用」をクリックします。  
再起動が他のユーザーに影響しないよう注意してください。サーバーを再起動すると、新しいキャッシュ要件が適用されます。

## クラスタ環境に対するキャッシュの設定

クラスタ環境では、グローバル・キャッシュと呼ばれる共有キャッシュにアクセスするよう Oracle BI サーバーを構成できます。グローバル・キャッシュは、共有ファイル・システムのストレージ・デバイスに存在し、ページ・イベント、シード・イベント(多くの場合、エージェントが生成)、およびシード・イベントに関連付けられた結果セットが格納されます。

各 Oracle BI サーバーでは、通常のクエリー用に、独自のローカル・クエリー・キャッシュも保持されます。

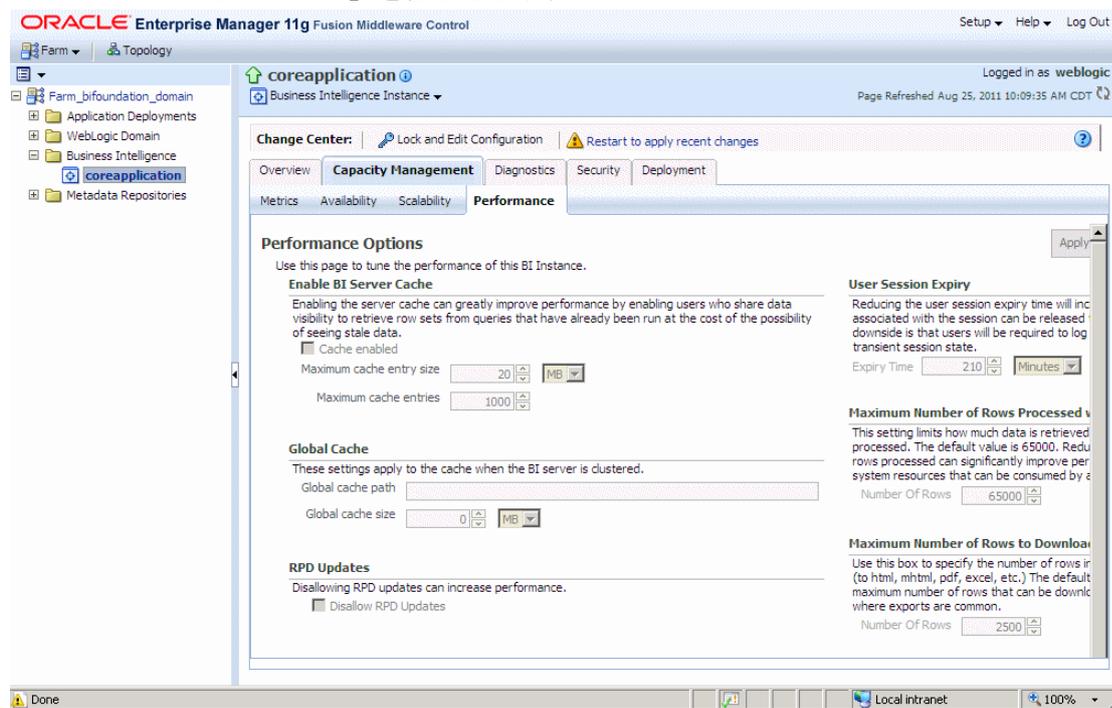
▶ クラスタ環境で BI サーバー・キャッシュを設定するには:

- 1 次に移動します:

http://  
server\_name  
:7001/em

Enterprise Manager を開きます。

- Enterprise Manager の左ペインで、「Business Intelligence」、「coreapplication」の順に選択します。
- 右ペインで「容量管理」タブ、「パフォーマンス」タブの順にクリックし、「パフォーマンス・オプション」を表示します。



- 「グローバル・キャッシュ」で、キャッシュに関する次の情報を入力します。

キャッシュはデフォルトで有効になっています。キャッシュを無効にするには、チェック・ボックスの選択を解除します。

- 「グローバル・キャッシュ・パス」に、クラスタ全体で共有するキャッシュ・エントリのパスとシードを格納する、物理的な場所へのパスを入力します。入力する場所は、クラスタのすべてのノードからアクセスできる共有ファイル・システムに存在する必要があります。
- 「グローバル・キャッシュ・サイズ」に、グローバル・キャッシュの最大サイズ(700MBなど)を指定します。この制限に達すると、潜在的な新しいエントリはキャッシュされません。

- 「適用」をクリックします。
- 画面上部の「再起動して最近の変更を適用」をクリックします。

再起動が他のユーザーに影響しないよう注意してください。サーバーを再起動すると、新しいキャッシュ要件が適用されます。

# ロギングの無効化

パフォーマンス向上のため、ロギングはデフォルトで無効にすることをお勧めします。問題の調査のため、サポートからロギングを要求された場合は簡単に有効にできます。

▶ ロギングを無効にするには:

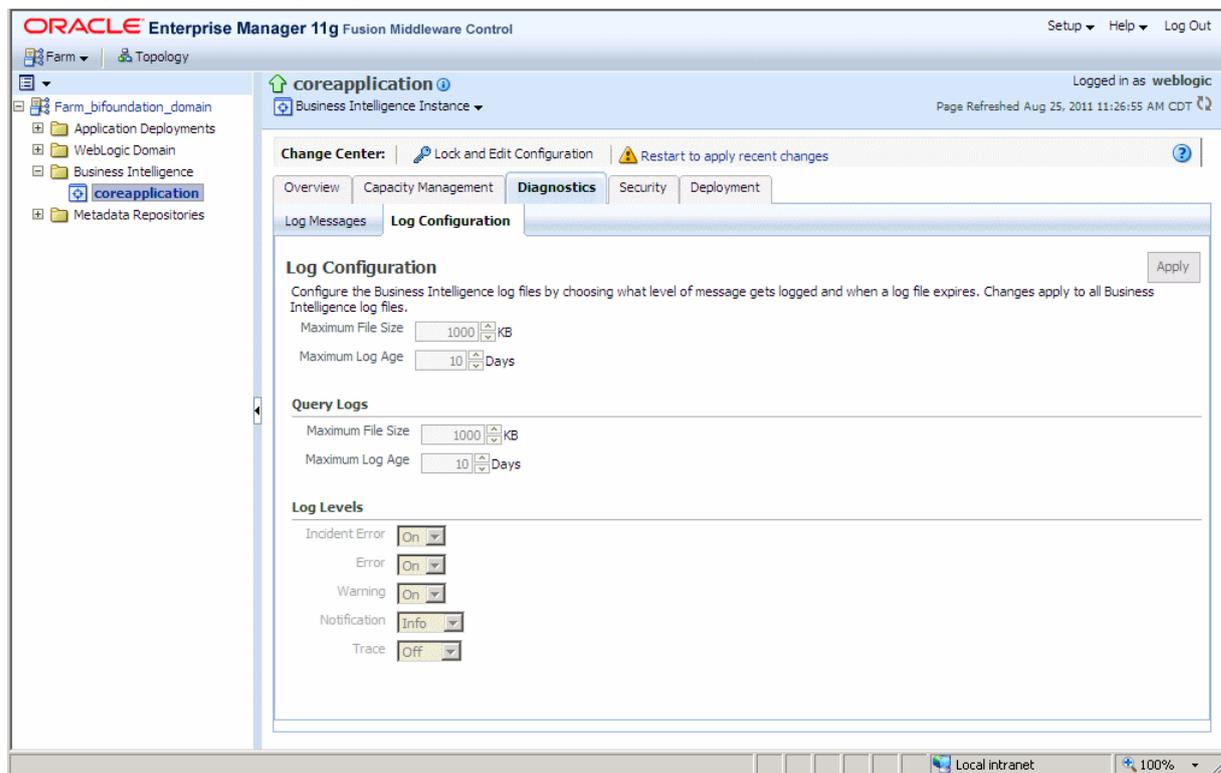
1 次に移動します:

```
http://  
server name  
:7001/em
```

Enterprise Manager を開きます。

2 Oracle Enterprise Manager の左ペインで、「Business Intelligence」、「coreapplication」の順に選択します。

3 右ペインで「診断」タブ、「ログ構成」タブの順にクリックし、ログ・パフォーマンス・オプションを表示します。



4 「ログ・レベル」で、次のログ・レベルをそれぞれ「オフ」に設定します:

- インシデント・エラー
- エラー
- 警告
- 通知
- トレース

5 「適用」をクリックします。

6 「変更のアクティブ化」をクリックします。

7 画面上部の「再起動して最近の変更を適用」をクリックします。

再起動が他のユーザーに影響しないよう注意してください。サーバーを再起動すると、ロギングが無効になります。

**注：** ロギングのリセットが必要な場合はこの手順を繰り返しますが、[手順 4](#)で、必要なロギングを「オン」にします。

---

# 用語集

---

## **ADF ビジネス・インテリジェンス・コンポーネント**

Oracle Business Intelligence のプレゼンテーション・カタログ・オブジェクトを ADF アプリケーションに組み込む機能を開発者に提供します。このコンポーネントでは、Oracle BI プレゼンテーション・カタログへのアクセスに SOAP 接続が使用されます。

**BI インスタンス** BI ドメインのシステム・コンポーネント(コアアプリケーション)のことです。[BI ドメイン](#)も参照してください。

**BI オブジェクト** プレゼンテーション・サービスを使用して作成され、Oracle BI プレゼンテーション・カタログに保存される各ビジネス・インテリジェンス・コンテンツ。BI オブジェクトの例には、分析、ダッシュボード・ページ、スコアカード、KPI などがあります。

**BI 検索** プレゼンテーション・サービス外にある検索ツール。管理者が BI 検索の URL へのリンクを追加していると、ホーム・ページから BI 検索を使用できます。BI 検索には、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトを検索するための全文検索エンジンに似たメカニズムが用意されています。

**BI ドメイン** 構成可能なシステム・コンポーネント(コアアプリケーション)と Java コンポーネント(WebLogic サーバー・ドメイン)が含まれ、Web ベースの管理ツールとリソースを利用するアプリケーションも含まれます。

BI ドメインは、1 つ以上の物理サーバーにまたがるミドルウェア・ホームのセットの場合もあります。[BI インスタンス](#)も参照してください。

**DSN** [データ・ソース名\(DSN\)](#)を参照してください。

**Essbase** Oracle から使用できる多次元データベース管理システムで、ビジネス・インテリジェンス・アプリケーションを構築するベースとなる多次元データベース・プラットフォームを提供します。Oracle Hyperion Essbase とも呼ばれます。

**Fusion Middleware Control** Fusion Middleware コンポーネントのモニターと構成を行える Web ベースの管理ツール。

**Go URL** 特定のビジネス・インテリジェンスの結果を外部ポータルやアプリケーションに組み込みます。Go URL は、結果をお気に入りに追加したり、ダッシュボードや外部 Web サイトへの要求にリンクを追加する場合に使用されます。様々な形式と、動作の制御に使用されるオプションの引数があります。

**Java components** 1 つ以上の Java EE アプリケーション(およびリソースのセット)として配置され、ノード・マネージャによって管理される Fusion Middleware Control コンポーネント。

[ノード・マネージャ](#)も参照してください。

**KPI 監視リスト** KPI をエンド・ユーザーに配布する方法。監視リストは KPI を集めたもので、カタログに格納されている KPI を追加して作成します。KPI 監視リストを作成して保存すると、カタログ・オブジェクトとして格納され、ダッシュボードやスコアカードに追加できます。

[キー・パフォーマンス・インディケータ\(KPI\)](#)も参照してください。

**OCI** [Oracle Call Interface \(OCI\)](#)を参照してください。

**ODBC** [Open Database Connectivity\(ODBC\)](#)を参照してください。

**Open Database Connectivity(ODBC)** リレーショナル・データベースとリレーショナル以外のデータベースの両方のデータのアクセスに使用される標準インタフェース。データベースごとに使用されるデータ格納形式やプログラミング・インタフェースが異なる場合も、データベース・アプリケーションでは ODBC を使用して、各タイプのデータベース管理システムに格納されているデータにアクセスできます。

**OPMN** [Oracle Process Manager and Notification Server \(OPMN\)](#)を参照してください。

**Oracle BI JavaHost** Java ライブラリに用意されている、グラフなどのコンポーネントをサポートするための機能をプレゼンテーション・サービスが使用できるようにするサービス。サービスは、要求/応答モデルに基づいて提供されます。Oracle BI 論理 SQL ビュー・オブジェクト

**Oracle BI Publisher** Oracle Business Intelligence 内の J2EE アプリケーションで、エンタープライズ全体の公開サービスを提供します。高度に書式設定された、ピクセル対応レポートを生成します。

[レポート](#)も参照してください。

**Oracle BI Publisher レポート** [レポート](#)を参照してください。

**Oracle BI 管理ツール** Oracle BI リポジトリの作成や編集に使用される Windows アプリケーション。管理ツールでは、リポジトリの3つの部分(物理レイヤー、ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー、およびプレゼンテーション・レイヤー)がグラフィック表示されます。

**Oracle BI サーバー** ODBC を介してプレゼンテーション・サービスや他のクライアントに提供する論理データ・モデルを保持するスタンドアロン・プロセス。データ・モデルに関するメタデータは、リポジトリ・ファイルと呼ばれるローカルの専用ファイルに保持されます。Oracle BI サーバーは、ユーザーの要求やベースとなるデータ・ソースのクエリーを処理します。

**Oracle BI サーバー XML API** Oracle BI リポジトリ・メタデータの汎用的な XML ベースのプレゼンテーションを作成するユーティリティを提供します。この XML ファイル版のリポジトリは、プログラムによるメタデータの変更に使用できます。Oracle BI サーバー XML API オブジェクトは、RPD ファイル内のメタデータ・リポジトリ・オブジェクトに相当します。これらのオブジェクトは、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内の XML オブジェクトとは異なります。

**Oracle BI スケジューラ** 指定された時間に結果をユーザーに配信するようスケジュールするための拡張可能なスケジューリング・アプリケーション。Oracle BI デリバーの機能をサポートするエンジンです。

[結果](#)も参照してください。

**Oracle BI プリーフィング・ブック** ダッシュボード・ページ、個々の分析および BI Publisher レポートの静的または更新可能なスナップショットの集まり。プリーフィング・ブックを PDF または MHTML 形式でダウンロードし、印刷または表示できます。エージェントを使用して、プリーフィング・ブックの更新、スケジュールおよび配信を行うこともできます。

**Oracle BI プレゼンテーション・カタログ** 分析やダッシュボードなどのビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを格納し、ユーザーが、オブジェクトの作成、アクセスおよび管理を行ったり、オブジェクト・ベースの特定のタスク(エクスポート、印刷、編集など)を行うインタフェースを提供します。カタログは、共有または個人のいずれかのフォルダに編成されます。

**Oracle BI プレゼンテーション・サービス** Web クライアントへのビジネス・インテリジェンス・データのプレゼンテーションに使用されるフレームワークとインタフェースを提供します。このプレゼンテーション・フレームワークのカスタマイズに使用されるプレゼンテーション・カタログ・サービスをファイル・システム上で管理します。このスタンドアロン・プロセスは、ODBC over TCP/IP を使用して Oracle BI サーバーと通信します。アンサー、デリバーおよびインタラクティブ・ダッシュボードと呼ばれるコンポーネントで構成されます。

[Open Database Connectivity\(ODBC\)](#)、[Oracle BI サーバー](#)、[Oracle BI プレゼンテーション・カタログ](#)、[Oracle BI プレゼンテーション・サービス・サーバー](#)も参照してください。

**Oracle BI プレゼンテーション・サービス・サーバー** 情報とデータを Oracle BI サーバーと交換する Oracle BI Web サーバー。

**Oracle BI リポジトリ** Oracle Business Intelligence メタデータを格納するファイル。メタデータは、論理スキーマ、物理スキーマ、物理から論理へのマッピング、集計テーブル・ナビゲーションやその他の構成体を定義します。リポジトリ・ファイルには、.rpd という拡張子が付きます。Oracle BI リポジトリは、Oracle BI 管理ツールを使用して編集できます。

[メタデータ](#)および [Oracle BI 管理ツール](#)も参照してください。

**Oracle BI 論理 SQL ビュー・オブジェクト** 開発者が、Oracle BI サーバーにアクセスしてビジネス・インテリジェンス・データをフェッチし、ネイティブ ADF コンポーネントにバインドして ADF ページに含める論理 SQL 文を作成できるようにします。このビュー・オブジェクトは、BI JDBC 接続を使用して Oracle BI サーバーに接続します。

**Oracle Business Intelligence SOA 用 Web サービス** BI ミドルウェア J2EE アプリケーションによってホストされる、ExecuteAgent、ExecuteAnalysis および ExecuteCondition の 3 つの Web サービスを含みます。これらの Web サービスは、開発者がサード・パーティ Web サービス・クライアント(Oracle SOA Suite など)を使用して、ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを検索したり、サービス指向アーキテクチャ・コンポーネントに含めたりすることを可能にするよう設計されています。

[Oracle Business Intelligence セッション・ベース Web サービス](#) も参照してください。

**Oracle Business Intelligence Web サービス** [Oracle Business Intelligence セッション・ベース Web サービス](#) および [Oracle Business Intelligence SOA 用 Web サービス](#) を参照してください。

**Oracle Business Intelligence セッション・ベース Web サービス** SOAP を実装する API。これらの Web サービスはプログラムでの使用を目的として設計されており、開発者は、1 つの Web サービスから多様なビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを起動します。これらの Web サービスは、様々なプレゼンテーション・サービス処理に対する機能を提供します。これらの Web サービスによって、開発者は、Oracle BI プレゼンテーション・サービスから結果を抽出して外部アプリケーションに配信したり、プレゼンテーション・サービス管理機能を実行したり、Oracle Business Intelligence アラート(インテリジェント・エージェントとも呼ばれる)を実行できます。

[Oracle Business Intelligence SOA 用 Web サービス](#) も参照してください。

**Oracle Call Interface (OCI)** Oracle Database データ・ソースへの接続に Oracle BI サーバーが使用する接続インタフェース。Oracle Database からのメタデータのインポートや Oracle Database への接続には常に OCI を使用する必要があります。

**Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)** すべてのシステム・コンポーネント(サーバー・プロセス)を管理し、ローカルと分散の両方のプロセス管理、自動プロセス・リサイクリングおよびプロセスの状態(稼働、停止、起動中、停止中)の伝達をサポートするプロセス管理ツール。OPMN は、プロセスの使用不可の状態を検知し、プロセスを自動的に再起動します。

[システム・コンポーネント](#) も参照してください。

**Oracle Scorecard and Strategy Management** ビジネス戦略を表明して伝達することができる業績管理ツール。企業の戦略や業績をトップ・ダウンまたはボトム・アップで推進したり評価できます。

**Oracle Technology Network (OTN)** オラクル社製品に関する技術情報のリポジトリで、記事の検索、ディスカッションへの参加、ユーザー・コミュニティへの技術的な質問およびオラクル社製品とドキュメントの検索とダウンロードを行えます。

[SQL 構造化問合せ言語\(SQL\)](#) を参照してください。

**WebLogic Scripting Tool (WLST)** WebLogic Server インスタンスとドメインの構成、管理および変更の保持と、サーバーの実行時のイベントのモニターおよび管理を可能にするコマンドライン・スクリプティング・インタフェース。

**WebLogic ドメイン** SOAP、HTTP およびその他の形式の要求のサービスに加わるよう構成された Java コンポーネントが含まれます。

**XML API** [Oracle BI サーバー XML API](#) を参照してください。

**アクション** 関連コンテンツへ移動したり、外部システムで操作、関数またはプロセスを起動する機能を提供します。アクションは、分析、ダッシュボード・ページ、エージェント、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアティブおよび KPI に含めることができます。[アクション・リンク](#) も参照してください。

**アクション・フレームワーク** アクション・フレームワークは、Oracle BI EE アーキテクチャのコンポーネントで、アクション実行サービス(AES)と呼ばれる J2EE アプリケーションと、Oracle BI EE の一部として配置される、アクションに固有の JavaScript 機能を含んでいます。アクション・フレームワークには、アクションの作成や特定のアクション・タイプをブラウザから直接起動するクライアント側の機能も含まれています。

**アクション・リンク** 分析、ダッシュボード・ページ、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアティブまたは KPI に埋め込まれたアクションへのリンクで、クリックすると、関連付けられているアクションが実行されます。 [アクション](#) も参照してください。

**値階層** [親子階層](#) を参照してください。

**イニシアティブ** スコアカードで使用されます。イニシアティブは、目標を達成するために必要な、時間に固有のタスクまたはプロジェクトです。したがって、目標をサポートするイニシアティブを、戦略ターゲットに対する進捗を示すマイルストーンとして使用できます。

[目標](#) および [Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください。

**イベント・ポーリング・テーブル** イベント・ポーリング・テーブル(イベント・テーブルとも呼ばれる)は、更新された物理テーブルに関する情報を Oracle BI サーバーに提供します。クエリー・キャッシュを最新に保つために使用されます。Oracle BI サーバー・キャッシュ・システムはイベント・テーブルを調べ、物理テーブルの情報を行から抽出し、それらの物理テーブルを参照する古いキャッシュ・エントリをパージします。

**イメージ・プロンプト** 特定の値がマップされた異なる領域のイメージを提供するプロンプト。ユーザーがイメージ領域をクリックすると、プロンプト値が選択され、分析またはダッシュボードに移入されます。

[プロンプト](#) も参照してください。

**エージェント** ビジネス・プロセスの自動化を可能にします。エージェントは、イベント駆動型アラート、スケジュールによるコンテンツの公開および条件付きイベント駆動型アクションの実行に使用できます。

エージェントは、情報ベースで問題と機会を動的に検出し、適切な通知対象ユーザーを判断し、そのユーザーに様々なデバイス(電子メール、電話など)で情報を配信します。

**オフライン・モード** Oracle BI サーバーにロードされていないリポジトリをリポジトリ作成者が編集できる Oracle BI 管理ツール内のモード。

**オブジェクト・プロパティ** オブジェクト、および所有者がオブジェクトに割り当てた属性に関する情報。プロパティの例には、名前、説明、日付スタンプ、読取り専用アクセス、インデックスなしフラグなどがあります。

[権限](#) も参照してください。

**親子階層** タイプがすべて同じメンバーの階層。親子階層の次元メンバーはすべて 1 つのデータ・ソースに存在します。親子階層では、メンバー間の関係は、次元メンバー間の親子関係です。

[次元](#) も参照してください。

**親子関係テーブル** 親子階層でのメンバー間の関係を明示的に定義する値を持つテーブル。クロージャ・テーブルとも呼ばれます。

**オンライン・モード** リポジトリをクエリー処理に使用すると同時にリポジトリ作成者が編集できる Oracle BI 管理ツール内のモード。オンライン・モードでは、リポジトリ内のサブジェクト・エリアに接続しているユーザーのユーザー・セッション・モニタリングも可能です。

**階層** 1 対多関係で相互に関連を持つ、Oracle BI リポジトリ内の論理次元のレベルのシステム。すべての階層は共通のリーフ・レベルと共通のルート・レベルを持つ必要があります。

階層は、メタデータでは個別のオブジェクトとしてモデル化されていません。かわりに、次元オブジェクトに暗黙的に含まれています。

[次元](#)、[論理レベル](#) および [プレゼンテーション階層](#) を参照してください。

**階層列** 名前付きレベルと親子関係の両方を使用して編成されたデータ値が含まれたプレゼンテーション・サービス内の列。この列は、ツリーのような構造を使用して表示されます。個々のメンバーは、下位メンバーが上位メンバーにまとめられて略示されます。たとえば、特定の日は特定の月に属し、特定の月は特定の年内にあります。時間や地域などがこの例です。

**階層レベル** ロールアップしたり、他のレベルからロールアップされる、プレゼンテーション・サービスの階層列内のオブジェクト。Oracle BI リポジトリのプレゼンテーション・レベルに相当します。

[プレゼンテーション・レベル](#) も参照してください。

**カスタム・ビュー** ビジネスと戦略のデータのカスタマイズされたビューを表示できるようにするスコアカードのコンポーネント。[Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください。

**仮想物理テーブル** ストアド・プロシージャまたは SELECT ステートメントから作成される物理テーブル。仮想テーブルを作成することによって、Oracle BI サーバーおよびベースとなるデータベースに、高度なクエリー要求の実行に適したメタデータが提供されます。

**カタログ** [Oracle BI プレゼンテーション・カタログ](#) を参照してください。

**管理サーバー** WebLogic サーバー・ドメインの一部で、Oracle Business Intelligence コンポーネントを管理するプロセスを実行します。管理サーバーには、Oracle WebLogic Server 管理コンソールおよび Oracle Fusion Middleware Control が含まれています。[Fusion Middleware Control](#) および[管理対象サーバー](#) も参照してください。

**管理対象サーバー** 個々の J2EE アプリケーション・コンテナ(JMX MBean コンテナ)。ローカル・ミドルウェア・ホーム内に含まれる Java コンポーネントとシステム・コンポーネントに、個別のホストのローカル管理機能を提供し、構成と配置の全情報については管理サーバーを参照します。

[管理サーバー](#) および [Fusion Middleware Control](#) も参照してください。

**外部キー** 別のテーブルの主キー列を参照する、テーブルの列または列のセット。

**基準** [分析基準](#) を参照してください。

**キューブ** リレーショナル・データベースの構造よりデータの分析時間が短く、柔軟性が高い OLAP(オンライン分析処理)データ構造。キューブはメジャーで構成され、次元で編成されます。多次元データ・ソースのキューブは、リレーショナル・データベース・モデルのスター・スキーマにほぼ相当します。

**キー・パフォーマンス・インディケーター(KPI)** 特定のビジネス・ゴールと戦略目標を定義し、追跡する測定法。KPI をまとめると、モニター、改善および評価を必要とする、より大きな組織の戦略につながるものが多くあります。KPI は、通常時間とともに変わる測定可能な値で、スコアとパフォーマンス・ステータスを決定するためのターゲットを持ちます。詳細な分析を可能にする次元が含まれ、トレンド用およびパフォーマンス・パターンの特定のために経時的な比較を行えます。

[Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください。

**駆動テーブル** 一方のテーブルが非常に小さく(駆動テーブル)、他方のテーブルが非常に大きい場合に Oracle BI サーバー・プロセスが複数データベース結合を処理する方法の最適化に使用されるメカニズム。

**クラスタ・コントローラ** プレゼンテーション・サービスや他のクライアントからの新規要求の最初の接点となるプロセス。クラスタ・コントローラは、Oracle BI サーバーの可用性と負荷に基づいて、要求の振分け先のクラスタ内の Oracle BI サーバーを決定します。Oracle BI スケジューラ・インスタンスなどのクラスタ内のサーバーの処理をモニターします。クラスタ・コントローラは、アクティブ/パッシブ構成に配置されます。

**グローバル・ヘッダー** Oracle BI プレゼンテーション・サービスのユーザー・インタフェース・オブジェクトで、ユーザーが速やかにタスクを開始したり、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内の特定のオブジェクトを検出できるリンクやオプションが含まれます。グローバル・ヘッダーはプレゼンテーション・サービスのユーザー・インタフェースに常に表示されるため、ユーザーはリンクに簡単にアクセスでき、ホーム・ページや「カタログ」ページに移動しなくてもカタログを検索できます。

**結果** Oracle BI サーバーから返される、分析に対する出力。

[分析](#) も参照してください。

**権限** オブジェクトへのアクセスが可能なユーザーを指定し、ユーザーのオブジェクトとの対話方法を制限します。権限の例には、書込み、削除、変更などの権限があります。

[オブジェクト・プロパティ](#) を参照してください。

**原因/結果マップ** 目標の因果関係を示すスコアカードのコンポーネント。 [Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください。

**構造化問合せ言語(SQL)** データのクエリーと変更のための標準的なプログラミング言語。 Oracle Business Intelligence では、付加価値のある独自の拡張機能をいくつか持った SQL-92 標準がサポートされます。

[論理 SQL](#) も参照してください。

**コンテキスト・イベント・アクション** アクション・フレームワークを使用して、ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトから ADF ページの別の領域にコンテンツを渡す事前配信済アクション。

[アクション](#)、[アクション・フレームワーク](#)および[アクション・リンク](#)も参照してください。

**コンテンツ・デザイナー** 分析、ダッシュボード、スコアカードなどのビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを作成するユーザー。

**サブジェクト・エリア** 特定の Oracle BI リポジトリ内で、ビジネス・モデルに関するデータを編成したり、表示するプレゼンテーション・レイヤーのオブジェクト。プレゼンテーション・レイヤーの最上位レベルのオブジェクトで、プレゼンテーション・サービスでユーザーに表示されるデータのビューを表します。Oracle BI リポジトリのサブジェクト・エリアには、プレゼンテーション・テーブル、プレゼンテーション列およびプレゼンテーション階層が格納されます。

プレゼンテーション・サービスでは、サブジェクト・エリアに、フォルダ、メジャー列、属性列、階層列およびレベルが含まれます。

**システム・コンポーネント** Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)によって管理されるサーバー・プロセス(Java アプリケーションではない)。

[Oracle Process Manager and Notification Server \(OPMN\)](#) も参照してください。

**集計テーブル** 次元属性のセットに対して集計される、あらかじめ計算されたメジャーからの結果を格納するテーブル。集計テーブルの各列には、特定のレベルのセットのデータが含まれます。たとえば、月間売上テーブルには、各月の各店舗での各製品の収益の合計があらかじめ計算されて含まれます。集計テーブルを使用すると、パフォーマンスが向上します。

**集計の永続性** 集計テーブルとこれに対応する Oracle Business Intelligence メタデータ・マッピングの作成とロードを自動化し、集計ナビゲーションを可能にする機能。

**集計ルール** Oracle BI リポジトリの論理列または物理キューブ列に適用されるルールで、SUM などの特定の集計関数を列データに適用するよう指定します。

プレゼンテーション・サービスで、ユーザーは、リポジトリで適用されたルールを表示できます。ユーザーは、メジャー列に対するデフォルトの集計ルールを変更することもできます。

**主キー** 各値が一意で、テーブルの 1 行を識別する列(または列のセット)。

**初期化ブロック** 動的リポジトリ変数、システム・セッション変数およびシステム以外のセッション変数の初期化に使用されます。初期化ブロックには SQL 文が含まれ、これを実行するとそのブロックに関連付けられた変数の初期化やリフレッシュが行われます。

**次元** 論理列(属性)の階層状の編成。1 つ以上の論理次元テーブルが最大 1 つの次元に関連付けられます。

次元には、1 つ以上の(名前なし)階層が含まれます。論理次元には、レベル・ベースの階層(構造階層)を持つ次元と親子階層(値階層)を持つ次元の 2 種類があります。

時間次元と呼ばれる特定のタイプのレベル・ベースの次元は、時系列データをモデリングするための特別な機能を提供します。

[階層](#) も参照してください。

**次元テーブル** 特定の次元で使用される列を含む論理テーブル。次元テーブルをファクト・テーブルにすることはできません。[ファクト・テーブル](#)も参照してください。

**条件** 分析またはキー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)の評価に基づいて1つのブール値を返すオブジェクト。条件を使用して、エージェントがコンテンツを配信してアクションを実行するかどうか、アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示するかどうか、セクションとそのコンテンツをダッシュボード・ページに表示するかどうかが決まります。

[アクション](#)、[アクション・リンク](#)、[エージェント](#)および[キー・パフォーマンス・インディケータ\(KPI\)](#)も参照してください。

**スコアカード** [Oracle Scorecard and Strategy Management](#) を参照してください。

**スター・スキーマ** 履歴情報の次元分析を可能にするリレーショナル・スキーマ。スター・スキーマでは、論理次元テーブルと論理ファクト・テーブルの間に1対多関係があります。各スターは、1つのファクト・テーブルと正規化されていない次元テーブルのセットで構成されます。

**スノーフレイク・スキーマ** 1つ以上の次元が部分的あるいは完全に正規化された次元スキーマ。

**セッション変数** [変数](#)を参照してください。

**接続プール** データ・ソースの接続情報を含む、Oracle BI リポジトリの物理レイヤーのオブジェクト。

[物理レイヤー](#)も参照してください。

**選択ステップ** クエリーの集計後に適用される値の選択。表示されているメンバーにのみ作用し、結果の集計値には作用しません。フィルタ同様、選択ステップは分析の結果を限定します。

[分析](#)および[フィルタ](#)も参照してください。

**戦略ツリー** 目標とこれをサポートする子目標およびKPIがツリー図に階層状に表示されるスコアカードのコンポーネント。

[Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください

**戦略マップ** スコアカードに定義された目標と目標の進捗を測定するKPIをパースペクティブによってどのように関係付けるかを示すスコアカードのコンポーネント。因果関係も示されます。

[Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください。

**属性** Oracle BI リポジトリでの次元の詳細。属性は、通常、次元テーブルの列として表示されます。

**属性列** プレゼンテーション・サービスで、メンバーとも呼ばれる値のフラット・リストを保持する列。これらのメンバー間に、階層列のメンバーのような階層関係はありません。製品IDや市などがこの例です。[階層列](#)を参照してください。

**ダッシュボード** 企業や外部情報のパーソナライズされたビューを提供するオブジェクト。ダッシュボードは、1つ以上のページで構成されます。ページには、分析の結果、イメージ、エージェントからのアラートなどのWebブラウザでアクセスしたり開くことのできる任意のオブジェクトを表示できます。

**ダッシュボードURL** 外部ポータルまたはアプリケーションでの特定のダッシュボードのコンテンツの組み込みや参照に使用されます。様々な形式と、動作の制御に使用されるオプションの引数があります。

**ダッシュボード・プロンプト** ダッシュボードに追加されたプロンプト。ユーザーがプロンプト値を選択すると、ダッシュボードに含まれているすべての分析の表示内容がその値によって決まります。次を参照してください:[分析プロンプト](#)および

**断片化の内容** 指定されたレベルのデータのセット全体が論理テーブル・ソースに含まれていない場合の論理テーブル・ソース内の指定されたデータのセットの一部。断片化の内容は、「論理表ソース」ダイアログ・ボックスの「内容」タブの「断片化の内容」ボックスに入力された論理列によって定義されます。

**通貨プロンプト** 分析またはダッシュボードの通貨列に表示される通貨タイプをユーザーが変更できるようにするプロンプト。[プロンプト](#)も参照してください。

**データ・ソース名(DSN)** 特定のデータベースに関する情報を含むデータ構造。通常、ODBCドライバによってデータベースへの接続に使用されます。DSNには、名前、ディレクトリ、データベースのドライバなどの情報が含まれます。

Oracle BI リポジトリの物理レイヤーの接続プール・オブジェクトには、各データ・ソースのDSN情報が含まれています。

**データベース・ヒント** SQL 文内に配置され、最も効率的に文を実行する方法をデータベース・クエリー・オブティマイザに指定する指示。ヒントはオブティマイザの実行計画をオーバーライドするため、ヒントを使用してオブティマイザにより効率的な計画を使用させ、パフォーマンスを向上させることができます。ヒントは、Oracle Database データ・ソースでのみサポートされます。

**問合せ** Oracle BI サーバーに発行される、ベースとなる SQL 文が含まれています。Oracle Business Intelligence の使用にクエリー言語の知識は必要ありません。

**問合せキャッシュ** 他のクエリーで使用できるようクエリーの結果を格納する機能。

**時系列キー** 次元レベル内のメンバーの時系列を示す時間次元の列。キーは、そのレベルで一意である必要があります。

**ノード・マネージャ** Java プロセスが応答しなくなったり、予期せず終了した場合にリモート・サーバーの起動、停止および再起動の機能を提供するデーモン・プロセス。

[Java components](#) も参照してください。

**パススルー計算** Oracle BI サーバーによって計算されるのではなく、別のデータ・ソースに渡される計算。上級ユーザーが、Oracle BI リポジトリを変更することなく、データ・ソースの機能と関数を活用できるようにします。

**パースペクティブ** スコアカードでイニシアティブ、目標および KPI に関連付ける組織内のカテゴリ。パースペクティブにより、主要な利害関係者(顧客、従業員、株主、金融関係者など)またはキー・コンピテンシ領域(時間、コスト、品質など)を示すことができます。

[イニシアティブ](#)、[キー・パフォーマンス・インディケータ\(KPI\)](#)、[目標](#)および [Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください。

**非バランス型階層** リーフの深さが一様でない階層。たとえば、現在の月では日レベルのデータを格納し、前月では月レベルで格納して、過去5年間のデータは四半期レベルで格納するような選択が可能です。

[階層](#) も参照してください。

**ビジネス所有者** ビジネス価値、および KPI やスコアカード・オブジェクト(目標、原因/結果マップなど)のパフォーマンスの管理と向上の責任を負うユーザー。

**ビジネス・モデル** ビジネス・モデル定義と、論理テーブルから物理テーブルへのマッピングが含まれます。ビジネス・モデルは、物理レイヤーのオブジェクトと異なり、常に次元化され、データ・ソースの編成が反映されます。各ビジネス・モデルには、論理テーブル、列および結合が含まれます。

**ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー** データのビジネス・モデルまたは論理モデルを定義し、ビジネス・モデルと物理レイヤー・スキームとの間のマッピングを指定する Oracle BI リポジトリのレイヤー。このレイヤーには、1つ以上のビジネス・モデルが含まれます。

ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーによって、ユーザーに表示される分析動作が決まり、ユーザーが使用できるオブジェクトのスーパーセットが定義されます。ソース・データ・モデルの複雑さも隠します。

**ビジョン・ステートメント** 組織が将来的にどうありたいかを表した、スコアカード内の簡潔なステートメントです。たとえば、南米ポリプロピレン市場で最も成功した企業になるなどです。

[ミッション・ステートメント](#)および [Oracle Scorecard and Strategy Management](#) も参照してください。

**ファクト・テーブル** メジャーを含み、次元テーブルと複雑な結合関係にある、Oracle BI リポジトリ内のビジネス・モデルとマッピング・レイヤーの論理テーブル。[次元テーブル](#)も参照してください。

**フィルタ** 分析の実行時に表示される結果を限定する、属性列とメジャー列に適用される基準。メジャー列の場合、フィルタはクエリーの集計前に適用され、クエリーと結果の値に作用します。

[プロンプト](#)および[選択ステップ](#)も参照してください。

**不規則な階層** [非バランス型階層](#)を参照してください。

**複合結合** 等号以外の式を使用する、Oracle BI リポジトリの物理レイヤーでの結合。

**複合データベース結合** Oracle BI リポジトリ内の2つのテーブルの結合。各テーブルは異なるデータベース内にあります。

**不透明なビュー** SELECT ステートメントを構成する物理レイヤー・テーブル。Oracle BI リポジトリでは、不透明なビューは、物理データベース内のビュー・テーブルのように見えますが、ビューは実際には存在しません。

**ブックマーク・リンク** ダッシュボード・ページへのパスとページの状態のあらゆる側面を取り込みます。[プロンプト・リンク](#)を参照してください。

**物理カタログ** リポジトリの物理レイヤーにある、異なるスキーマをまとめるオブジェクト。カタログには、データベース・オブジェクトのすべてのスキーマ(メタデータ)が含まれます。

**物理結合** Oracle BI リポジトリの物理レイヤーのテーブル同士の結合。

**物理スキーマ** バックエンド・データベースからのスキーマを表す Oracle BI リポジトリの物理レイヤーのオブジェクト。

**物理テーブル** Oracle BI リポジトリの物理レイヤーのオブジェクトで、通常、物理データベースに存在するテーブルに相当します。

[物理レイヤー](#)も参照してください。

**物理表示フォルダ** Oracle BI リポジトリの物理レイヤーにオブジェクトを編成するフォルダ。メタデータ上の意味はありません。

**物理レイヤー** バックエンド・データ・ソースからの物理データ構成体を表すオブジェクトを含む Oracle BI リポジトリのレイヤー。物理レイヤーは、物理クエリーの記述に使用できるオブジェクトと関係を定義します。このレイヤーによってソースの依存性がカプセル化され、移植とフェデレーションが可能になります。

**ブリッジ・テーブル** 2つのテーブルの間の多対多関係を解決するテーブル。

**ブリーフィング・ブック** [Oracle BI ブリーフィング・ブック](#)を参照してください。

**分析** ユーザーがプレゼンテーション・サービスの「基準」タブで作成するクエリー。分析には、オプションでフィルタまたは選択ステップを1つ以上含め、結果を限定することができます。[フィルタ](#)および[選択ステップ](#)も参照してください。

**分析基準** 分析に指定された列、フィルタおよび選択ステップで構成されます。[分析](#)も参照してください。

**分析プロンプト** 分析に追加されたプロンプト。ユーザーがプロンプト値を選択すると、そのプロンプトを含む分析にかぎり、その値によって表示される内容が決まります。[ダッシュボード・プロンプト](#)および[プロンプト](#)を参照してください。

**プレゼンテーション階層** プレゼンテーション・サービスやその他のクライアントで多次元モデルを公開する明示的な方法を提供する Oracle BI リポジトリのプレゼンテーション・レイヤーのオブジェクト。プレゼンテーション階層は、メンバーの選択、カスタム・メンバー・グループ、非対称型クエリーなどの分析機能を公開します。ユーザーは、プレゼンテーション階層を使用して階層ベースのクエリーを作成できます。

プレゼンテーション・サービスで、プレゼンテーション階層は階層列として表示されます。

[階層列](#)および[プレゼンテーション・レベル](#)も参照してください。

**プレゼンテーション・サービス** [Oracle BI プレゼンテーション・サービス・サーバー](#)を参照してください。

**プレゼンテーション・サービス・サーバー** [Oracle BI プレゼンテーション・サービス・サーバー](#)を参照してください。

**プレゼンテーション・テーブル** ユーザー・コミュニティにとって意味のあるカテゴリへの列の編成に使用される Oracle BI リポジトリのプレゼンテーション・レイヤーのオブジェクト。プレゼンテーション・テーブルには、1つ以上の論理テーブルから列を含めることができます。プレゼンテーション・テーブルの名前とオブジェクト・プロパティは論理テーブルのプロパティとは無関係です。

**プレゼンテーション・レイヤー** カスタマイズされたセキュアな役割ベースのビジネス・モデルのビューをユーザーに表示する手段を提供します。Oracle BI リポジトリのビジネス・モデルとマッピング・レイヤーに抽象性のレベルを加えます。プレゼンテーション・レイヤーは、プレゼンテーション・サービスやその他のクライアント・ツール、アプリケーションで分析を作成したユーザーに表示されるデータのビューを提供します。

[ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー](#)も参照してください。

**プレゼンテーション・レベル** ロールアップしたり、他のレベルからロールアップされる、Oracle BI リポジトリ内のプレゼンテーション階層のコンポーネント。プレゼンテーション・レベルは、プレゼンテーション・サービスで階層列内のレベルとして表示されます。

階層レベルおよびプレゼンテーション階層も参照してください。

**プロセス・インスタンス** BI インスタンスに関連付けられている、個々のワークステーション上の一意のプロセス。

BI インスタンスも参照してください。

**プロンプト** フィルタの一種で、コンテンツ・デザイナーによるデータ値の作成および指定、およびエンド・ユーザーによる特定のデータ値の選択から、ダッシュボードやダッシュボード・ページに組み込まれた個別または複数の分析に結果セットを提供できるようにします。プロンプトによって既存のダッシュボードおよび分析のフィルタの拡張や改良が行われます。

プロンプトのタイプには、列プロンプト、通貨プロンプト、イメージ・プロンプトおよび変数プロンプトがあります。

列プロンプト、通貨プロンプト、フィルタ、イメージ・プロンプトおよび変数プロンプトも参照してください。

**プロンプト・リンク** ダッシュボード・ページへのパスとダッシュボード・プロンプトの単純化されたプレゼンテーションを取り込みます。

ブックマーク・リンクを参照してください。

**変換** データベースから他の場所(他のデータベースの場合もある)に移動する際にデータに行われる処理。一部の変換は、通常、トランザクション・システムからデータ・ウェアハウス・システムへの移動時にデータに対して行われます。

**変数** 管理タスクを効率化したり、変化するデータ環境に合わせてメタデータの内容を動的に変更するために使用される Oracle BI リポジトリ内のオブジェクト。

変数は次のいずれかのタイプです:

リポジトリ変数には2種類ありますが、任意の時点の1つの値を持ちます。リポジトリ変数は、静的および動的です。セッション変数は、各ユーザーのログイン時に作成され、値が割り当てられます。セッション変数には、システムとシステム以外の2種類があります。

**変数プロンプト** ダッシュボードに表示する値を、ユーザーが変数プロンプトで指定された値から選択できます。変数プロンプトは列データに依存するのではなく、ユーザーが分析の列データを操作(加算や乗算など)できるようにします。

プロンプトも参照してください。

**別名テーブル** 別の物理テーブルをソースとして参照する物理テーブル。1つの物理テーブルに様々な役割を設定する必要がある場合に、別名テーブルを使用すると、テーブルごとにキー、名前および結合を変えて複数のテーブルを設定できます。別名テーブルの名前は物理 SQL クエリーで使用されるため、別名テーブルを使用して意味のあるテーブル名にし、SQL 文を読みやすくすることもできます。

**ホーム・ページ** 直観的で、タスク・ベースの方法でプレゼンテーション・サービスの機能を開始します。ホーム・ページはセクションに分かれており、各セクションでは、特定のタスクを素早く開始したり、オブジェクトを検索したり、テクニカル・ドキュメントにアクセスできます。

**ミッション・ステートメント** ビジョンを達成するために必要な主要なビジネス・ゴールと優先度を指定したスコアカード内のステートメント。

Oracle Scorecard and Strategy Management およびビジョン・ステートメントを参照してください。

**メジャー列** レコードごとに変化し、合計および集計が可能な列。売上金額や注文数量はメジャーの代表例です。メジャーは、クエリー時にデータ・ソースから計算されます。

メジャー列は、Oracle BI リポジトリ(通常はファクト・テーブル)またはプレゼンテーション・サービスで表示されます。

**メタデータ** データに関するデータ。メタデータ・オブジェクトには、スキーマの説明(テーブル、列、データ型、主キー、外部キーなど)と論理構造(ファクト・テーブル、次元、論理テーブル・ソース・マッピングなど)が含まれます。

Oracle BI リポジトリは、Oracle BI サーバーによってクエリーの処理に使用されるメタデータで構成されます。

**メタデータ・ディクショナリ** 列などのメタデータ・オブジェクトについて、そのプロパティや他のメタデータ・オブジェクトとの関係などが記述された静的な XML ドキュメントのセット。メタデータ・ディクショナリは、ユーザーがリポジトリ・オブジェクトのメトリックや属性の詳細を得る場合に役立ちます。

**目標** 企業の戦略をまとめたスコアカード内の要求される成果または望ましい結果。

**イニシアティブ** および **Oracle Scorecard and Strategy Management** も参照してください。

**リポジトリ** **Oracle BI リポジトリ** を参照してください。

**リポジトリ変数** **変数** を参照してください。

**列** Oracle BI リポジトリでは、列は、物理列、論理列またはプレゼンテーション列です。

プレゼンテーション・サービスでは、分析によって返される個々のデータが示されます。列、およびフィルタや選択ステップによって分析に含まれるデータが決まります。列には、格納される情報のタイプ(アカウント、連絡先など)を示す名前も付けられています。

**分析、属性列、階層列** および **メジャー列** も参照してください。

**列フィルタ** **フィルタ** を参照してください。

**列プロンプト** フィルタのタイプの1つで、特定の値プロンプトをデータ列に作成できるようにします。ダッシュボードまたは分析に単体として存在させることも、既存のダッシュボードおよび分析フィルタの拡張または改良に使用することもできます。**プロンプト** も参照してください。

**レベル** **階層レベル** を参照してください。

**レベル・スキップ階層** 一部のメンバーが特定の祖先レベルの値を持たない階層。たとえば、米国で、コロンビア特別区のワシントン市は州に属していません。州がなくても、国レベル(米国)からワシントン以下にユーザーが移動できることが期待されます。

**階層** も参照してください。

**レポート** クエリーの実行からユーザーに返される、Oracle BI Publisher を使用して作成されるレスポンス。レポートは、書式設定、ダッシュボード・ページでの表示、Oracle BI プレゼンテーション・カタログでの保存および他のユーザーとの共有が可能です。

**分析** も参照してください。

**論理 SQL** Oracle BI サーバーによって解釈される SQL 文。Oracle BI サーバーの論理 SQL には、標準の SQL と AGO、TODATE、EVALUATE などの特別な関数(拡張 SQL)が含まれます。

ユーザーが要求を行うと、プレゼンテーション・サービスなどのクライアントは、論理 SQL を Oracle BI サーバーに送信します。また、論理 SQL はビジネス・モデルとマッピング・レイヤーで使用され、異機種データベース・アクセスと移植を可能にします。Oracle BI サーバーは、論理 SQL を、ソース・データベースで解釈可能な物理 SQL に変換します。

**論理結合** 論理テーブル間の関係を表す結合。論理結合は、物理的な結合ではなく概念上の結合です。つまり、特定のキーまたは列を結合しません。1つの論理結合が、多数の物理結合に相当することがあります。

**論理テーブル** Oracle BI リポジトリのビジネス・モデルとマッピング・レイヤーのテーブル・オブジェクト。1つの論理テーブルは、1つ以上の物理テーブルにマップできます。論理テーブルは、ファクト・テーブルまたは次元テーブルのいずれでもかまいません。

**次元テーブル** および **ファクト・テーブル** も参照してください。

**論理テーブル・ソース** Oracle BI リポジトリのビジネス・モデルとマッピング・レイヤーのオブジェクトで、1つの論理テーブルから1つ以上の物理テーブルへのマッピングを定義します。また、物理レイヤーと、ビジネス・モデルおよびマッピング・レイヤーとの間で発生する変換の指定、および集計ナビゲーションと断片化の実現にも物理から論理へのマッピングを使用できます。

**論理表示フォルダ** ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーでのオブジェクトの編成に使用されるフォルダ。メタデータ上の意味はありません。

**論理レイヤー** [ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー](#)を参照してください。

**論理レベル** ロールアップしたり、他のレベルからロールアップされる、Oracle BI リポジトリ内のレベル・ベースの階層のコンポーネント。

親子階層では、祖先と子孫の間にメタデータの論理レベル・オブジェクトとして表されない、暗黙的なメンバー間のレベルがあります。親子階層には論理レベル・オブジェクトも含まれますが、それらのレベルはシステムで生成されたもので、全メンバーの集計を可能にするためにのみ存在します。

[次元](#)および[階層](#)を参照してください。

# 索引

## A - Z

BI サーバー  
 キャッシュの設定, 76  
 BMM。「ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー」を参照, 25  
 ClassType プロパティ, 24  
 Description プロパティ, 24  
 FinancialManagementAnalytics フォルダ, 26  
 Gen (世代)プロパティ, 24  
 Level プロパティ, 24  
 Name プロパティ, 24  
 Oracle BI EE  
 関連ドキュメント, 9  
 Oracle BI プレゼンテーション・カタログ, 26  
 Oracle Financial Management Analytics の開始, 65  
 Oracle Financial Management Analytics の起動, 65  
 Parent Key プロパティ, 24  
 rpd ファイル。「リポジトリ・ファイル」を参照  
 RPD ファイルでのデフォルト設定, 43  
 Shared Services , 11  
 ShortName プロパティ, 24  
 Sort Order プロパティ, 24  
 URL, 65  
 Web カタログ, 26

## あ行

値次元, 23  
 アンインストール, 41  
 アーキテクチャ, 19  
 インストール, 31  
 アンインストール, 41  
 カスタム, 37  
 完全, 32  
 構成, 43  
 デフォルトのパス, 31

ハードウェアおよびソフトウェアの前提条件, 27

インストールの削除, 41  
 エンティティ次元, 23

## か行

会社のロゴ, 72  
 カスタマイズ, 70  
 会社のロゴの追加, 72  
 財務値のスケールリング, 67  
 ダッシュボード・レポートの非表示, 73  
 プロセス管理レポートでの日数の設定, 69  
 列のソート, 68  
 レポート名の変更, 72  
 カスタム・インストール, 37  
 カスタム次元, 23  
 名前変更, 43  
 カスタム次元の名前変更, 43  
 カスタム・ダッシュボード, 67  
 カタログ, 26  
 デフォルトの場所, 45  
 場所, 45  
 勘定科目グループ, 45  
 勘定科目次元, 23  
 勘定科目の階層, 45  
 完全なインストール, 32  
 期間次元, 23  
 「基準」タブ, 67  
 キャッシュの設定  
 クラスタ環境, 77  
 単一の BI サーバー, 76  
 クラスタ環境  
 グローバル・キャッシュ設定, 77  
 グローバル・キャッシュ設定, 77  
 「結果」タブ, 67  
 構成, 43  
 構成ユーティリティの実行, 45  
 再起動, 43

次元およびメンバーの選択, 45  
 コンポーネント, 19, 28  
 サポートされているバージョン, 28

## さ行

サポートされているコンポーネントのバージョン, 28  
 財務値  
     スケーリング, 67  
 財務値のスケーリング, 67  
 シナリオ次元, 23  
 次元  
     Financial Management の標準, 23  
     カスタム次元の名前変更, 43  
 条件  
     条件のフォーマット, 70  
 条件のフォーマット, 70  
 整合性チェック・マネージャ, 22  
 セキュリティ, 11  
 接続プール  
     パラメータの設定, 43  
 前提条件  
     ソフトウェア, 27  
     ハードウェア, 27  
 ソフトウェア, 28  
 ソフトウェアの前提条件, 27

## た行

ダッシュボード  
     カスタマイズ, 67  
     非表示, 73  
 デフォルト  
     RPD ファイルでの設定, 43  
     場所, 45  
 デフォルトのインストール・パス, 31  
 デフォルトのパスワード, 22  
 データ・セキュリティ, 11  
 データベース・チューニング, 75  
 データベース・リポジトリ, 28  
 年次元, 23  
 ドキュメント  
     関係, 9  
     ライブラリ・リンク, 9  
 ドキュメント・ライブラリへのリンク, 9

## な行

内部取引(ICP)次元, 23

## は行

ハードウェアの前提条件, 27  
 パスワード, 22  
 パフォーマンス・チューニング, 75  
 パフォーマンスのチューニング, 75  
 標準次元, 23  
 ビジネス・モデルとマッピング・レイヤー (BMM), 25  
 ビュー次元, 23  
 物理レイヤー, 23  
     標準次元, 23  
     メンバー・プロパティ, 24  
 部分インストール, 37  
 プレゼンテーション・レイヤー, 25  
 プロセス管理レポート  
     日数の設定, 69  
 プロパティ, 24  
 「プロンプト」タブ, 67  
 プール・パラメータ, 43

## ま行

メンバー・プロパティ, 24

## や行

ユーザー  
     認証, 11

## ら行

リポジトリ, 28  
     デフォルトの設定, 43  
     場所, 45  
     ビジネス・モデルとマッピング, 25  
     物理レイヤー, 23  
     プレゼンテーション・レイヤー, 25  
     マージ, 25  
 リポジトリ・ファイル, 22  
     警告メッセージ, 22  
     整合性チェック, 22  
     デフォルトのパスワード, 22  
 リポジトリ・ファイルに関する警告メッセージ, 22  
 レイヤー  
     ビジネス・モデルとマッピング, 25

物理, [23](#)

プレゼンテーション, [25](#)

列

ソート, [68](#)

列のソート, [68](#)

レポート

財務値のスケールリング, [67](#)

名前の変更, [72](#)

日数の設定, [69](#)

非表示, [73](#)

列のソート, [68](#)

レポートの基準, [67](#)

ログイン URL, [65](#)

ロゴ, [72](#)

論理テーブル, [25](#)

